

---

# ゼロ魔転生生活

arasi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロ魔転生生活

### 【コード】

N9101R

### 【作者名】

arasii

### 【あらすじ】

トラックにひかれ目が覚めたら赤ん坊になった男の話

26歳独身 男 若干オタク気味 運無し 趣味 本 テレビ 知識収集

親より早く死ぬこと（自殺以外で）

将来の夢は金もちになりニートになること

中学の頃授業をサボりまくって成績悪く、仕方なく入れる高校（電気工事資格が取れる）に入り

卒業後就職したくないので同じ学校の専門学校（自動車）に入学

2

卒業後親に就職しないと家を追い出すと言われしかたなく就職

そして

現在に至る

基本インドアで出社・帰宅以外ほとんど外へは出ず

買い物などは帰宅途中で済ますようにしている

とある日なんとなく目的も無く外に出た

トラックに轢かれた

轢かれる前後はよく覚えてないが何かを押していたような？

跳ね飛ばされた瞬間見たのだが間違いなく携帯をいじっていた

ラッキー

あのやろつ絶対許さん一生遊んで暮らせる金額を請求してやる……

3

目が覚めた

「あつう」

「うづつ？」

何故だ声が出ないぞ？

くそつ 事故の後遺症か 目もよく見えない

あたりを見渡すと人らしき物も見える

声を出しながら体を動かし気がついた事をアピールする

おっ気がついたな こっちにくる

あれ？

なんで抱きかかえられてるんだ？

もしかすると手足がないのか？

手足がなければ体重の半分近く無くなるらしいが

よく動かないが手足の感触があるため間違いなくある

いくら長い間昏睡してやせ細った体でもそこまで軽くなるわけがない

耳がよく聞こえない情報が一切入ってこない

うちまあいいや そのうち何とかなるだろ 眠いから寝る

1年経過

率直に言おう

俺赤ん坊??

何だこれは

あれから徐々にではあるが目が見え音は聞こえ手足の感覚が戻ってきて

状況が認識できた

俺は赤ん坊になった

これは夢に違いがないな

脳みそは現代のパソコンですら劣るスーパーコンピュータだ

昏睡が現実じゃあ何日経ってるかは知らんがこんぐらいは出来るだろう

だが夢と言うのは操作できる・・・らしい やったことないけど

これが夢だと自覚しているため操作出来てもいいのだが

ちなみによく夢かどうか頬を抓るといふのがあるが 夢の中でも痛みを感じる事ができる

何故なら脳が人格に見せている光景だからだ 脳が痛いと感じればそれは現実になる

ゆえに痛みでは夢かどうかは判断できない・・・でもおかしい

まあいい寝るのは好きだし赤ん坊を満喫していよう

漏らしたのを尻の穴まで拭かれるのは嫌でしょうがないが

やあ クリス・ド・プルトン だよ

変な名前

あれから2年たった

舌足らずだが喋れるようになりこの生活の現状が理解できた

だがよくわからない

まるでマンガの世界の中世ヨーロッパだけにタイムワープしたような  
感覚だ

レンガ作りって 城って ちっさいけど

しかも建築方法メチャクチャ何故建っていられるんだ？

ただわかるのは貧乏だったことだ 何故かって？

隙間風が吹いているからさ

よく崩れんなさ

まあいい



夜両親の話盗み聞きしたらなんでも俺が14になるころには没落貴族になるらしい

そしてさらに驚愕の事実

この世界魔法がある

そんなあほな

まあいいそこは(よくないけど)まあいい

とりあえず まずは没落貴族になることを避けねば

しかしそれは簡単 俺の持っている知識を使えば あつと言つ間に金持ちささ

8

だが問題は両親にどうやって説明するかだな

うん、無理

だっていきなり3歳児が自分たちより高度な知識ペラペラ喋りだしたら怪しむ

うゝむ どうするかしっかり考えなければ

それに上手くやれば金持ちニートになれる

ふっふっふ まだ俺は諦めてないぞ〜

よしとりあえずは

夕食時

「ちちつえ、ははつえ、ぼくにマホウをおしえてくださいゃい」

と舌足らずに言う

母親が驚いた顔で

「どうしたのクリス？」

と聞いてくる

「はやくマホウをおぼえて ちちつえとははつえのやくにたちたいんです。」

ちよつと無理があつたかな？

「しかしなあ」

と父親

「いいじゃないですか それに」

と切なそうな顔で援護してくれる母親

「そうだな」

とこれまた切なそうな顔で了承してくれた父親

「ちちうえ ははうえ ありがとうございませす」

俺が救ってやるんだよ と満面の笑みで心に思う 俺

よっしやあ魔法だがんがん覚えるぞ〜

父親は忙しく

母親も若干忙しいとの事で

とりあえず杖の契約方法を教えてもらって一人でやる

簡単に教えてもらったが杖とは自分の手の延長 魔力を溜め変化させる所と 言ったところが

ふむ むずい 契約で2週間かかっただがしかしこれで次にいけるぞ

「クリス次は『ライト』を出来るようになりましょうね。」

「はい ははっえ」

呪文を唱えてひたすらライトといい続ける

「じゃあがんばってね」

「がんばります ははっえ」

後は一人でひたすら光るまで唱え続ける

何でもコモンマジックというらしく初歩の初歩だそつだ

呪文内容は

「魔力よ杖に集まりて光となれ」

魔力を光に変換って

たしか光は電磁波の一種で電気や電磁波はすげー細かい物質・・・  
だったかな？

光を当てて回る風車とかもたしかあつたはず

これが初歩だなんて凄い初歩だな

これは要研究だな

ふむ・・・光らん

何でも父親は風のライン？とかいうやつで母親は水のドット？だそ  
うだ

よくわからんその辺の説明も聞いてないしな

まあ才能が無いほうなんだろう

「私たちの息子だからあんまり伸びないだろう」

とか言ってたし

杖がピカッと光るまでに2日かかり、なんとなくだがコツがわかった

とりあえずこのライトの呪文を変更して魔力を溜めまくる さあと  
こまで溜まるかな？

おお弱い閃光弾みたいになっ たぞ

だけでもうつらふらだ なるほどこれが精神力が尽きるってやつか  
結構きついぞ

何でも魔法はやればやるほど強くなるそうだ、とりあえずお昼寝し  
てもう一回だ

次の日はレビテーションとフライをやった

これも初歩の初歩だそうだ

・・・レビテーション（重力操作）が？初歩の初歩？

・・・これも要研究だな

フライも初歩の初歩だが これは風魔法だな

今日もぶっ倒れる寸前までやったぜい

夕食での成果報告で両親共に大変喜んでくれたどうやらずいぶんペースが早いようだ

ま 当然だな魔法は主に想像力が必要のようだし

精神年齢は29だからな しかも想像（妄想）も得意だし

1週間後にはサイレント（消音）を教えてもらおう

いやいやいや空気（音）の振動を打ち消すって

固定化とディテクトマジック（探知魔法）もその次の週には出来るようになる

・・・コモンマジックはんぱねえ

固定化は物をそのまま維持し続けるって 冷蔵庫いらねえ

ディテクトマジックを物にかけるとその成分がわかる・・・らしい感覚でって でも

マ・ジ・デ・すげえ顕微鏡やら試験薬すら使わず魔法一発って

とりあえず昼寝まで倒れる寸前まで夜寝るときはベットの中で力尽きるようにする

一応水と風のラインスペルを教えてもらったが恐らく出来ては駄目だろう

とりあえず成功しない振りをして（成功したけど）コモンマジックを2ヶ月ほどひたすらやり続ける

結果

『ライト』 目が見えなくなるほどの閃光弾を5・6発打てるようになる

『レビテーション』 を変化させて対象の重力操作をすることに成功した

なんとか1回だけ対象の重さを少し重くすることが出来る

『フライ』 だいたい20分間続けて飛べるようになった

レビテーションと組み合わせることが出来たら凄い事になりそうだ

『ディテイクトマジック』 なんとかボンヤリと構成がわかる



本当は魔法が仕掛けられてないかもわかるらしいが仕掛け方がわからん

『固定化』は直径1センチの20センチの枯れ木に倒れる寸前でかける

子供の力じゃあ折れなくなる

しばらくたち 「ははうえもじをおしえてください」と言ってみる

まだ早いと言われたが言語はともかく文字は

独学じゃあ絶対無理だからちょっと駄々をこねたらその日の夕食時に父親に報告された

そしたら先生をつけてくれると言う そんな金があったか？

次の日に紹介されたのがなんでも家で代々雇われている護衛だそうだ

「私の名前はヴァリユスです。宜しくお願ひしますねクリスマスお坊ちやま」

「よろしくねヴァリユス」

俺のほう年上だああああああ

お坊ちゃまはやめろおおおおおおおおおお

とは言えず若干引きつっているであろう笑みを浮かべる

母親から何でも曾祖父が昔魔法学院とやらに通っていた時に

使っていたらしいボロボロの教科書を貰いそれで文字を覚える

ちなみに祖父のときから学院に通ってはいないそうだ

ヴァリユスに文字を教わって教科書を読み一人でこっそりライセンス  
ペルを習得し始める

教科書の内容によると魔法というのは両親から受け継ぐらしい

つまりは風と水が出来やすいはずだ

色々話しているうちにヴァリユスの祖父が俺の曾祖父に拾われてか  
らの代々の付き合いだとか歳の近い弟が

父親の護衛についているとか色々話をした

没落することは父親から口止めされているらしく時々、希望をもっ  
ている みたいな事を言う俺に対して

つらそうな顔をする 没落させないけどな

1年後

4歳になり毎日毎日死ぬかと言っほどの魔法の連発をしまくってな  
んとか

風のドット 水のドット 土のドットになった

ちなみに土は錬金という便利すぎる魔法を覚えるために訓練した

おお気がついたら両親のレベルまで後一步

ヴァリウスに文字を教えてもらいとりあえず天才だとか色々騒が  
れるとやっかいなので

出来る魔法をこっそり増量中

魔法と同時に実戦経験はゼロだが何故か知識として覚えてる体術を  
研究開始

体術といっても合気道を若干 空手の本を読んだことがある 後そ  
の他諸々をちびっと 知っている

そして

脳はスパコン 実はプログラムが組めるのだ

パソコンで組むプログラムではなく繰り返しすることによる対応能力もしくは第6感と言われているやつ 虫の知らせとも言っね

あれは経験だからねともかく経験値をあげなければ

あと脳の処理速度を上げる訓練をやる ようは本の速読だね やりまくっていつでもこの状態に出来るようにする

集中力を維持する訓練も同時進行でやりまくる

ここまでくると死んで生まれ変わった事を信じるしかなさうだ

前世の記憶はやはり魂の記憶なのかねえ？ 子供の体だから驚くほどの速さで仕込める

1年後

風のドットの上 水のドットの上 土のドットの中まで成長

筋肉も一応つけてはいるが成長の妨げになるのでそこそこにする

家に週2回くる物売りと話す 情報を制する者は世界を制するってね

色々話をしてこの世界には炭・コークス・鉄・紙 等が高級品として売られているらしい

ふつつふ全部作り方知っている

しかも高級品の理由はメイジが作ってるからだ

工業化に成功したのはゲルマニアとかいう国だけで品を見せてもらったが

出来は・・・いまいちだな

訓練続けて1年後

風・水はラインに 土はドットの上に没落貴族まであと7年

行動開始だ

「父上 私にも領地経営のお手伝いさせてください」とだめもとで  
言ってみる

当然のことながら渋る父親

「早く覚えて父上のお手伝いをしたいのです」

苦い顔をして了承してくれた。

まあ没落することをわざわざヴァリユスにまで口止めをしているのだ、まさか「没落するから駄目だ」なんて言えまい

色々領地を見て回ったが・・・貧乏だ それにひどい有様だ

なにがひどいって汚物が・・・

なんでもマリー・アントワネットの時代も汚物だらけだったそうなの  
・疫病の元だハヤクナントカシナイト

父親の後ろをついて回って2ヶ月色々覚え 行動開始だ

回って見た中で城に近く一番貧しく領民も少ない村を貸してもらえ  
るよう交渉する

集中力持続訓練のおかげでありえないほど早く経営方法を覚え驚か  
せていたのにさらに驚かせる

ぶっちゃけ潰れても問題ないだろうレベルの物の村なのでなんとか  
成立

次の日にヴァリユスを連れて村へ向かう

その際にこの日のために作っておいたシャベルやツルハシ斧を布に  
くるんで持っていく

未熟な錬金で脆い青銅製だけど固定化でがっちがちに固めてあるの  
でちよつとやそつとじゃ壊れないはずだ

「こんなものどうするんですか？クリスマス様」とヴァリユス不自然で

はないように頼みお坊ちゃまはやめてもらったのだ

「着いてからの楽しみだよ」といいながら村に着く

村に着くと「これはこれはご子息様、今日はなんの御用で」と村長・  
・体臭クツサ 風呂入れ 風呂ないけど

この村の村民は作物もろくにとれず近くに川すらなく井戸も枯渴していてもうすでに潰れる寸前だ

「ああ今日から僕がここの村の管理を任されたんだ」と説明すると  
「作用でございますか」と若干絶望気味な顔をされた、見捨てられたと思っただろう まあいい

「この村に力仕事が出来そうな人を集めてくれ」と村長に頼み5人ほど集める 少々

布を取り用意してきた物を見せる

「クリス様これは一体」とヴァリユス、まあ当然だな錬金が出来ることを言っただけ

「ああ錬金で作ったんだ」

「錬金で！錬金が出るのですか」

「ヴァリユス、父上と母上には内緒にしといてくれ」

「なんでです？」

「なんでもだ」と会話を終了する

集まった人4人にシャベルとツルハシを渡し2つ穴を掘るように言う

「もう一方は胸まで、もう一方は水が出るまで掘るんだ」とディテイクトマジックで探した水が出そうなところを指示する

そして残った一人に斧を渡し薪を作るように言う

「じゃあ明日また来るから頼んだよ」

「クリスマス様一体何をするので」

「出来てからのお楽しみだよヴァリユス」

と残ったシャベル、ツルハシ、斧は村に置いていき今日は城に帰る



次の日村に着くと穴が2つ残念ながら水はまだ出てないが 薪が結構な量が出来ていた近くに林があるからいい感じだ

とりあえず穴のひとつに今日から汚物を入れるように指示する

「今日からここに入れること。今外にあるやつもシャベルで集めてここに入れるんだ」

「入れたら草で臭いが出てこないように草で蓋をすること」

そして薪に水系統の魔法をかけて水分を抜いていく

「クリス様は水系統も使えるのですか！」とヴァリユス

「ああ、そうだよ。ちなみにこれも内緒ね」

そしてここからが本題だ

地面を錬金の応用で掘っていく掘った底と地面が平行になり中央を広く、壁をはさんで煙の通り道を作り、入り口・出口を作る・・・出来た

「ここに薪を隙間なく詰めていって」と指示

村人数人で怪訝な顔をしながら詰めていく

詰め終わったら上から草・土をかぶせ

「明後日まで、火を絶やさないこと」

「何故です？」とヴァリユスを含め村人

「炭を作るんだ。ちなみに火が消えたら炭は出来ないから絶対に火を絶やさないでね。」

は？と言う顔になる全員

「ま、明後日になればわかるよ」と言いながら薪を用意し火をつけさせる

火がついたのを確認したら水を出すほうの穴に行き錬金の応用で穴を掘っていく

「ご息様我々がやりますので」を言ってきたので

「皆でやったほうが早い」と言う

「クリスマス様私も手伝います」とヴァリユス

日が傾き今日は帰ることにするその際に「火は消さないでね。」と釘をさす

帰り道にヴァリユスから「炭の作り方なんて一体どこで」と聞いてきたので

「本で読んだのとティティクトマジックで調べたんだ」

と嘘をつく、まさか『前世でテレビの鉄腕ダッシュで見たんだ』とは当然言えない

「へえ、すごいですね」と感心されるが家にある殆どの本を読んできたしディティクトマジックも結構高いレベルでマスターしたが本とディティクトマジックでは炭の作り方はわからないだろうなあ  
明後日、村に行く、そのときに作っておいた青銅製でさ錆びないよう固定化をかけた先端がすぼんでいる筒と

大き目のバケツを3個ほど持っていく

村に着いた

火は消えてないようだディティクトマジックで中の状況を確認して火を消す

冷めるまで待っている間に水を出すための穴を皆で掘りつつける

ちょうど水が出てきたのでバケツに汲み鍊金で泥を取り除いていき最後に煮沸する

「ほら水が出来た皆で分けて飲んで、最近はずも降ってないし水もろくに飲んでないだろう?」

「良いのですか?ご子息様」

「良いも何もそのために穴を掘ったんじゃないか」と言ったらイヤに感激された

村民に水が行き渡つたら再び穴を掘る今度は10人ほど村民が手伝ってくれた、この村には合計25人ほどしかいないので約半分だ

そのうち炭が冷めてきたので炭を取り出す

「おお本当に炭だ炭が出来てる」とヴァリユス

「なんだヴァリユス、信じてなかったのかい？」まあ当然だな

「いえそんなことは」としどろもどろで答えるヴァリユス

「あとは物売りにこの村に来てもらうようにしてこの炭と食べ物と交換してもらうんだよ」と村長に話す これまた感激していた・・・何故？

錬金で支柱を作り先端がすぼまっている方を下に向けて設置する

先端に網を張り底から炭を隙間なく敷き詰めその上に薪・砂・小さい石・中くらいの石・大き目の石を敷き詰める用に指示する

「クリスマス様これは何です？」

「これは水を漉す為の物だよ」と作業を見ながら言う

「これで漉せるのですか？」

を、終わったな

「まあ見てて」と言つて上から泥水を入れる

しばらくすると下に置いたバケツに水が溜まっていく

「おお水だ水だ」と村民が涙を流さんばかりに喜んでいて、まあ今まで泥水ぐらいしか飲み水がなかったのだらう・・・かわいそうに

「水を飲むときは煮沸するんだよ」と注意点を言い　これからは炭を売って生活するよう伝える

「それじゃあ今日はそろそろ帰ろう」とヴァリユスに伝え村を離れる

「ご子息様、この度はありがとうございました。」と頭を下げる村民達、あれは村民全員いるんじゃないか？

帰り際にヴァリユスに尋ねる

「なんかえらく感謝していたけど水はわかるけどそこまで感謝するようなことかな」

「何を言っているのですかクリス様　貴方様はあの村を救ったのですよ」とどこか尊敬のまなざし？を向けてくる

「そんなに？」

「ええ、今あちこちの村でも同じぐらいいいですからね　あの村以外はいくところは無いでしょうし」

・・・正直そこまでの事態だとは思わなかったな、まだ平和で豊かな日本人の性が抜けてないってことか

城に来た物売りにあの村に行くよう伝えしばらく日がたつと父親から呼び止められた

「クリスお前あの村で炭を作っているそうだな！」

「はい父上。作り方を本とディテイクトマジックで調べたんです」と言っておく

「凄いな！物売りが言っていたぞあんな出来のいい炭はそうそうないって」

・・・文明レベル低すぎじゃないだろうか この世界

「ほかの村々にも教えてほしい」と頼まれたので

「はい喜んで」と言う

・・・よっしゃあ計画通り

しばらくして畑を作る際に 作物との感覚をあげその隙間に肥溜めを入れて肥料にするよう伝えこれからは焼畑を絶対にしないよう

焼畑はやった時はいい作物が取れるが後々に土地がやせるからね

あとは肥溜めを錬金で熟成させてから使うよう言う

一年後には炭と作物でいい感じに栄えてきた

一応木がなくなるので途中から薪を買って炭を売るよう伝える

計画成功。もう領地を継ぐ前に没落するようなことは無いだろう

たった1年でずいぶん様変わりした

ヴァリユスは恐縮しまくりながらも家の兵団の隊長になった弟のほうは副隊長だ

その際に「私達ははそんなに強くない」見たいな事を言っていたが時期領主の権限で無理やりやらせた

「だったら今から強くなればいい」見たいな事を言ってやった・・・半分泣いていたな

俺は7歳になり魔法の訓練をぶっ倒れるまで毎日欠かさずやっていたおかげで

風のライン 水のライン 土のドット おまけに火のドットになった

途中錬金などで畑を耕す道具を作っているところを母親に見られればれてしまったが

特訓の成果で風と水と土がドットだと言って嘘をついておく やはり騒がれると面倒だし

まあ、騒がれたけど

それに両親共に若干余裕が出てきたらしくパーティーなるものに参加するようになってきた

俺も参加するよう言われたが魔法がこの歳でドットになること事態が珍しいらしく間違いなく注目されるし

イヤだと駄々をこねなんとか行かず、ここの所訓練ばかりしている

一応炭と作物は父親のアイディアということにしてもらう・・・じゃないと目立つし

最近では兵団に混じり剣の稽古と体術の稽古をつけてもらっている

最初は「クリス様はメイジなのですから」と言われたから「じゃあ杖が無かったらどうするんだ」といって黙らせた

体術の稽古のときに弱めの兵団員を倒したらメチャクチャ驚かれたまあ7歳子供がいきなり腕をつかんだ瞬間ぐりつと捻り大人を地面にひれ伏させたらそりゃあ驚くわな

「一体今のは何なんですか？」と聞かれたから「ああ僕が考えたんだよ」と言っておく、合気道だよとは言えないし

「さすがはこの領地を復興なされたクリス様だ」と感心された



ときたま自分達より位が上の貴族等に「ぜひあなた方の息子に会いたいものだ」と言われたらしく

どうしても言われ渋々数回だけパーティーにでたが

基本は城で勉強と訓練ばかりしている。やはり興味あるものは吸収が早い。

3年経過し10歳になり「そろそろ鉄でも作るか」と思い立ち父親に

「父上、鉄を作る方法を思い立ちました」と言い許可を得る

これで新しい商売が出来るかと喜んでいたなあ

昔これまたテレビで見た昔日本でやっていた精製方法をやらせる

まあ簡単に言えば炭と砂鉄と一緒に高温で燃やせば鉄が出来る

簡単な釜を作り方法を伝え領民達にやらせる

最初はうまく出来なかったがディティクトマジックを使いながら試行錯誤して

2ヶ月もするとなかなかいいのが出来てきた、後は鍛造だな

他のところからそこそこ出来る鍛冶屋と契約し日本刀の作成方法を思い出し

熱し・叩き・折り重ね・水につける　を3ヶ月近くやりながら形を作っていくように含める

新しい商品の完成だ。かなりの硬度を持つ切れ味がいい剣、しかも兵団にいるメイジたちに固定化をかけさせる

俺のは色々口を出し日本刀を作ってもらう、硬度が高いため刃が極限まで薄く加工でき、さらに固定化をかけているので

ちよつとやさつとじゃあ刃こぼれすらしらない　切れ味最高

更に和紙を作らせる

草を煮てやわらかくして粘つきのある草を探し出しそれを入れて網ですくう　超簡単

日本の昔ながらの和紙だったのにこっちの世界じゃ超高級品になっちまった

工房は作らず各家庭で作らせ、販売の値段・数量・生産量を管理する  
儲けすぎると目をつけられるからね

そんなこんなでちよつと裕福な領地に。肥溜めを作ったおかげで疫病も少なくなってきたし万々歳

更に2年たつ 12歳になった

領地経営が国に認められて新たな領地が与えられた・・・荒れ果てたけどなこれが褒美か？

国が経営していた領地が荒れ果ててるって

商人連中から色々話を聞き、この国が4カ国中最低ランクに属すると言っていたのを実感する

俺のほうはメチャクチャ訓練しまくったおかげで体術・剣術では兵団中トップクラスに

魔法のほうも 風のトライアングル 水のトライアングル 土のライオン 火のライオン になる

兵団のメイジ連中もメチャクチャ驚いていたなあ・・・ありえないって

でも小学生レベルの理科の知識があれば誰でも簡単に出来ると思うんだがなあ

火をおこすときには空中にある分子を振動させて

水を出すときは空中にある水分を集めて

ただ風と土の原理が良くわからなくとも問題ない。両方ともイメー

ジで操作するからなあ

そうそう、水系統の訓練にもなるし水の魔法で領民達の治療を始めた  
貴族様にやって下さるなんてって感謝しまくってた

月に20人ぐらい治療をしていたらメキメキ治療の腕があがって来た  
まずはディティクトマジックで病気の箇所を確認し集中的にそこに  
水を操り治療する

領民達が金を払おうとしてきたから「金目当てでやってるんじゃない  
え、俺が直してえから勝手にやってるんだ」と

ちよい格好つけて言ってやった うんハズイ

それに商売にするとあちこちから貴族が来る可能性があるしね

「領主の息子が暇つぶしで平民を治している」って思われているほ  
うが都合がいい

目をつけられると厄介だしね、それと言うのも最初は簡単な傷から  
初めて行ったら 腹痛を治すぐらいになってきたら

話を聞きつけて重病人が来るようになってきた、ディティクトマジ  
ックで調べたらおそらく盲腸だろう

前世の趣味で手当たり次第に知識を詰め込んでいったから医療関係

もあつて助かった

無事治療を完了し、しばらくしたら今度は不治の病ときやがった

今度はガンが少し時間がかかったが無事完治。一応簡単な口止めをしておく、噂を聞きつけました〜なんて大量にこられたら大変だ

そんなことをしばらく続けて気がついたら他の領地の平民がやってきたりして、しまいにはあ

遺伝子治療まで出来るようになった・・・もう治せない病気を探すほうが難しいな

遺伝子治療法は前世のときのアイディアだ

まず体の中で魔法により新たな器官を作ってそこに脊髄から取り出した万能細胞を入れて培養する

その際に遺伝子を操作をして正常にした万能細胞を増やす。ある程度増えたら今度は体中に正常な遺伝子の万能細胞をばら撒く 全身の遺伝子が正常なのと入れ替われば完了

唯一の救いは貴族連中にはそれほど知れ渡らなかつたってことだ、まあ完全無料だしねプライドのみの貴族様が

平民達と同じ扱いなんてのは耐えられないだろうし、どんな金持ちが来ても無料でやってたからね

そのおかげで平民達から『全治のクリス』なんて二つ名をもらつちまつた。ちよつと嬉しい

ちなみに兵団からわ『刹那のクリス』なんて言われている。意味は組み合った瞬間に俺にひれ伏しているからだそうだ

前に『風で水分を集め水分を分解して酸素と水素に分けてそれを燃やし維持する』なんてオリジナルトライアングルスペルを

やっていたらそれを見ていたやつらからは『獄炎のクリス』なんて物騒な二つ名をつけられちまったけど、一応内緒にもらった

しばらくしこの生活にも慣れたとはいえ日本食食べたいな〜なんて思い立ったのでこの領地に来る商人たちに聞きまくって

色々見つけそれを栽培させてみた

結果は新しい宿が出来上がった。特に何も無い我が領地、あるのは『大変珍しい味の料理』 俺が食いたかっただけなんだがなあ

しばらくしいつもの風景となった兵団連中と混じり訓練する俺達の所に一報が入ってきた

何でも亜人である『翼人』が領地に入ってきたそうだ

早速撃退する準備を始めるヴァリユスを筆頭とする兵団に「俺も行く」と言う

「危険です」と止めてくるヴァリユス以下兵団員達

「何故だ？体術でも剣術でも魔法でも、お前達には引けはとらないつもりだが」と黙らせる

「だ・旦那様に怒られます」とヴァリユス

「じゃ、許可を貰ってくる」と走り出す

しばらくして

「許可貰ってきたぞヴァリユス兵団長殿」と急遽出発・・・しかかったヴァリユスに言う

頭を落とし「わかりました。ただし危なくなったら逃げてください

ね

連れて行きたくない感を前面に出すヴァリユス

「ああ、わかった善処する」と・そっぽを向き答える俺

殆ど半泣き状態になりながら「では行きましょう」と言ったヴァリユスの言葉を合図に

苦笑しながら出発する兵団員達

ちなみに俺はヴァリユスの言うことを基本聞かない

しかし亜人なんて本で読んで知ってからどういふのだろうと思ってたからなあ

会うのが楽しみだ

翼人が出た村まで3日かかるとのことで1日目は

途中の村により温泉に浸かり一泊する

もちろんこの温泉も俺が探し出し魔法で掘らせた物だ

他の村にも公衆浴場はあるが温泉はここだけだ

俺が浸かりたいがために作ったのだ・・・快適だ文句あつか？



2日目は途中で野宿し3日目に村に着く

「ん？なんだあれ」村の中央で人盛りが出来ており何やら騒いでいる

「これはこれはクリスマス様に兵団の皆様方ようこそいらっしやいました」と、この村の村長

ちなみに、お坊ちゃま だとか 御子息様だとか呼ばれるのが嫌だ  
つたため

クリスマス様で統一させた・・・まあそれでも嫌なのだが

想像してほしい、常日頃か『様』付けて呼ばれるのを。

昔あつたなあ、高校生のころ友達に「何呼び捨てにしてんだよ」なんて言われたから「じゃあなんて呼べと？」と言ったら

「様つける」と「ふん、別にいいけど。電車の中だろうと道端だろうと 様 つけるよ？俺だったら嫌だなあ」て言ったら黙ったけど

「・・・そんなことより、この騒ぎはいったい何だ？」と気を取り直して聞く

「翼人を捕まえたのです。クリスマス様」

「何だと？」と言って走り出す 「お待ちください危険です」など  
と言ってくるが無視して走る

「クリスだどいてくれ」村民達がどいてくれて縛り上げられて転がっている翼人が見える

「これが『翼人』か」近づいて行ってよく見ようとすると

「危険ですクリス様我々の後ろに」と腕をつかまれた

「どこが危険なんだ？縛り上げられて・・・」女の子だしかも見かけは俺よりも年上で16・7と言った所か

よく見るとボロボロで・・・翼が折れている

ヴァリユスの手を捻り上げ走りよっていく

両手両足が縛り上げられていて猿轡までされている

「嚴重に縛られているがこれは誰がやったんだ？」と自分でも声が冷たくなっていくのがわかる

「こ、これは私達めが」

「この翼人に何か危害を加えられたのか？」

「いえすでに弱ってましたので」

「この翼人は何か言っていなかったのか？」・・・言葉に怒気がこもる

俺に青ざめた顔で村民が答える

「た、助けを請うておりました」

「ほう、翼人とは言え、無抵抗の、怪我を負っている、女を、貴様らは、問答無用で、縛り上げたのか」

怒りで肩が震える

「お待ちくださいクリス様、怪我を負っているとはいえ相手は『翼人』先住の魔法を放ってくる危険が・・・助けを求めているのか？」

ヴァリユスを睨みつける

「知っているだろうが、俺は女に手を挙げる趣味は無い」

「それがたとえ『亜人』であつてもだ」大声を出す

「さつさと、縄をほどけえ」腹の底から怒鳴る

「は、はい」「今すぐに」「お許しを」と口々に言う村民共

解かれた翼人に近づきディティクトマジックをかけ状態を調べる

骨が折れて衰弱してはいるが、まだ死に至る状態ではないようだ

すぐに水を使った回復魔法をかけ治療を開始する

「クリス様何を黙ってみている・・・はい畏まりました」

骨が治り傷が回復したのをディティクトマジックで調べる

一応日本刀を何時でも抜ける状態にして頬を叩き呼びかける

「おい、話は出来るか？」

「はい、なお して いただいて、ありがとうございます」

「どうやら最初から気がついていたようだ」

「一応聞くが敵対する意思はあるか？」

「ないです」

「おいヴァリユス。」

「何でしょうクリス様」

「この翼人に食事と寝床を用意しろ」

「なっ何を」

「一応監視はしておけ、抵抗できるほど体力は無いと思うがしなければお前達が納得しないだろう」翼人に聞こえるように言う

「ですが」

「ならば俺が用意する」

「・・・わかりました、仰せのままに」

「とりあえずこの村に一泊するいいな」

「了解いたしました」

夜考える、その後ヴァリユスや村長たちが言ってきたああしなければ危険だったと、先住の魔法は脅威なのだ

「そんなことはわかっている、しかし死にそんな者をあそこまでする必要があるのでか？」

「ですが」

「しゃべる事すら満足に出来無いものが呪文を唱えられるとは思えんが？」

「それは」

「助けを請うているものを虐げるのか貴様らは」

「・・・」

「よく、俺みたいな貴族は稀だと 他の領地ではよく平民が貴族に虐げられていると聞くが」

「それとこれとは」

「そうか・・・もういい話は終わりだ、出て行け」

「クリスマス様」

「でていけ」

「畏まりました」

これがこの世界の仕組みか自分達が虐げられているからと言って自分達よりも弱いものを助けようなどとは思わないってことが

朝になり翼人が気がついたと報告が入る

「入るぞ」とドアを開けヴァリユス・村長と共に小屋に入る

「あ、私を治療してくれた」

と、体を起こす

「では早速だがどうして怪我をしていた？それにどうしてここに来た、他の翼人は？」

「それは、ワイバーンに襲われて、他の人たちはたぶん……」

「そうか……それは災難だったな」

ふむどうするか、たぶんと言うことは生き残っている可能性も少なからずあると言うことが

だからと言ってこの村に置いておくわけにもいかんしな

「名前はなんと言うんだ？」

「ラコイと言います」

「村長もし他の翼人が現れたら襲われた場合を除き、極力争わずに話し合いをしこちらに連絡をしろ、いいな？」

「は、はい、了解いたしました」と言っ頭を下げる

「ヴァリユス、ラコイを連れて帰るぞ」

「なっそんな」「そんなこと」と慌てるヴァリユスと村長

「お前達も実力のある者の目が届いてないと不安だろう？」

「それはそうですが」「領主様やクリス様にご迷惑は」

「これは決定事項だ口を出すことは許さん」と言いきる

ラコイが恐る恐る聞いてくる

「私はどうなるのですか？」

「安心しろ、第一その状態じゃあ歩くことすらろくにできないだろ

うっ？」

「危害は加えんし仲間が見つかったらすぐに返してやる」

「ありがとうございます」

「さて、朝飯を食って一時したら出発だ」

「了解いたしましたクリスマス様」「ではすぐに村の者に用意させます」

道中順番に監視をしながら、監視していた兵団の男達は思った『』

『亜人とは言え、こうして見ると、結構カワイいな』』』

村に着き温泉に入れるとき誰が監視に就くが少しもめたが

ラコイは風呂に入るの初めてだと言うので村民の女性に入り方を教えてあげるよう頼み込み（おびえていたが）

監視は風呂の外周を囲んでいればいいたろうと言いつつ放ってやった・  
・どこの世界でも男は男か

入浴中の音を聞いていたせいで悶々としてやがったなあ・・・逆に悪かったかな？

やはり兵団に女性も入れるべきか？しかしなあ・・・帰ってから皆に話すか。



城に着き父親に事情を話し害は無いことをラコイとの顔合わせをさせて近くに監視つきではあるが許可が得られた

ちなみに女性兵士は皆に大賛成された・・・入れるか女性も

ラコイを保護して3カ月になった

最初にラコイに

「今後の為にも『亜人』である君と仲良くする必要がある」

と言い積極的に話しかける様話をし表に出るときは俺や兵団とともに行動させた

さすがに国にばれると面倒なことになりそうだったから

外に情報を流さないようにと領民達に言い含め 外から治療を頼みに来る連中にはラコイと合わせないようにした

領地に来る商人達に翼人について色々話を聞いたのだが

何でもどこかの国で平民の男と結婚した翼人がいるらしい

その話を商人達に領地に流してもらおうよう頼んだ

その甲斐あつてか最初はおびえていたラコイと領民達も徐々にではあるがうちとけてきたようだ

俺もちょっと興味があつたのでラコイをディティクトマジックで色々調べてみた

その結果やはり遺伝子構造が違うようだ

翼人と結婚したと聞いたが恐らく子供が出来ないもしくは孫が産まれないだろう

昔馬とシマウマを掛け合わせた結果がそうだったはずだ

一応治せなくてはならないので商人達に当の本人らに会ったら、子供が出来ないまたは孫が出来ない恐れがあるよう伝えてくれと頼んでおいた

そして、翼人と言えばやはり先住の魔法だろう。

翼人達は精霊の魔法と言っているらしいが

とりあえず成り立ちから調べ、周囲は使わせる事に反対したが「こちらに攻撃しなければ問題は無い」と納得させ

目の前で使わせたり、色々やらせてみた

簡単に言えば系統魔法は無理やり精神力で精霊？を従わせることに対して

精霊魔法はお願いして協力してもらっている、と言うのが正しいだろうか

だからこそこちらより無理なく強力な魔法が出来ると言うことだろう

一応「俺も精霊魔法が出来ると言うことになるんだけど」と駄目もとで言っただけを見たが

何でも精霊と通じ合えなければ出来ないそうだ

当然俺は精霊は見えないし声も聞こえない・・・無理だなこれは

そしてしばらくしラコイが見つかった村から

他の翼人が出たと連絡がありすぐに向かうことにした

どうやら今回は争わずに話しあったようだ村で待っているらしい

「ああ、クリスマス様お待ちしております、こちらです」

村に着き村長に案内させ待たせている小屋に向かう

扉をあけるとそこには翼人達がいた

「ラコイ!!!」

「お母さん!!!」

と、がっしり抱き合う翼人の親子

とりあえず親子水入らずで話をさせようと外へ出る

「しかしクリスマス様の読み通りこの村に翼人が現れましたね」

「読みもなにも襲われた所から一番近いのがこの村なんだ、むしろ現れない方がおかしい」

とヴァリユスと話していると小屋の方で話が終わったそうだ

「クリスマス様この度は私の娘を助けていただきくださって、ありがとうございます」

とといって頭を下げるラコイの母親

「いや、傷つき助けを求めているので助けただけだ」

我ながらくっさい台詞だ

「まあ、とりあえず母親が無事でよかったなラコイ」

「はい、クリスマス様ありがとうございます」

「一応聞くが翼人の中で傷を負っているものはいないか？いたら治すぞ」

まあ見た限りではないが一応聞かないとわからないからな

とりあえず簡単に話した後ラコイ達は森に帰ることになり別れた

「しかし、寂しくなりますねえ」とヴァリユス

「何言ってるんだ、最初さんざん反対してたくせに」

最初はあれだけ反対していた兵団達も心なしかさびしそうだ

「それは最初は警戒してましたが、話してみるとなかなかいい子でしたし」「かわいかつたしなあ」「もうちょっと一緒にいたかったなあ」

などとヴァリユス以下兵団、まあいくらか亜人に対する偏見が改ざんされたと喜んでこう

他の村々にも結構な頻度で顔を出しまくったからかなりよくなったし

53

ラコイの騒動から4ヶ月たち俺は壁にぶち当たっていた

今現在俺は風のトライアングル だけど感覚でわかるんだもうすぐスクエアになるって

スクエアっていうのは用は4つの系統を組み合わせることが出来る

実は獄炎の二つ名をつけられらときの魔法は未完成だったんだ

火を発生させると同時に火を安定させなければいけなかった・・・  
だけでもうひとつ組み合わせることが出来ないから

ばらけてしまふ・・・それにメインは風の遍在だありゃあ用はナルトの影分身だからな

遍在との知識の共有すばらしい。遠くにいなながらも知識を収集できるし、遍在だからこそ命を掛けて戦うことが出来る

風の偏平を手に入れたときの作用効果は計り知れないだからこそ是非にでも手に入りたい。スクエアを

しかしどうすればいいのかわからないドットからライン　ラインからトライアングル等にあがっていったときは

それほどの苦労がなかった　だが今回は違うあと一息というところまで来ている

精神量も十分にあるだが何故かあがらない

兵団にいるスクエアにも色々聞いたがやはりよほど追い詰められないと上がらないらしい

だがアドバイスはそれ以上聞くことができない、なぜならトライアングルであることすら内緒にしているのだ

今俺は風と水のライン　火と土のドットということになっているトライアングルになったときを詳しく聞いていたら怪しまれる

どうすればいい・・・どうすれば

しばらくしミノタウロスの情報が入ってきた

チャンスだ自身を追い詰めるにはちょうどいい・・・情報を俺でストップさせ兵団には俺から伝えるとっておく

早速手になじみ改良を加えまくった日本刀を持ち一様遺書らしきものを机の上に置き出かける「ミノタウロスの所に行つて来ると」書き置きをしほかの者に見つからないように出かける

体術・剣術また各系統魔法を組み合わせたトライアングルスペルを使えば簡単に倒せるが今回は風の系統だけを使う

フライとレビテーションを組み合わせたオリジナル飛行魔法を使い馬で3日かかる距離を半日で移動する

そしてミノタウロスが出たとされる所にたどり着く

一様エアカッターで周囲の木々を切り倒しエアハンマーで倒木を吹き飛ばす

しばらくしミノタウロスが出てきた、情報通り1体だ

日本刀を抜かず構える、鞘と柄の部分を杖の契約をしてあるため鞘から抜いても魔法は放てる



まあ本で読んだどおりだ、分厚そうな皮膚　ごつい左手の斧そして頭蓋骨でできた首飾り

サイズからして子供だろう・・・頭にくる

ミノタウロスが近寄ってくる体に緊張が走る

接近戦に持ち込まれないようにしなければ、力比べになろうものなら勝ち目は無い

『エアハンマー』

吹き飛ばす

ミノタウロスが走ってくる

トライアングルスペル『エアトルネード』

5メートル程の竜巻を発生させ吹き飛ばす

竜巻が消える前にスクエアスペル『カッタートルネード』を唱えるが不発

くそっ出ない

エアハンマー・エアカッターなどで牽制するが決定打に欠ける

ともかく近づけないようにしないと

ミノタウロスがこぶし大の石を投げつけてくる

石をよけるがとっさの事で詠唱が中断される

顔を向けたとき眼前に斧が迫ってくる

「ブモオオオオオオオオオオオオオ」

ぎりぎりよけたが右手に殴り飛ばされる

やばい

エアハンマーを放ち距離をとろうとするが踏ん張り耐えやがった  
くそっ

やばい

斧による決定打は何とか回避しているが何回か殴られアバラを痛める

やばい

呼吸がづらい

やばい

エアカッターでは奴の皮膚は切れない

エアハンマーでは奴はもう動じない

エアニードルでは奴の皮膚は貫けない

エアトルネードではもう足止めにもならない

やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい  
やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい  
ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ  
ヤバイヤバイヤバイ

ただがむしやらに魔法を放つ、放つ、放つ、放つ

死にたくない

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおお」

気がつくくと声が出ていた

「死んでたまるかああああああああああああああああああ  
ああああああああ」

よく覚えてないがミノタウロスを倒したような気がする

もうよく目が見えない腹に斧が突き刺さっている

「じほつじほつ」

精神力が底をつきかけている

血がなくなり腕が動かせない

相打ちかまあいい最後の魔法はおそらく『カッタートルネード』ス  
クエアスペルで倒したんだ

まあこんな最後になるとは思ってたがまあいい

もうじたばたしてもしょうがない

目がかすむ

誰か目の前に立っている

俺を覗き込んでいる

ちっ 仲間か 1匹だけじゃあなかったか

ク  
ソ

目が覚める

「空だ」

空が見える

ここはどこだ

辺りを見渡すが木々しか見えない

？おかしい

下を見る木の枝で組み合わされた床だ

隙間からかなり離れた所に地面が見えるどつやら木の上のようだ

「つぐ」腹やアバラなど各所が痛む

「クリス様、目が覚めたんですね」

声に顔を向けるとラコイがいた

「なんでラコイがいるんだ？」

思わず首を傾げる

「なにを言ってるんですか。大きい音が聞こえるからと他の人たち

が向かったら、倒れているミノタウロスとクリス様を見つけたんですよ。」

「そうか・・・ミノタウロスは死んでいたか？」

どこか他人事のような感じだ。実際倒した所を見ていなかったからな

「はい、体中を切り刻まれて絶命していたと聞いています。」

「でも グスツ 本当によかったクリス様が生きていて」と言っ  
て泣きついてくる

泣き止んだ所で話を聞く、先住改め、精霊の魔法を使いその場で応急処置をし

俺をこの場に連れてきて、傷の本格的な治療をしてくれたらしい  
しかし傷が傷だけになかなか治らず血も流しすぎたためかもう1週  
間近く眠っていたとの事だ

「えっ、ヴァリユスを呼びに言った?? 本当に??」

「はい、4日前に出て行ったんですけど、私達は飛ぶのが遅いので  
まだ帰って来ないんですか」

「え?その前の3日は??」

「なに言ってるんですか3日3晩ずっつと魔法をかけ続けてたんです。」

でもなかなか傷が完治しなくて。グスッ」

やばいまた泣き出しそうだ

「あっはっはっはっは、ごめんごめん そうか、そんなにひどかったか」

「ヒック、ひどいなんてものじゃありませんでした、グスッそのまま ツヒ死んじゃうかと グスッウツウツウッ」

やばいはずした

「あ、泣くな泣くな わかったからわかったから」

「所で俺の杖はどした？」

流石に抱きつかれると傷が痛む、この感じだと恐らく血がなま過ぎで傷が完治しなかったって所だろう

・・・後遺症ないだろうな ちょっとあせる

「あ、はい、すぐにお持ちしますね」と飛んでいくラコイ

いや、翼人と仲良くしといてよかった

なんてのんきな事を考えていると

「クゝリゝスゝさゝまゝ」

軽く冷や汗が出てくる、いあっはっはっは 気のせい気のせい



さ寝なおそつと

「いたああああ、あれですねえ、そうでしょうお、ク〜リ〜ス〜さ〜ま〜あ〜」かなり遠いはずなのに怒声が聞こえてくる

ちら見したら凄い形相でこっちを見ている

やばいあの乗っている馬速い、言い訳を考える暇も無い

「ヴァリユスさ〜んこつちです〜」と 余計なことを言ってくれちゃっているラコイ

その後みっちり怒られたことは言うまでもない

ヴァリユスと兵団たちは城に俺が無事だと言うことを隼便で報告し  
まだ動けない俺共々翼人達に歓迎された

意外と美味しいものを食っているみたいで大変堪能できた

俺は自分で自分を治療し大事をとってあと1日滞在することになった  
ヴァリユスになぜミノタウロスを一人で倒しに向かったのかと問い  
詰められ苦し紛れに「もう少し強くなりたかったからだ」と言っ  
たら

「そんなことで命を掛けないください」とラコイ共々泣かれた

そして翼人に見送られながら集落を去る俺達

「しっかし本当にラコイを保護してよかったなあ、あんなに歓迎されるとは思わなかった」

「ええ本当ですねえクリス様。あのとき保護してなければクリス様今頃死んでいますしねえ」と笑顔で睨んでくるヴァリユス

「わるかったよもう無茶しないよ」スクエアになったことだし、と心の中で思っておく

こっそり水水水風の適当スクエアスペルを唱えたら出来た死ぬ思いをしたかいたがあつた

「今後は外に出かける時は監視をつけさせて貰いますからねクリス様」

「もう今後は絶対に一人で無茶はしないからほんつとつに勘弁してください」と頭を下げる俺

「絶対ですよ、ちなみに帰ったらみつちりと旦那様方にもしかつてもらいますからね」

やばい、父親はともかく母親には泣かれる可能性がある

「出来ればそれも勘弁してほしいんだけど」とヴァリユスにすがり様に見て抵抗をするだけしてみるが

「駄目ですこれは決定事項です」とピシヤリと言われ城に帰るなり

延々と小言を言われ続けたのは言うまでもない

帰ったからやることはひたすら風の遍在作りだ。最初は美味く出来なかったがぶっ続けでやること1週間

なんとか1体だけ作れるようになった、監視の目をが届かない上空からこっそり外に出し

あとはひたすら組み手の型でもやらせておく

とりあえず監視がつくのは外に出てからなので城内に居る限り安全だ

しかし遍在は凄い、組み手の成果がフィードバック式に送られてくるからどんどん成長する

イメージトレーニングなんて目じゃない

ひたすら遍在を作り続けて3週間なんとか3体同時に作ることが出来るようになった

本当は遍在だけやっていたかったのだが、近辺に居た重病人を殆ど治したとはいえ、未だに断続的にちょこちょこやってくる患者さん

兵団の宿舎に設けてある診療所で暇になったときに「もうそろそろ後続人作るかぁ」ともらしたのだが周囲に居る助手代わりの水メイズたちが嫌そうな顔をする

「ですがクリス様のやる治療は高度すぎて我々にはとてもとても」  
などと言い出す

「ただどこ数年で簡単な奴ならできるようになったらどう？」と  
聞くが

「簡単な奴と言われても、こちらは水メイジのスクエアが数人がかりでやる作業を、クリス様はたった一人で行われるではないですか」  
ちなみに何故スクエアが何人もいるかと言うと、俺の噂を聞きつけ物は試しと冷かしに来たら、あまりの腕前に「弟子にしてください」などと地面に頭をこすり付けて言うてくるのでしょうがなく

「俺のことをむやみに言いふらさないこと、あと 見て技術を盗め」  
等を条件に雇ったのだが、これが中々上達しない

彼ら曰く「クリス様は凄すぎる」なんて言うて来るから

「俺は水のラインだぞ、俺に出来てスクエアが出来ないなんてことは無いだろう」

とトリステイン貴族のプライドを刺激してみるが

「くっ、それでも我々では貴方に及ばない」と言うてくる

そっぴやあここに居る奴らって忙しい時に来た奴らばっか来て早々に威張りくさってたから

「じゃあこの病人任せたぞ」なんて軽く、この世界の不治の病を

任せたら「出来るわけがない」なんていつている奴らの前でちょいちょいっと治してプライドへし折ったんだっけ

「しょうがないここ最近は一区切りついたし教えますか」なんていったらものすごくうれしそうだ

まずは体をディテクトマジックで詳しく調べることから始めさせる

「体の構造は個体差はあるけど基本的にはほぼ一緒だ。だからあとは大きく構造が違う人は通常の構造に直せばいい。」

「そんな簡単に言われましても」

「そんなこと言っても基本はこんな感じだぞ？これさえ出来れば大抵の不治の病は治せる」

「そんないいきられましても」と尚も出来なさそうに言ってくるので

「ある程度慣れてきたら色々教えるから」と言い切った後は出来ない患者が着たら呼ぶように言い含め自分の修練に向かう

今では兵団に自分が行きを、遍在2人で組み手、残りの遍在が研究。これが最近のスタイルと化しつつある

そして最近の研究の成果が出てきた

通常2人で行うペンタゴンスペルなどは血縁関係者でなければできない。というのも血が近くないと魔法が混ざらないからだ

ということは遍在は自分のコピー、つまり「遍在となら組む事が出来る」と言う訳だ

物は試しということでもやってみただが・・・見事に失敗した

今後しばらくは遍在に組ませ色々やってみるしかあるまい

ちなみに失敗の原因はコントロールの未熟とちゃんとしたスペルではなかった事

まあ、前からわかってはいたがラインやトライアングルなどの魔法は元の威力よりも増幅される傾向がある

ペンタゴンスペルともなると強大すぎて上手くコントロールが出来ないというわけだ

## 研究の成果その2

この世界には『風石』等の魔力が宿る石がある。他にもダイヤモンドなどの純度の高い鉱石等には特に魔力が宿りやすいことがわかった

だが、その他にも魔力を宿らせる方法がある

それは『固定化』だ、この魔法は物に魔力を定着させる効果があるこれを応用できないかと色々やってみた

その結果、『固定化』の呪文を変化させることで、『魔法を固定化』  
することに成功した

とりあえず日本刀にかけてみた

そもそもこの日本刀、ただでさえ良い物を使い、いい腕を持つ職人  
に、いい方法で作らせ、さらに錬金をしまくり刃先をマイクロン単位  
で薄くし固定化を掛けまくった結果・・・

岩さえ両断できるようになってしまった

この日本刀にさらに風の系統魔法である、エアカッターを固定化さ  
せる。用はただでさえ切れまくる刃にカマイタチを付加させたのだ

さらに柄の部分に宝石を埋め込み魔力を溜め込んでみた

うん・・・やりすぎた

なにせ ブンツ とふると10メートル離れた所にあるはずの岩が  
パカッ っと割れてしまう まあ普段は切れ味があがるだけにし俺  
の意思がないとカマイタチは発生しないようにしてはあるが

それでも驚異的な切れ味を誇る

他にも色々やってはいるが、どれもこれもが危険すぎる。

これらは胸の中であっておこっ

・・・もうミノタウロスすら刀一本振るだけで倒せるよ　実際に  
懲りずに1人で行ってしてみました　楽勝だった

とはいえ一応実験・研究は続けていくつもりだ　どんどん馬鹿みた  
いに強くなっていく自分が怖い



13歳になりいつもどおりにガンガンやっていたある日

「クリスマス様急患です、すぐ来てください」とお呼びがかかる

最近は教え始めた甲斐もあって診療所の助手達もものすごく上達している。もはやちよつとやそつとじゃ呼ばれなくなってきたのだがそれが呼ばれたって事は

患者を見て最初に出来たことは絶句だった。

こんなもの診なくてもわかる・・・即死だ、だが何故生きている

「貴族様お願いでございます、どうかこの女の子をどうかお救い下さいませ」

この子を連れてきた物だろう全身血だらけだ

「ああ、わかった。これは俺一人でやる皆は別室にて待っていてくれ。」

皆を追い出しディティクトマジックをかける

左腕の各所は削れ壊死寸前、腹も完全に背中まで穴が開いている、足も両足共にボロボロだ

だが、一番の問題はなぜこんな状態なのに生きていられるか、だ  
ショック死してもおかしくない、もはや生きているのが奇跡としか  
言いようのない

失血死をなぜ起こさない。血の乾き具合からして3・4日は経っている たまたまには出来すぎている

おそらく・・・口を開け八重歯を見る

通常とは違い長く鋭く尖っている

吸血鬼だ

脅威的な生命力の為治療はスムーズに進んだ

まず服を脱がしこびり付いた血を落とす

ここ最近作った体の主なビタミン剤を圧縮固形化させた錠剤を水魔法に溶かし細胞を活性化・作り上げていく

足りない血液は水と塩を混ぜ合わせ生理食塩水を作り出し血液に混ぜる

傷をほぼ治しこの子連れてきた老人に話を聞く

なんでも身寄りがない行き倒れてるこの子を拾い、しばらくしたらフードをかぶったメイジに襲われたとのことだ

実際は追ってきたメイジが正解だろう

老人にしばらくは絶対安静の上助かるかどうか分からないと嘘をつき

この子を俺が引き取ることにする

反対の声が上がったがいざというとき、そうしないと守れないと適当に言って納得させる

無事直つたらそつちに会いに行く、と老人と約束し帰らせ

この吸血鬼の少女と同じ部屋にいる事にする

部屋に入りベットに寝かせ吸血鬼の象徴である牙を削り大の字にベツトに縛り 喋れないように猿轡をかませる

いきなり起きて精霊魔法をぶつ放されたんじゃたまつたもんじゃあ  
ないからな

風の遍在を3体出し

最後の治療をして完治させ

吸血鬼を・・・起こす

目を覚まし暴れだす

・・・鉄の土台のベットに鉄のチェーンでつなげてあるはずなんだが今にも壊れそうだ

杖を突きつけてとりあえず黙らせる

猿轡を外す

「私に何をするつもり」吸血鬼が聞いてくる

「特に危害を加えるつもりはない、その証拠に傷はもう治っているだろう?」

と言って元々傷のあった所を杖で指し示す

「じゃあなに?私の体が目当て?」

と、とんでももない事を言ってきた 慌てそうになったが慌てる格好がつかないので平然と

「そのつもりなら元々話などしないはずだが?」

と何とか平常心で返す

「確かにそうね」「とうなずく

「俺はクリス。そつちの名前は？吸血鬼じゃ呼びにくいからな」

「エルザよ。同じ人が何人もいるってことは遍在ね、となるとかなりの腕前ってところかしら？」

「まあな、暴れても無駄だぞここには本体はいないしな」と念の為、嘘をつく

「とりあえずエルザ、君には2つ選択肢がある。」

「ここで死ぬか、それとも」

エルザが若干おびえた目でこちらを見る

「ここで平和に暮らすかだ」

エルザが一瞬呆けた顔をし

「えっ！！」

おーびっくりしてるびっくりしてる

「別に吸血鬼だからといってわざわざ、人間を殺すまで吸い続けな  
いといけないわけでもないんだろ？」

「それに家畜の血でも問題はないんだろ？」と本で得た知識を話す

「でも、私は吸血鬼だよ、人間の天敵とされている」などと聞いてくるので

「俺にとってはもう天敵でもないな、第一エルザ牙はどうなってる？」

と、いって手の拘束を解く

エルザは自分の口に手を入れるが

「あつ歯が欠けてる」とびっくりする

「ああ、治療のついでに調べて削っておいたんだ、生え換わるみた  
いだし別にわざわざ牙から吸う必要もないんだろ？」  
「ディティクトマジックで入念に調べたからまず間違いないだろう」

「で？どうする、ここを安住の地として平和に暮らすか。それとも、  
また追われ身の立場に戻るか。」  
「一応安心させる為に微笑んでおくか。それにどっちかって言うと言った、牙削っちゃまってこっそり  
血を吸うなんて無理だろうし」

「本当に？本当に平和に暮らせるの？」  
「今まで苦労したんだろう、  
今にも泣きそうな顔で聞いてくる」

「ああ、エルザ君が望めばね。」  
「まあ、ディティクトマジックで色々体の構造を調べさせてもらうが、問題は無いだろう」

「でも、吸血鬼の言うことなんて信用できないでしょ？」

まったく泣くほど嬉しいんだったら素直に言えばいいものを

「その点については大丈夫だ」と言って半年前に作り上げたネック

レス型のオリジナルマジックアイテムを取り出す

「これを可能な限り持っていらおう」

「え？それは何？」

「これはな」と言って近くにいる遍在をネックレスに埋め込まれた宝石に吸い込む

「魔力をためたり、使用した魔法を維持するためのアイテムで、遍在を入れればこちらの意思で出すこともできるし、中から出てくることもできる」

「さらに中から周りの様子も監視できる代物だ」

作り上げるのに苦労したんだよね。これ。風石の周りとは構造を固定化し中を空にして、別の風魔法を入れるさらに、火石を入れれば火の系統、土石を入れれば土の系統、水石を入れれば水の系統が使用可能だ

ちなみにコモンマジックは4系統とはまったくの別物だったので苦労したが、ダイヤモンド等の魔力が宿りやすい宝石で使用できる

あのあと、いやー泣かれた、よっぽど安心したのだろう。俺の用意した家畜の血を飲みネックレスを机の上に置き、すぐに寝た。

次の日からディティクトマジックで体の構造を調べ上げ前々から考えていた『体の構造を人間に近づける』為の実験をさせてもらおうよ

う頼む

少しずつ遺伝子を変えていき、新陳代謝を抑え、エネルギーの過剰摂取しなくてもいい体に変えていき、血ではなく人間と同じ食べ物でも生きていける体に変化させた

結果的に寿命が少し短くなってしまったがエルザはまったく気にしなかった、それどころか「人間の食べ物がいかにおいしかったなんて」なんて言って喜んでいた。まあ、人間でもそうだが自分が必要としている栄養分は美味しく感じる、今では血を飲むと油を飲む時みたいに気持ち悪くなるそうだ。



エルザを調べ研究すること1年たった、まあ調べると言ってもディテイクトマジックを使ってるだけだが。

エルザの体は凄かった、人間と比べて体の質そのものが違った。

そのデータを元に自分の体をいじることにした。

まずは骨、骨密度はすでに常人の倍以上にしてあったのだが、恐らくこの世界特有なのだろう。

新しい物質で作られていたのを元に可能な限りエルザに近い構成にしてみた。結果は簡単に言うと鉄からアルミに変えたって感じた。

次に筋肉。これまた筋肉も全身瞬発力と持久力を備え持つ筋肉に変えてあったのだが、エルザの筋肉は構造が違った。

通常人は1本なのに対しエルザは10本で同じ量を作っていた。当然ながら紐を太い1本で作るよりも細い紐を何本も重ねて作ったほうが丈夫になる。

心臓をいじるのはさすがに怖いので心臓以外の筋肉を全て同じようにした・・・まあ多少はエルザのオリジナルよりも劣るがそれでも、鍛えたものの倍以上の力を誇る。

ちなみに体重は元の1.5倍になってしまった、消費カロリーも1.

5倍に増えたため食事の量が増えたが。

あと前々から商人達から色々な珍しいものを買っていた。そしてある日種の状態の穀物の入っていた袋を数種類持ってきた。

もちろん言い値で買った、なんと異世界で米・大豆・そば・麦などが食べれるとは夢にも思わなかった。味噌と醤油を作るぞ。ちなみに納豆は作らん。作るの簡単だがあんまり好きじゃないし。

しかも当然ながらこちらの世界の穀物と文字通り『質』が違うはつきり言って比べ物にならない、おかげで『プルトン領で作られる穀物は最高級品』と名が売れて更に儲かることに・・・あまり有名にはなりたくないんだけど、目をつけられるし。一応今まで通り両親を言いくるめ少量高額で売って豊かになりすぎないように調整しているが。

その儲かった金で色々な珍しいものを壊れていなければ買くと商人に言っただがいろいろんな物を買っていたら、ある日原チャリ、つまり原動機つき自転車を手に入れた。

若干壊れていたものの、かなり安く手に入れられ前世での知識を元に整備しなおした。

バッテリーが上がり内部に水が入りが多少さびていたが、ディテイクトマジックで調べ錬金で、ばらすことなく治した。

専用工具も無いのにエンジンをばらしたりしたら、元に戻らないからな。

しかもバイク1台とはいえ色々な素材が使われている数えだしたら

きりが無い。ディテイクトマジックで構成を調べ何とか金属の複製にも成功した。これを工業化に成功したら産業革命が起こるだろうな・・・する気はないが。ガソリンを精製し特殊マジックアイテムだと言ひ張り乗り回す。楽しい

他にも色々買ったが・・・何故か武器が数が多い気がするがまあいいだろう。重火器数種、軍用の道具などもあったが、ことごとく壊れていた。まあ治したが

ぶつちやけ、「トリスティン征服できるんじゃないかね？」って感じた。めんどいからやらないけど。

あとは液晶テレビ（破損）、DVDプレーヤー（破損）、DVD（未开封）色々、小型発電機（破損）などを買った、のんびり治そう。

修理、研究、訓練、等をガンガンやっていたらあつという間に1年が経ってしまった。

父親から「もうそろそろお前も学院に行かなきゃな」なんて言われた

「へ？いや別にいいですよ？行かなくても」

「何を言っているんだ。公にしなかったとは言え裕福になったのはお前のおかげだ 行って来なさい」

「そうですよクリス？私たちは貧しく行けなかったのです。せめて貴方は行って来なさい」と母親

・・・いや本気で遠慮したいんだけど、めんどいし

なおも断ろうとする俺をこれまた真剣な目つきで進める両親その上  
「お前のためだ」等と言ってくる始末

いや・・・この領地をついでのんびり暮らせればいいんだけど本当に。

嘆いていても仕方が無いひっさし振りに学校に行きますか・・・嫌  
だなあ、まさか（精神年齢？）40歳になって再び学校に行くとは

治療の助手達を数人領地に残らせ他は全員他でやるように言い含める。  
なぜなら治す相手がもう殆どいないからだ。ここらへんは殆ど治し  
きってしまったため他へ移るしかない。もちろん只なんてやったら旅費が  
なくなってしまうから可能な限り安くするよう言っているが。

他にも色々学校に行くための領内での準備をしていたらエルザに「  
いっちゃやだ」おにいちゃんが行くなら私もいく」なんて駄々をこねら  
れた。そう俺はなんと『お兄ちゃん』等と言われているのだ、なつかれた  
なあ。エルザは中々の美少女だし・・・これが『妹萌え』  
と言う奴か？残念ながら俺はそういうのはよくわからん。

まあ連れて行けるわけ無いので「休みの日には帰ってくるから」と  
説得してあきらめてもらう

出発の日にはやっぱりエルザに泣きつかれ、なんとか引き離す（力が落ちたとはいえ、それでも馬鹿力）

原チャリにまたがり最低限の荷物を持って出発する。

通常馬車（約時速10km）で4週間以上はかるゝかかる距離を、原チャリでかつ飛ばしていったため（改造強化済み、リミッター解除済み）途中休んで3日だった。

トリストイン学園につき、案内係は原チャリを見た瞬間『なんだこれは』見たいな顔をしていたがスルーする、近くにいるメイドに部屋を聞こうと話しかけようとした所に

「クリス様、クリス様ではありませんか」と言いながら走ってくるメイドさん・・・やばい

「ちょ、ちょっと静に」といって静かにさせる

「君はもしかして」

「はい、前にクリス様に病を治していただきました。」

やっぱりな、まあ覚えてないけど

「すまないねえ、覚えてないんだ。今まで何百人治したかわからないから。」本当にかんりの数を治してきたからなあ

「いえ、そんなクリス様は今までたくさんの方を治してこられた

んです覚えてないのは当然です。」

「はは、すまないね」まあ、そんなことはさておき

「今年からこの学園に入ることになったんだけど。」

「まあ、それはおめでとうございます。もし何か用事がございましたら是非、お申し付けくださいませ。」と、頭を下げるメイド

「それで早速だけど、俺が『全治』だつて事は内緒で頼む。」

「え？何故ですか」

それはもちろん

「目立ちたくない。目立つために治療してたわけじゃあ無いからな。

「学院生活も地味に過ごそう。」

「はい、わかりました。」

メイドの手をふと見るとガサガサだ、まあこの世界じゃあハンドクリームなんて無いだろうし、あったとしても平民じゃあ買えないだろう

「手を出してごらん」と、言って刀の鞘を触る

「はい、何でしょう？」

服のポケットに入れてあるビタミン剤を取り出し呪文を唱え、水に混ぜて手を治療する。

「あつ、そんな私のなんて」と言って引っ込めようとしたので、手をつかむ

「治ったよ。」

「そんな、私なんかのためにクリスマス様の魔法を」

「ん？不治の病も治せるんだよ？俺は。手荒れぐらい簡単だ。」と言つてさらに呪文を唱える

土を素に手のひらサイズの蓋付きのプラスチックの入れ物を作り、その中に錠剤を溶かし簡単な細胞活性化効果付きハンドクリームを作り出す。

「とりあえず、クリームを作ったから。寝る前とか、洗いものした後とかにガサガサしてる所に薄く塗つて。」

まあ10個ほどでたりるかな？

「レビテーションをかけたから軽く持てるはずだよ？みんなで使いな。」と言い渡す

「そんな！！貴重な秘薬を私たちのような平民なんかに。」

まだそんな事を言ってくるのか

「そんな手間じゃあ無い。足りなくなつたら言いな？また作るから。」

「はっはい、ありがとうございます。」と言いなんだか涙目で抱え走っていく

なんか変なことしたかな？・・・まあいいか

その後他のメイドに部屋の場所を聞き案内してもらおう。

荷物を持つとしたが原チャリも部屋に置いておくつもりなので、断りすべてレビテーションで浮かせて持っていく。やはりこう言った行為そのものが珍しいのだろう、驚いていた。だけど、男として女の子に荷物を持たせるのはちょっと嫌だ。

部屋に入り荷物を放り適当に精神力を消費したら、目ざまし時計を引っ張り出し（メイドインジャパン）セットし、夕食まで寝る。

夕食は脂っばかった、気持ち悪い。

しかも一人前のはずなのにすごい量だ、いくら食事量が増えたとしてもあんなに食えん。明日時間を見はかって量と脂を減らすよう厨房に頼もう。

風呂に入るが中世の時代のサウナ風呂みたいな感じで最悪だったため、今度きちんとした風呂を作るとを誓い、全精神力を使い遍在を作り、適当に学院内を探索するようにし眠りに就く。遍在効果により起きたら学院の構造がわかると言っ寸法だ。魔法って便利



次の日の朝食（脂と量がすごい）を食べ、適当にぶらぶらし厨房へ行く。ちなみに始業式は4日後だ

「ちょっといいかな？」と言い裏口から厨房へ行く

「貴族様、何か御用で」

おおでかい、親方か？何がでかかって全体がでかい。

「いや食事のことですとちょっと」「あっクリスマス様じゃありませんか！！どうしました？」

昨日のハンドクリームをあげたメイドか

「いや、食事のことですとちょっとね」

「クリスマス様と申しますと昨日塗り薬を頂いたと言つ」と親方？

「ああ、まあそのクリスマスで間違いないと思うけど。」

「それは失礼しました、いや上等な塗り薬を与えてくださったそうです。」

「ん？そんなたいしたもんじゃないよ」

「いえそんな、他のものが使ったら一晩で手荒れが治りましたよ、クリスマス様」

「そうかい？まあ、足りなくなったら言いな？また作るから」

ちよつと細胞活性が強過ぎたかな？まあいいか

「ま、それはともかく食事のことなんだけど」と話を戻す

「へっへい何か御不満が？」

「いや、味は問題ないんだけど、量と脂をちよつと減らせないかい？」

「すいやせんが、それはできねんで」

「むりかい？俺の分だけちよいと減らせない？」

「それをやりやすと、他の貴族さまから差別するのかと苦情が……」

「あー」なるほどね、めんどくさいなあ

「よし、こうしよう。厨房の裏はまず他の貴族は来ないだろうから適当に机と椅子を用意するからここで食べる。そうすれば問題ないだろう？」

「ええ？そんなこと貴族さまにはさせられませんよ。」

「そうですクリス様」

「ああ、その点は大丈夫。俺は気にしない、見つかって責められても俺が貴族の権限で無理やり従わせたことに……従わせてるんだから、俺に責任が回るようにしてくれればいい。これで解決。」

そのあと、なんだかんだと言われたが、無視して邪魔にならない所に屋根と机と椅子を錬金で作ったら了承して（あきらめて）くれた。よかったよかった。

学院に来てまずやることは、学院で働いている平民達に、クリスが来たと言っことを内緒にさせることだった。

ほっといたらまず貴族・平民関係なく知れ渡る。間違いない

それは嫌だったのでまず、平民達に念を押すことから始める。

学院じゃ絶対に『全治のクリス』と呼ばないこと、むやみに治療を頼まない事・・・まあ、休み時間やら放課後やらに治してあげることにはしたんだが。

ただ、この学院に来て気になったことがある。

シエスタと言うメイドだ。

まあメイドそのものは問題ないんだが何故か黒髪黒目だ。

この世界に来て黒がかった髪・目は見たことがあるが、完全に黒と言っのは見たことが無い。

まあ「黒髪・黒目なんてめずらしいね」と聞いてみたら「あ、はい。私の一族多いんですよ」という会話をして終わった・・・うん、まあいいか、それほど他人の髪やら目やらに興味ないし、突然変異かなんかだろう。

働いている平民の家族・知り合いに病人がいると言っことで頼みに来るのも多数いる。

断るほどのことでもないので、学院に来てもらうことを条件に了承する。

その際に空いている平民の部屋を待合室みたいな状態にして待つてもらつことにする。

もともと平民達には大変に人気あつたので学院で働いている人たちに色々と手引きをしてもらうことにする。他の貴族共にはばれたら騒ぎになるからね。

ただ学院長のオールド・オスマンにはばれているらしく「ばれないようにするんじゃぞ」とすれ違いざまに言われた・・・気をつけよう。

学院が始まって授業開始30分で・・・寝た。

だってレベルが低すぎるんだもん。

勉強大嫌いだった俺でもわかる内容だ。

中学生1年、下手すると小学生で習つような内容をやっている。

レベル低い。まあしょうがない、電気どころかガスすら使つてない文明世界だ。一応時計があるから中世以下ではないようだ。

基本的な俺の一日は

朝起きる

洋服ダンスから適当に服を引っ張り出し着る。ちなみに服は3着しか持ってきていない。てかそれで十分だろう。いちいち服を選ぶのは面倒だ。

遍在を2体作り外へ訓練させる。

やっぱり体術・剣術・魔法の訓練だ。遍在は風の系統で作られ、風の系統の魔法しか放てない。

しかし、ダイヤで作った魔法、ようは精神力を溜め込めるアイテムを作ったため、それを元に遍在でもコモンマジック・他の系統を放てるようになった。

朝飯はもはや習慣になった厨房の裏に行き、そこで食べる。

授業中は寝る。ともかく寝る。教師に起こされても寝る。

最初は起こしていた教師も次第に諦めたようで起こさなくなる。魔法の勉強もすでに終わったも同然なので、起きていてもしょうがない。ちなみに教科書は速読ですでに読み終わっている。

昼飯時に授業は終わる。

昼飯を厨房裏で食べ、病人を治療。精神力を消費し眠る。

夕食は遅めにとる

こちらの身勝手な頼みを聞いている身なので厨房がひと段落したら一緒に食事を取るようにしている（やっぱり強制）時たま領地から食材を送ってもらい一緒に食べる、うけはいい。

体術・剣術の訓練をし精神力を消費し眠る。

と言う生活を繰り返す。やはり同じ日常が一番落ち着く、時々貴族に肩がぶつかつただの何だのと、くだらないことで文句を言っている貴族にぶつかり、文句を言われている最中に平民を逃がす等の行為を何回かしていたら2つ名をつけられた。『底辺のクリス』まあ『全治』のほうで騒がれるよりはましだろう。

ちなみに意味は、低姿勢で勉強がなく魔法の才もなく（入学時に水のドットと嘘をついた）プライド・家名の誇りも無いと言う意味だそう。

そんな生活を続けてはや半年、最悪な変化が訪れた。

ある日、いつものように昼飯を食いブラブラしながら寮に戻ろうとしていたらいきなり「お兄ちゃん」と、聞き覚えのある声がするほうへ振り向くと、ドゴンッ という音と共に気を失った。

## 9 (後書き)

昔、鉄・刀の作り方などはNOKで、炭・紙はダッシ○村でやってみました。

その他もろもろもテレビやら本で覚えました。調べてるものはゼロ魔関係ぐらいです。

ちなみに自動車整備士の資格もマジで持ってます・・・まあもう殆ど覚えちゃいないんですけど。



・・・お ちゃ      クリ      お兄ちゃ      クリス様      お兄ちゃん  
「

んっが」目が覚める。

ぼんやりとした頭で辺りを見渡すと、ガキ共がこちらを見ている・

・  
体がいてえ、たしか『お兄ちゃん』と言われてなんか『エアハンマ  
ー』を打ち込まれたような衝撃が・・・

目の焦点が合ってきて前のぼんやりと見ると・・・エルザだ。

ああこりや夢だ。寝よ寝よ。

「お兄ちゃん起きて」

目が覚める。

がばっ

体を起こし周りを確認する。

うん、ベットの上じゃあないな。

そして何故か目の前エルザが。その横にはラコイがいる・・・???

あれえ??なじえ??

「えつとエルザとラコイは何でここにいるのかな?」とりあえず聞いてみる。

「休みの日に帰るっていいながら、ぜんっぜん帰ってこないから会いにきたの。」

「私はエルザちゃんに行こうと誘われてきちゃいました。」

ああ、そういえばこの半年間帰るところか手紙すら送らなかったなあ。

まあ、あのあとひと悶着あり「やゝだゝかゝえゝらゝないゝ」と言っつて駄々をこねるエルザ。困っている顔をしているが反対しないラコイ。

ちなみにエルザとラコイはフェイスチェンジを入れたアイテムで牙と翼を隠してるので問題は無い。

エルザが広場で駄々をこねまくっているときに何故かオールド・オスマンがひょっこり現れ。

「まあ、だいじょぶじゃろ。平民の宿舎にも空きはある。」

等とラコイの胸を凝視しながらほざく糞爺。

「いや、えっと、それはまずいんじゃない。」と言おうものなら

「お兄ちゃん。エルザのこと嫌いなの？」と涙目上目づかいで見てくるエルザ。

まさか「吸血鬼と翼人なんでやめてください。」等と言えるわけもなく。

エルザとラコイは俺の関係者ってことで平民達には温かく。貴族達には、さげすむ目・いやらしい目・温かい目・なんか怪しい目（なんかハアハアしている）で迎えられた・・・勘弁してくれ。

「所でエルザとラコイって知り合いだったっけ？」

たしか一度も会わせたことがないはずだが。

「お兄ちゃんが学院に行った後ラコイが家に来たんだよ。」

「本当は翼が隠れるアイテムを頂いた後に行きたかったのですが、一部の仲間に反対されました。」

なるほど。まあ、そりゃそうだな。いくら助けたからと言ってすぐには信頼はできないわな。

ちなみに他の貴族の奴らに反対されてもおかしくないのに、何故こんなにもすんなりいったかという。俺が領地経営をやりすぎた

からである。

もはや我が『プルトン領』は高級ブランドになってしまった。

炭・鉄・紙は言わずもがな、コークス・食物・家畜・靴・武器・防具において、『トリステイン王国』一優れているとまで言われている。目をつけられないようにするつもりだったんだがなあ。

工場は作らず各家庭で作るようにして、販売数・値段などを細かく決め儲けすぎないようにしていたら、一応口止めはしていたものの『もつと裕福になりたい』と言って他の領地に行ってしまったものもある。まあ、やり過ぎるとその土地の木々が無くなって最悪の事態になるのだが・・・放っておいた「まっいいーか」と。

他の領地で炭・鉄・紙を安く大量に作られた為、食物・コークス・家畜・靴・武器・防具を作り始める。

ちなみに他の領地でも肥溜めを作ったり穀物を持ち出して勝手に作られたりしたのだが、いかんせん作り方が『便利に』とか『手っ取り早く』と言う感じで作るうとしていたためまったく成功はしていない。プツ

この時代は基本靴は木で作られているため大変痛い。何故かゴムが手に入った為加工し靴を作る。加工方法は『世界の果てまで行って○』で覚えた。

靴の知識は『未来創造○』で覚えた知識を使う。足に豆のできない靴の完成だ。ちなみに豆は火傷なんだぞ知ってた？

牧畜をして農作業の効率を上げ、家畜では簡単なニワトリに手を出

す。この時代のニワトリの生卵は食べれないため、食べれる生卵を産むニワトリを作る為、各種掛け合わせて作り上げる。たしかこれも『未来創○堂』

パンにも手を出すことにした。これまたこの時代のパンは固い、フランスパンより固い。

何故なら酵母菌がまだ使われてないからだ。ちなみにこれも『未来創○造堂』・・・だったかな？

成熟しきつてない酒をパン生地にませ寝かせる等の試行錯誤をし、柔らかいパンを作り上げる。

う〜ま〜い〜ぞ〜

味噌・醤油も少数高額でなかなかの売れ行きだ。領民に作り方を教える時に魔法を使うと嘘をつき、作り方を盗まれないようにする。

水蒸機関などは「さすがにやりすぎかな〜」と思って手は出していない。

作ったものの多数は領内で回し、国に税金などを払うため残りの少しを、貴族に向けて高額少数販売をする。

たまに大量に売ってくれとは言ってくるが工場等ないため無理と言つて黙らせる。

このように高級商品を作っている領地の跡取り息子な為、おおっぴらには文句を言つてこない。ちなみに商品の発案は、領民とか父親と言つことにしている。俺の周りで騒がれたくないし。

商品は高額だが売っている数が少ないため、領地はそこそこのレベルで豊かだ。

あまりに儲けすぎるとアホ共が寄ってくるしね。

トランプ、オセロなどの庶民にも簡単にできるゲームをはやらせる。  
あと遊び場も作っておいた。とはいえ簡単なんだが・・・競馬場だ。

学院にエルザ・ラコイが来て2カ月たったある日の夜、エルザが部屋にやってきた。

いつもは問答無用で開けて突撃してきたり、朝起きたらベットの中にもぐりこんでいたりと色々やっちゃってくれるエルザだが今日は、何か落ち込んでいるような、悩んでいるような雰囲気だった。

「なんだ、どうした？エルザ」

「お兄ちゃん、エルザね今日でバイバイしようと思うの。」

「どっという意味だ？」

話を聞くとエルザを襲ったメイジが学院の生徒がいるらしい。

「とりあえずそいつは誰なんだ？」

「えっ」

「逃げなきゃいけないのか、逃げなくてもいいのか調べてみないとわからないだろう？」

その日のうちに聞けるだけ情報を聞き次の日も情報を集める。

エルザのからの話によると。

相手の名前はタバサ、まず間違いなく偽名だろう。

トリスタニアとガリアの国境近くのガリアの方の村で襲われた。

髪と目が鮮やかな青とのことだ。

ガリアの青という言葉がある。特に王族は鮮やかな青だそうだ。

服装から同じ1年だろう。

それぞれ各学年は2クラスずつあるので、時たま爆発音がする隣のクラス。

明日日本人を直接見ることにして・・・まあ うんしょうがない、今日はしょうがないからエルザと一緒に寝ることにする・・・泣きそうだからね！！エルザ。ほんとだよ。良い匂いとかしないからね。よこしまな気持ちは無いよ。本当だよ・・・本当だからね。

次の日の朝・・・ろくに寝れなかった。昨日精神力を削る前にエルザが来たため助かった。

エルザはベットに入り早々寝てしまったが、起きたらもぐりこまれているほうが数倍でした。

エルザはまだタバサには見つからないとのことだから数日間遍在を仕込んだアイテムを持ってもらい、部屋にいてもらうことにする。



朝食時厨房には今日から数日間食堂で食べることをつげ、食堂でタバサを待つ。

髪と目、鮮やかな青だ。ただ王族に近いものが、直接吸血鬼退治などと言う事は通常、しないだろう。

直接見ていると気づかれる恐れがあるので、遍在を仕込んだアイテムでタバサを監視し続ける。すると赤い髪の毛をした女の子がタバサに絡んでいる。

しばらくしたら赤い髪の毛の女の子がタバサから離れ、ピンクの髪の毛の子をいじり始める。

会話の内容から赤い髪の毛のほうはキュルケ、ピンクのほうはルイズと言う名前のようだ。

しばらくしたらキュルケがまたタバサへと戻っていく。

ガリアの王族を見たことは無いが、タバサは間違いなく王族関係、しかも吸血鬼退治を一人でこなせるレベルの腕前。

あれほど目立つ『青だ』周りが気づかないはずが無い。

とすれば『護衛』か・・・

タバサの護衛にキュルケが就いていると見せかけて、フェイスチェンジでキュルケの青を隠しタバサが護衛についていると見るのが正解かな？

・・・にしても凄い量を食べるな。

授業が終わる。(今日は本当にぐっすり眠れた。)

昼食時は食堂の入り口の目立たないところに遍在入りアイテムを隠し、タバサを待つ。

タバサが入りしばらくした後、アイテムを回収し食堂に行きタバサに近いところに座る。

キュルケがタバサの隣に座っているが、しばらくするとキュルケが席を立ち男たちの方へ向かっていく。

念のため風系統の魔法で音を拾い、話を盗み聞く。

話の内容からするとキュルケはゲルマニア出身だそうだ・・・？

話の内容から演技をしているようには思えない。見当違いか？

次の日に思い切った行動に出ることにする。

エルザをタバサに引き合わせる。

エルザは驚いていた。まあそうなるわな。

「なっなんでそんなことをするの?」

「まあ話を聞け。」

「お前は吸血鬼だ。だから逆に吸血鬼とは思われない行動をする。」

「どういうこと?」

「吸血鬼は太陽の光が苦手だ。そうだろうか?」

「うん。太陽の光を浴びると火傷しちゃうんだけど。でも」

「そうだ、もうお前は火傷をしない。俺がならないようにしたんだからな。」

まあ簡単に言えば遺伝子治療をした。・・・治療するのは簡単じゃあなかったが。

「用は、朝日を浴びながらタバサの前に顔を出して。吸血鬼が食べないはずの人間の食事を一緒に食べる。普通に考えたらありえない。そうだろうか?」

「しかもお前は2ヶ月以上学院にいる。通常吸血鬼は1、2ヶ月ごとに血を飲まなければいけない。」

「あっ」

「そうだ。学院で吸血鬼騒ぎは起きていない。だからお前が疑われる可能性は低い。それにほかの生徒がいる中でいきなり襲い掛かってきたりはしないだろうからな。」

下手をすれば国際問題となる。それに吸血鬼は基本賑やかな都市には来ないとされている。

ましてやここはメイジしかいないと言ってもいい、メイジの為の学院だ、まず自分から来る吸血鬼などいな・・・そういえばここにいたな。目の前に。

次の日に行動に出る。

夜のうちに遍在を入れたアイテムを各所に配置し、タバサを待つ。

タバサが寮から出てくると同時にタバサの目の前になるよう二人で歩く。ちなみに手をつないでます。

すでにラコイにはエルザがばれる危険性があると言い、一応離れて  
いるようお願いしておく。

遍在からの映像で、タバサが驚き警戒しているのがよくわかる。

食堂に入る。予想通りタバサが俺たちの死角に座る・・・遍在アイ  
テムのおかげで見えているけどね。

エルザが食事を取っていることに困惑しているのがわかる。

キュルケがタバサに近づき少し話をしている。

内容は前にいる俺と隣にいる少女の名前・何時頃からいたのか

名前で警戒心を強め、滞在期間で困惑している。

エルザと俺に話しかけている奴等と簡単な会話をする。まあほとん  
どがエルザ目当てなんだが。

その後数日ほどは普通に過ごしてもらおう。タバサの監視つきだが気

づかない振りをしよう言い含める。まあそのタバサを俺がさらに監視しているわけだが。

その後4日ほど経過したあと予想外の事態が起きた。

夜二人だけで話がしたいとタバサが俺を呼び出した。まず間違いないエルザのことだろう。

指定された人気の無い場所に行くと、タバサが待っていた。

いつでも反応出来るよう、タバサに気づかれないように身構える。

するとタバサがいきなりひざまずき!! ……ひざまずき??

「あなたに頼みがある。『全治のクリス』どうか私の頼みを聞いて欲しい。」

・・・あれ??

「え〜と。あのミス・タバサ?」

「エルザには危害を加えないことを約束する。どうか願いを聞いて欲しい。」

・・・どうなってるんだ？

「よくわからないけどエルザを呼んで、話を聞くだけ聞いて良いかな？」と困惑気味の俺。

タバサが頷いた・・・まあ良いつてことだろう。

エルザを呼で来る。

一応最初にエルザがどういう状態で人間には危害を加えない事をあらかた説明しておく。

・・・なんかどうでも良いって感じだな？

タバサの話によるとエルザのそばにいる俺の事を調べたら、俺が不治の病すら治せる事がわかり何でも母親を治して欲しいらしい。

詳しく話を聞くのに、俺の部屋に連れ込んで話を聞くべきか、タバサの部屋に入って話を聞くべきか尋ねたら、タバサの部屋に招待された。

結論から言おう・・・さすがに王家のごとごたに巻き込まれるのはちょっと。

物凄く困った顔をして悩んでいる俺を見てなんか絶望的な顔をするタバサ。お願いそんな悲しそうな顔しないで。

ただ何故毒を盛られ母親がまだ生きているのか、何故次の跡取りである、タバサが生きているのかが物凄く気になった為、元々の原因から話すよう促す。

王になれなかったスクエアである弟と、王になった事を弟に祝福された兄。

それ以外にもには各家族構成、昔の思い出ぐらいしか聞き出せなかった。

スクエアか。

「先代の王はボケていたのか？無能と呼ばれていたんだろう？ジョゼフ王は。」

「聡明な王だったと聞いている。ただ、ジョゼフを王に指定したときのことはわからない。」

ふむ。

「タバサ、最後に聞きたいんだが、トリステインの魔法学院にどうして留学してきたんだ？」



「イザベラに行けと命令された。」

ん〜 昔仲のよかった従姉妹姫にか。

「わかった。ちょっと考えさせてくれないか？」と言うと驚いたよ  
うな、希望が見えたような表情をしてきた。  
まあ協力をしかも他国の人間から得られるとは思わなかったのだろ  
う。

隣ではエルザが俺の事を見て驚いている。まあタバサと同じ考えだ  
ったのだろう。

自分の部屋に戻り

エルザに猛反発される。

「いくらお兄ちゃんでも危ないよ。」

まあぶっちゃけ危ないと言うレベルじゃないんだろっけど。

「タバサの反応が薄すぎてよくはわからなかったが、この話を断る  
とエルザ、お前が襲われる危険性がある。」

「えっ」

「だってそうだろう？タバサの目の前にいたのは吸血鬼をかばう希望だぞ？普通に考えてお前を人質にとるぐらいの事をされてもおかしくないしな。」

と言つと押し黙ってしまふ。

一応勝手にいなくなつたら地の果てまでも追いかけて連れ戻すからなど言っておき、部屋に戻りラコイにもう安心だと説明するよう言つておく。

さて、どうするか。

ある虚無の曜日のことだった。

今日は虚無の曜日。いつもなら偏在を作り上げ、寝る。これが今までの虚無の曜日の過ごし方だったが、エルザとラコイが来てからというもの、ロックしてあるドアを精霊魔法であけたり、ドアを開かないようにしていると、エルザがドアをぶち破ったりしては

「お兄ちゃん一緒に外で遊ぼうよ」

と言ってラコイも一緒にになり、俺を引きずり出す日の方が多かった。

だが今日は、何でも学院の従業員達とトリスタニアまで一緒に買い物をするらしく、朝から静かだった。

暇だ。知らず知らずのうちに、朝早く起きる習慣が身につけてしまった為、眠れない。

原チャリでもいじるか。

基本周囲にばれると厄介なことになる恐れがある為、遠距離の移動しか使わないつもりでいたら、学院に来て以降一切触ってすらいない。足元のスペースとかごが荷物置き場と化している。

部屋でやってもいいのだが、ガソリン中毒とかになると治すのが面倒なので、人気が無い学院の裏でやることにする。

まずは固定化のかけなおしをする。エンジン内部のピストンから、ボルトの一本まで嚴重に固定化をかける。

何故こんなことをするかと言うと、部品の劣化を防ぐためだ・・・ここがまず『固定化』の凄さだろう。

『劣化』と言ってもかなりの種類がある。変形による・熱による・時間による・酸化による・磨耗による・e t c・挙げればきりが無い。『固定化』はその全てを防ぐ。前々から研究はしているが、どう力を行使しているのかが、未だによくわからない・・・話がそれたかな？

まあ簡単に言えば、通常どんなものでも無理に負荷をかけると壊れてしまう。だが、『固定化』と言うチート級の魔法をかけることにより、かなりの負荷をかけても壊れなくなる。

つまり、燃料をガソリンから二トロにかえても、エンジンが爆発しないと言うことだ。

・・・まあさすがに二トロはないが、訓練の片手間でガソリンよりも揮発性・燃烧効率がはるかに高い燃料をすでに作ってある。

嚴重にエンジンに固定化を掛け終わった後、ガソリンを抜いた原子

ヤリにこの燃料を入れてエンジンを掛ける。まずはアイドリング状態で様子を見る。

カチツ キュルルルル ドルン ドツドツドツドツドツドツドツドツドツ  
ヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァ  
ヴァヴァヴァヴァカチツキュルルルルルルルルルルルルルルルルル  
ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

・・・固定化を忘れかけたマフラーが根元から吹き飛んだ。もちろんメーターは振り切っていた。

マフラーが無くなった後なんか青っぽい炎が見えたような気がしたが・・・気のせいだろう・・・うん気のせい気のせい。

まずマフラーを錬金でつなげてから「うあじゃああ・・・火傷した。

短時間でここまで熱くなるか？普通。

マフラーを冷まし、錬金で修復し、つなげ直す。固定化を嚴重にかけ、念のためエンジン周辺の固定化をかけなおす。

そのあと燃料タンクの蓋をネジ式に錬金加工し、タンクに固定化を掛ける。また、タンクとエンジンをつなぐホースを錬金し、外れなように加工・固定化を嚴重に掛ける・・・運転中に尻の下が爆発して死んだなんて冗談じゃあない。

あとチェーン・ギヤ・その他の稼動部分も固定化を掛けておく。

鍊金でドライバーを作りアイドリングの調整をする。まあ、回転数が最低になるよう調整しとけばいいだろう・・・と、思っていたのだが、エンジンを掛けるとメーターが何故か30kmになる・・・タイヤ、回ってるなあ。

調整ではこれ以上下がらないので、2サイクルオイルを適当に作り燃料に混ぜてみる。

元々このバイクのエンジンは2サイクルだったのだが、固定化をかけたので、入れる必要がなくなった為、入れていなかった。

若干遅くはなるが、それでもタイヤは回る。当然アクセルは触ってすらない。

これ以上は調整できないので、遠心クラッチのバネを鍊金し、硬くする。

これによりエンジン回転速度が速くてもタイヤは回らない。あとは微調整をしてアクセルを回すとクラッチが繋がるようにする。最後にクラッチに影響が出ないよう固定化をかけて終了。

なんか怖いので、遍在を出し運転させてみる。

アクセルを回した後いきなり宙返りをして、遍在がバイクの下敷きになる。

・・・乗らなくてよかった。

壊れていないかチェックし念のため、全ての箇所<sup>①</sup>に満遍なく固定化をかけておく。

どう改造するか考え込む。

よし。

タイヤを重力操作で重くしまくり、魔法を定着させる。大体前輪50kg、後輪100kgぐらいかな？

ちなみにこの魔法はグラビトンと言う。完全オリジナルだ。

まあ通常、あえて重くするなんてことはしないわな。

これでウイリーは何かしなくなっただが・・・カーブが曲がれない。無理やり曲がろうとしても、遠心力で横転し運転している遍在が吹き飛ば<sup>②</sup>。

一体何km出てるんだ？このバイク。

本来この型のバイクにはつけないのだが、両側に横転防止の為、両端を重くしたサイドカーをつける。

・・・なんだこれ？

少々重くなり、衝撃が直に伝わるようになってしまったためタイヤ以外の箇所にレビテーションをかけて軽くし、定着させる。

何とかカーブ中に横転しなくなったのだが、横を向いたまま滑り結局曲がれない。速度が速すぎる。

ちよつともう辺りが暗くなってきたため、遍在アイテムに、風石と精神力を溜めた宝石を、バイクの各部につけて曲がるときに、風と重力操作で無理やり曲がれるようにする。

そのおかげで前進するときに補助し、タイヤが空回りなんてことは無くなった。

まあ、結果、飛べるバイクになっちまった。

最終結果は4人乗りができ、感覚からして、軽くて、100km以上でるバイクが出来上がってしまった。

このバイク法定速度は30kmなのだが、この世界には国土交通法なんてものは無いから、無問題。

・・・やりすぎたかな？



トリスタニアのとある店

「お兄ちゃん鈍感なんだから、このくらいの着て誘惑しないと気づかないよ〜。」

と言つて、着てないのも同然レベルに透けているネグリジエをラコイに押し付けるエルザ。

「で・でも〜」

「『でも〜』じゃないの。これは決定事項なの。」

「まったく。いつも一緒に行こうつて、言ってるのに来ないんだからこれぐらいしなきゃ。」

「だって。クリスマス様のベツトに忍び込むなんて恥ずかしい。」

「そんな涙目なつてもだ〜め。さっさと買ってきなさい。」

と、そんなエルザを呆然と見ている他の女性陣。

(え・エルザちゃんつてあんなに積極的だったんだね。)

(そ・そうみたいね。びっくりしちゃった。)

「さうて、私はこれにしようかな。」

と言って、ラコイに渡したものよりも、さらに上の下着に手を伸ばそうとするエルザ。

「え・エルザちゃんは駄目よそんなの着ちゃ。」

「そうよそんなの着ちゃ駄目。」

「えっ何で邪魔をするのお姉ちゃん達」

と言いながら、無理やり店から引きずり出す、シエスタとその同僚達。

「ちよつとはな〜し〜て〜。」

抵抗しようとするエルザだが、持ち上げられろくに抵抗できずに、店から強制的に出て行く。

ぶるるっ

「なんだ？なんか寒気がするぞ？」

「だけどここまでバイクばらしちゃったら、今更止めれないしなあ。」

「ちやっちやと終わらすかあ。」

## 次の日の夜

さすがに話の内容がやばすぎるため、学院ではなくトリスタニアにある宿で部屋を借り、別々に入り密談をする。

内容が内容だけに、午前中にエルザに「まあ、危険すぎるから、どうにか断ってくる。」と嘘を言っておく。

・・・信じないよな〜さすがに。

「タバサの母親を治すにあたって、いくつかの条件があるんだけど、いいかい？」

「話して。」

「ジョセフ王への復讐を諦める・たとえなにかあっても俺の名前を出さない・ガリア国内にて信用できる者を仲間にする・次回の呼び出しが来たら俺に教える・作戦は俺が考える。」

「これを守れると言うのなら協力しよう。」

「それでいい。」

タバサが頷く。 あっさり。

「えっと、考えた？ やっぱり復讐したいなんて言われたら、堪ったもんじゃないんだけど。」

「大丈夫、復讐は諦める。」

・・・その返答の早さが逆に不安なんだけど。

とりあえず今はお互いに過度の接触は避ける。 指示が来たときの知らせ方等を話す。

「所でそれは何？」

と、腰に挿した日本刀を指差す。

「ああ、これは杖だ。」

「学院で持っていないかった。」

「学院内で持つにはちょっとな。」

「そう。」

とりあえず話が終わり、別々に宿を出て学院に戻る。

まあ、エルザには聞いたただされたけどね・・・もちろん断ったと言ったさ？

信じたかなあ 無理だろうなあ

・・・ま、なんとかなるだろう。

後日、遍在入りのアイテム（遍石と命名）を、病気の診断アイテムだと偽り、タバサに渡す。

「使用方法は、この石をなにか堅いもので3回たたく。そのあと病人にもたせて、光ったら終了だ。」

この遍石、普段は魔力消費を抑える為にいわゆる、スリープモードにしてある。

こうすることにより、1週間分の魔力で作った遍在が、1ヶ月持つようになる。

「後は俺の所に持ってくれば、どういふ状況かわかる。」

「わかった。」

その次の日はすでにタバサは学院からいなくなっており（注・エ  
ルザ調べ）、すでに母親のもとに行ったようだ。

3週間ほど経ったある日の夜、タバサが部屋にきた。

「これを」と言い、遍石を返してくる。

まあ遍在のフィードバック効果で、結果は知ってるんだけどね。

診断結果は、全身に水系統の『何か』が混じっていて、そのせいで脳に障害が起きている。

また、その『何か』はとても強力で、全てを取り除くのに最低2ヶ月はかかるだろう。

それを伝えると、タバサは震えながら俯き、涙を零した。

ちよつと、抱きしめてあげたい衝動に駆られつつ、少し待つ。

「今治すのはまずい。それと、次に互いが接触するのは、指令が来たときか信頼できる者が見つかってからだ。」

「わかった」

部屋を出て行くこうとするタバサが、振り返り尋ねてくる。

「どうしてここままでしてくれるの」

「仮にも『一国の王に復讐する』なんて、大それた事を決意したやつが、断られたぐらいで諦めるとは思わない。最悪『力づくでも言うことを聞かせよう』とかするんじゃないか？」

「応弱者で通ってるしね。」

「・・・それは」

反論しないタバサ。

まあわかっていたとは言え、冷や汗が出てくる。

あぶねーいくら俺でも、エルザやラコイを人質にとられでもしたら、どうにもならん。

ドアに手をかけながら「迷惑をかけてすまない。・・・それとありがとう。」

と言い 部屋を出て行くタバサ。

『頑張って何とかしてやるっ』と、思う単純な俺。



ま、  
助けてやるか。

タバサとの話し合いをした次の日。

タバサを助けると言うことは下手を打つと1国を相手にしなければいけない。

体を鍛えなおすことにする。

いつもは今の筋肉量を維持する為の、ちょっとした運動をしているのだが。

今日は、遍在2体との『待った無し』のマジ組み手をする。

とりあえずリミッターを、約50%まで解除し、組み手を始める。

約10分後、酸欠で体が鈍り、遍在にぼこぼこにされる。

遍在の体は風系統の魔力で構成されているため、酸素を必要としない。

・・・この程度で疲れてはいけない気がする。

・・・久しぶりに体の改造でもやるか。

まずは酸欠対策だ。

遍在を3体補助につけ、横隔膜の真ん中に一本の丈夫な筋をはり、神経を通す。

横隔膜を左右別々に動かせるようにする。

これで横隔膜を左右別々に動かすと、左右別々に吸ったり吐いたりすることが出来る・・・はずだ。

肺からのどに繋がる気管を二つにわけ、少し太くし弁をつけ、空気を鼻から吸い口から吐くように作る。

遍在に水系統の魔法を応用して、横隔膜を別々に動かさせ、効果を試す。

後はしばらく遍在に協力してもらい、横隔膜の操作を覚えるだけだ。

肺に関してもう1つ。

通常肺は十分に使われていない。

空気を肺の上側から吸い、上側から出している。これだと、下のほうの空気を完全に出す前に吸っているため、100%肺胞だったっけ？ を使っていないのだ。

つまりは下から空気を出すようにすればいい。

空気を吸収する肺胞に新たな細かい気管をつなげ、弁をつけ、喉仏の下の空気を吐き出す気管につなげ逆流しないよう弁を取り付ける。

これで空気を吸いながら吐き出し、100%肺胞を使い効率よく、酸素をとりい・ら・れ・

バターン

目が覚める。

遍在が俺の口に袋を当てて、同じ空気を吸わせてる。

・・・どうやら過剰に酸素を吸収しすぎで死ぬ所だったようだ。

やりすぎたか。

とりあえず、肺胞から伸びている気管の弁を使い閉じ、空気を取り入れる所にも逆流しないようしておく。

まあ今は横隔膜を操作することに慣れよう。

あと目もいじっておく。

目の瞳の部分の、薄皮一枚下の部分にレンズを形成する。

たしかこんな手術があったはずだ。名前は忘れたけど。

レンズを調整し視力を高める。

いくら現代日本よりも、目に良い暮らしをしているとは言え、文明生活をしていると目は悪くなる。

とりあえず100メートルぐらい先の、人物の顔が判別出来れば十分だろう。

132

ちなみにこの時点で、全力疾走を1時間ぐらいしていても息切れを起こさなくなった。

まあ、激しく疲れたが。

まあ、あと他にも色々いじっておこう。

頭を高速回転させると、血液が頭に来る。

これは酸素と栄養分を脳に送っているからだ。

血液の循環を少しいじり、脳に酸素がいきやすくなる。

あと首の下に栄養分を溜めておく袋を作る。

脳を活発化させたときに、栄養分を送りさらに動く用にした。

3日後にまた、同じ条件で組み手をやる。

横隔膜の操作も出来るようになっていたので、50分以上軽がる  
続けられる。

・・・まだ、肺胞から伸びている気管を一気に使用すると死ぬ恐れ  
があるため、少しずつ開けていき量調整などを覚えていく。

あれからちよいと月日が経ち、タバサの秘密任務にも何度か立ち会った。

梟便が来て、竜が迎えに来る。

さすがに堂々一緒に行くのは危険なので、遍石で作ったアクセサリを渡すことにした。

2つのイヤリングと指輪だ。

1つ目のイヤリングは『見ること』が出来る。遍在の欠片が辺りの光景を送ってくれる。

2つ目のイヤリングは『伝えること』が出来る。遍在の欠片が俺の言葉を伝えてくれる。

3つ目の指輪は『音を拾うこと』が出来る。遍在の欠片が周囲の音を伝えてくれる。

俺が風のスクエアと言うことは教えてないので、特殊なマジックアイテムだと言って渡した。

ちなみにこのアイテム、小型化したので容量が少なすぎて、考える事とか他の事が一切出来ない。

その分持続期間を延ばせるだけ延ばした結果、ちよいちよ節約して、1週間持つ。

何度か任務の内容を見て思ったんだが。タバサがもし父親似だとすると、ガリアの前王は当然の選択をしたといえよう。

・・・イザベラの気持ちに気づいてやれ、タバサ。

つーかありえんだろう、ガリアほどの大国が2月に裏の仕事が2・3回あるかないかって。

1回目は二ートの貴族の息子の復帰だった。

そんな裏仕事があつてたまるか！！イザベラの苦勞が目に見えかぶ。まず間違いなく必死こいて回したんだろうなあ。

2回目は、裏切り者の始末。

・・・とは言ってもタバサよりも格下だったけど。極力傷ついてほしくないんだろうなあ。

3回目は、自身の護衛。

まあ、茶番だったが。最終的に裸踊りまでさせられて、お咎めなしって、イザベラ・・・不憫な。

ちなみにこのとき出会ったカステルモールに、仲間になってもらっ



た。

すんなり信用するのは危ないので、遍石で作ったアイテムを連絡用マジックアイテムと偽り？渡させ、大丈夫かどうかを見たけど。

最初予想したとおり、トリスティン魔法学院に留学させたのは、トリスタリアに亡命か逃げさせるためだろう。まあ、タバサが逃げなかったのは予想外だったんだろうけど。

カステルモールが仲間になりまずやったことは、ジョセフ王の情報収集だった。

集まった情報を整理すると、ジョセフ王もかなり心情的につらかったことが伺える。

何で周りは気づかないのかなあ？

ちなみに、カステルモール曰く「東薔薇騎士団一同従います。」見たいな事を言ってきたので、「隠密行動だこの馬鹿！！」と言ってやりたかったが、タバサに言ってやんわりと断ってもらった。

それから更に月日は進み、今は2年生に進級するための進級試験が、目前に迫っていた。

別に試験そのものは問題なかった、適当に呪文を唱えるだけなんだから。

ただあのハゲやろうがいった言葉が問題だった。

「呪文により出てくるものを若干ではありますが、選ぶことが可能です。」

等と言ったことがエルザとラコイの耳に入っちゃった。

「ねえねえお兄ちゃん、使い魔召還で私達を呼び出して。」

「そんなむちゃくちゃな。」

「でもクリス様、コルベール先生が選べるって。」

「若干が抜けてるぞ、ラコイ。」

「俺も少しだけ文献見てみたが、呪文の最後に唱えるキーワードで、出てくるものを操作出来るらしい。」

「たとえば、私の望む『強きものよ』って、言えば強いものが出てくる、みたいなの？」

「ふーん、じゃあ私達で、私達が呼び出されるキーワードを考えればいいんだねー!」

「……いや、出来るとは限らないぞ?」

「やります。私、クリス様の使い魔になりたいです。」

思わず頭を抱える。何を考えてるんだこいつらは、使い魔になるってことは自分の人生を捧げるも同然なんだぞ？

そのことを説明したら「むしろ喜んで」「なんて言ってきやがった。」

いや、俺お前らよりも早く死ぬし、特にエルザは何時までも成長しない事で絶対怪しまれるし。

まあ、いいか。普通に考えて成功するはずが無い。

成功するはずが無い！！

## 16 (後書き)

皆様にお願いがありません。

誤字指摘は大変嬉しいのですが、何話かも教えていただけるともっと嬉しいです。

今日は召喚の儀式の日だ・・・

さあこれから召喚だ・・・

召喚だろっ？これから・・・

今から呪文を唱えるからどいてくれ・・・

お願いどいて？・・・

ね、目の前で目をつむって顔上げて『キス待ち』している二人とも  
・  
・

あはは、なんでこうなった。

昨日、エルザとラロイが考えたって言うてきた、召喚の呪文は大当たりだった。

だって目の前に二人がいるんだもん。

「ミスタ？さあ、はやくコントラクト・サーヴァントをしなさい。」

どこのハゲ頭が意味不明な言葉を発しているぞ？

出来るわけねえだろ。

っは。

そうか。今見ているのはやはり、夢なんだ。

だってそうだろう？

召喚、要はワープ。

ワープは光の速さに達すると可能だとか。

だが召還の儀式を見ている限り、魔法により無理やり空間に穴を開けている。

空間に穴を、この星のこの大気も宇宙の一部。

つまり、宇宙破壊し穴を開けているのと同じことだ。

そんな膨大なエネルギーをたった一人の人間が？

ないない。

そうさ、これは夢なんだ。

長い長い夢なんだ。

あははっ、涙が出ちゃう。だって男の子だもんっ。

「?何をぶつぶつ言っているのですか?」

「さあ早く、コントラクト・サーヴァントを。」

あははは

今俺は地面に座っている。

気のせいだろうか、両隣に見知った女の子がいるような気がする。

やけに嬉しそうに腕を組んでいるが、幻覚だろう。

どおのおのおのおのおのおのおのおのおのおおんんんん

どおのおのおのおのおのおのおのおのおのおおんんんん

どおのおのおのおのおのおのおのおのおのおおんんんん

なんだあ？

さっきからづるせえなあ。

人がさっきから現実逃避しているのに。

どおのおのおのおのおのおのおのおのおのおおんんんん



そおいやあ、今日は合同授業だったな。

てーとあれは、隣のクラスの、桃髪の、あーたしか、ルイ……ズ？だっけか。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、

五つの力を司るペンタゴン、私の運命に従いし……使い魔を召喚せよっ！！」

どおおおおおおおおおおおおんんんん

うんルイズだな。おもいつきし名前言ってるし。

周囲からヒソヒソと「いつまで失敗していれば気が済むんだよ。」とか「さすがはゼロのルイズ。」など陰口が聞こえる。

……凄い威力だな、あの魔法、地面がえぐれてる。

どおおおおおおおおおおおおんんんん

「ミス・ヴァリエール。もうそろそろ時間ですし、続きは明日というところで。」

「そんなっ、あと一回、あと一回だけお願いします。」

「何回やっても結果は同じだよ、なんせ『ゼロ』なんだからな。」

はははははははははははははははははは

・・・凄いな。あの威力の爆発を起こしまくるやつをからかうなんて。

一発喰らっただけで下手すりゃ死ぬぞ。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、

五つの力を司るペンタゴン、我の運命に従いし・・・使い魔を召喚せよっ・・・」

どおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおお

うわあ、すげえ。

でも成功したようだな、砂ぼこりの中に影が見える。

ん？人か？

・・・うそだろ

ありゃあ日本人だ。

17 (後書き)

えー。

使い魔はエルザ・ラコイの兩名で。他の強い使い魔を期待していた  
方々申し訳ない。

でも、一応精霊の魔法が使える吸血鬼と翼人なんで。強いんで。こ  
れで勘弁してちょ。

18 (前書き)

更新が遅くなつてすいません。

とりあえずごらんください。

昨日の召喚は驚きの連続だった。

はしゃぎまくるエルザとは、まともな話が出来なかったため、一夜明けて落ち着いたラコイに話を聞く。

二人で並んで俺を見ていたから正確ではないが、なんでも、恐らくエルザ側にゲートが出来たらしい。

エルザがラコイの腕をつかんで、二人で無理やり入ったみたいだから、たぶんらしいが。

エルザとラコイが亜人だつてばれなきゃ良いが、もう考えてもしょうがない、諦めて現実を受け止めよう。

それにしても一番驚いたのは、日本人が出てきたことだ。

恐らく彼が答えを出してくれるだろう。この世界が夢かどうか。

初日に一見平民のように見える彼に、そのまま話しかけるのは後々彼にとっても問題が起ころうと思ひ、話しかけるタイミングを計ろうと、今日朝食を食べながら考えていたら、来たよ……ここに。

シエスタに案内されて厨房の裏へ朝食を食べに来たとの事だ。

名前は平賀才人、17歳、高校生。

話を聞いていると、まあ、想像どつりと言えはそうなんだが。

ミス・ルイズからの、扱いが酷い。床で食わせるって。

「へへ、つまり君は『異世界人』だということだね？平賀君。」

とりあえず、最初は口ごもっていたけど、色々聞いて一番聞きかたつた言葉を聞き出す。

「まあ、信じてもらえないでしょうけどそうです。」

「いや、信じないほうがおかしいと思うけど？」まあ同じ星の出身？だからね。

「へ？どうしてです？」

と、何故か周りで一緒に朝食を食べている厨房の皆さんも不思議顔。

思わずため息が出る。

「どうして？お兄ちゃん。」

お前もか、エルザ。しかもラロイも隣で、不思議そうな顔をしているし。

「まずは口の動きだ。みんな平賀君の口の発音と口の動きをよく見てらん。」

「え？どういことですか？」

「あ、違う。「と周りの皆さん。」

「平賀君、よく口の動きを見ててらん。」

「あいつはお」

「え？口の動きが、あれ？」

やっと気がついたか。

「それと、平賀君の足を見てらん。」

と皆で足を見る。

「..」



「……今度は自分の足を見てごらん？」

「で？」

ちよつとは考えろ、オマエ等。

「彼の履いているのはなんだい？」

「靴？」

「そうだね、俺達が履いているものとは比べ物にならないほど、精密に作られている靴だ。」

ばっ

皆まじまじと平賀の靴を見ている。靴の横に白いスラッシュ？見た  
いなのが入っているから恐らくナイキだろう。

「本当だ。」

それ以外にも「うお、すげえ。」とか「こんなの見たこと無い。」  
とか「貴族様でもこんなの履いている人見たこと無い。」等など。

いや、遅えよ。

「服なんかも一見ただけじゃあわからないけど、平民がまず着ているようなものじゃない。」

服、特に縫い目を皆でまじまじと見ている。

「細かく作られてる。」

「つまりは、別の所から着てって事を、信じないほうがおかしいって事だ。」

「「「なるほど。「「「」

わかってもらえて何よりだ。まあ何人かは『本当か？』見たいな顔をしていただけ。

朝食が食べ終わるころ、皆に平賀君が『異世界人』だと言う事を言いふらさないように含めておく。

「平賀君？君も周りにやたらと言わないようにね？」

「えっと何ですか？クリスさん。」

「たとえばだよ、君のクラスの友人がいきなり自分は『異世界人だ！！』なんて事言い出したら君は信じるかい？」

「信じませんね。」

ちよつと落ち込んで答える平賀君。

「だろう？ 頭おかしいんじゃないかなんて、思われてもおかしくない。」

「でもお兄ちゃん、証拠があるじゃない。」

「それも言わないほうがいいな。」

「なんで？」

「まあ、一度平民が身につけたものを着たがる貴族がいるとは思えないけど、下手すると奪われかねない。」

「え、なんでですか？ クリスさん。」

「価値が高いからだ。物好きな貴族だったら金をだすだろう。たぶんな。」

「そんなの抵抗すれば「平民は基本貴族には抵抗できない。」え？ なんでです？」

「まあ、簡単に言うと俺達貴族は地位が高いんだ。平民は殺されても基本、文句は言えない。」

「そんな、」

「この世界は基本そうなんだよ、馬鹿みただけだな。」

「クリス様、そんなことを言っただけです。他の貴族様に聞かれでもしたら。」

「とまあ、こんな感じだ。」

「まあ何か言われたら東方の出身だとしても答えなさい。」ミス・ルイズにも同じ事を言われたらしいが。

カラ〜ンカラ〜ン

学院の呼び鈴がなる。

「授業が始まるな。」寝ているだけの。

「とりあえず一緒にいこうか、教室は同じだからな。今日の夕食の時にまたここで話そう。」

そのあとシユヴルーズとかいう教師の授業があり、むりやり起こされた後、使い魔の話でルイズは失笑、何故か俺は殺気をあてられ、教室が爆発した。

爆発は凄い威力だった。

2日経った。

その間平賀君の世界、要は地球について詳しく聞いた。

特に俺の知らない部門や興味の無い知識を。

この世界はやはり現実なのだろう。

まだ不思議なこともあるが考えてもしょうがない。うん、しょうがない。

この世界で生きていこう。

まあそんなことはさておき。

とりあえず平賀君には、貴族には逆らわない事を重点的に教え、この世界の仕組みを教えた。

教えた。

教えたはずだった。

そして何故か、シエスタから平賀君が貴族と決闘をすることになったと聞かされた。

なごり

19 変更しました(前書き)

え〜とりあえず、不評だったので話を変えます。

おそらく原因は詳しい描写をほとんど入れなかったことだと思いま  
すがwww

こういうのは、やっても良いのか悪いのかよくわかりませんが。  
ではございませぬ。

19 変更しました

お昼時に、何故か決闘することになった平賀君。

下手したら殺されるって事を、もう一度しっかり教えようとしたのだが、何故か聞く耳を持たない。

そして最悪なことに俺を振り切って、他の学生に広場の場所を聞き走って行ってしまふ。

ミス・ヴァリエールが走って平賀君を追いかけていく。

どうしよう。

仮に力づく止めたとしても、絶対後々文句言われるぞ、あれじゃあ。

同じ世界出身だって事を、言っときゃあ、まだ何とかなったかも。

周りの学生の話からすると相手はギッシュって奴でドットだとか。

『青銅』って2つ名からすると土か。

しかし教え方が足りなかったかなあ？



武器が無い状態で勝てる見込みがあるなんて、何で思ったんだろう。とりあえずエルザとラコイには平賀君の所に行くよう伝え、自室に急いでいき、日本刀を取り出す。

しかし、これを渡してしまうと回収時に、厄介なことになりそうかどうか。

部屋にある、常備しておいた遍石を数個取り出し、窓から裏へと降りる。

遍石から遍在を出して錬金で剣を作り、全員で固定化をかける。剣を作る際に遍石を1つ埋め込む。

エルザとラコイから、決闘の光景を送ってもらおう。使い魔、便利だな。

まあ思っていた通り、ゴーレムをみてびっくりしてるな。あ、1発殴られてふつとんでる。

やれやれ、このままじゃあ殺されるな。

現代日本人、殺し合いすら見たことの無いだろう彼に、かけてみますか。

うまくいったら殺し合いの恐怖ってやつを、周りの馬鹿どもに植えつけられるし。

最悪決闘だから大怪我してもしようがない。

決闘をやっている広場へと、剣をぶん投げる。

遍石でフライを操作し広場に向かい上空から、平賀君の前に落とす。

そして広場へと走る。

遍石から状況がわかる。

「なんで剣が上から？」

「サイト、もうよしなさい、勝ち目なんか無いわ。」「うんぬんのやり取りの後、

「下げたくない頭は下げられー。」「と言って剣を引き抜く。

「下げろよ、馬鹿かお前は。」「と、言いたくなるのを押さえ、観衆の中に混じる。

さて遍石を使ってフォローしますか。と、思っていたら。

なんだこれは、これならいける。      ザンザンザン

まあ固定化かけまくったからなあ。

ただ、平賀君の動きがありえなかった。

普通に鍛えたとしてもあんな動きは出来ないはずだ。どういことだ？



と、思い黙っておくことにする。

一応、帰れるよう、サモンサーヴァントについての研究でもするか。

ただ不思議なのは彼のあの動きだ。

彼は剣に付与されている魔法だと、思ってたらしいがそんなものつけた覚えがない。

あの時、ルーンが光っていたから、恐らく使い魔としての彼の能力だろう。

考えなくちゃいけないことが今後増えそうだなあ。

はあ。

19 変更しました(後書き)

とりあえず話を。

人間はいろんなものに依存しています。

現代では特に、PCや携帯ですね。中毒と言っても過言ではないでしょう。

ちなみに私は『本』などですね、ぶっちゃけ会社に入社し新入社員  
の研修が1ヶ月に及びそのとき、本がほとんど読めなくなり、精神  
不安定になったのが自覚できるほどでした。まあ思いつきり蛇足で  
すがwwww

ようは、依存しているものから急に完全に離されると精神が不安定  
になる危険があるのです。

とくに才人は、すべてから離され、周の価値観すら違う世界に話さ  
れてしまったのです。近くに同じ世界出身がいるだけで随分と気が  
楽になるだろうと思ったのですが・・・

あと、クリスの慎重さが欠けた原因も『同郷』が理由です。

たとえば、遠く離れた国に一人で行った時、同郷の人間がいるだけ  
で気が随分と楽になるそうです。

たまにあるそうですが、地方から上京した人が多いらしいのですが、  
久しぶりに同じ土地の人間に会うと信用しやすい傾向があるそうで  
す。

まあ本当はこれらの理由をしつかり書けばよかったのでしょ

wwww

まあいまさらですねwwww

できれば聞かせて欲しいのですが、戦争に関わっちゃあだめですか

ね？

ネタバレすると困るんで詳しくは言えないけれど、これから色々クリスにやらせたいんですけど。

そうそう、会社に行っている間に思い出したんですけど、カトレアさんは・・・まあしばらくしたら書きます。

では次回をお楽しみに。

ちなみにいまさら変更するなというなら戻します。ぶっちやけどっちでやっても、あまり変わらないしwww

## 20 (前書き)

すいません、19話を変更させていただきました。  
元に戻したほうが言いと言っのなら戻します。  
ご意見待っています。

「今日は体の改造でもやるか」と、思い立ち体をいじることにする。

今回注目したのは『皮膚』だ。

ミノタウロスと対峙したしたことが何回もあったが、あの皮膚はすばらしい。

まず厨房から、料理に使わない骨や筋を貰う。

なぜ骨や筋かというと、大量にコラーゲンが含まれているからだ。ぶつちやけ皮膚なんておまけだ。

まず、遍在を出し、一緒に魔法で、骨・筋を水に溶かす。

そこから余分な物を取り除いていき、コラーゲン等の必要な栄養分の塊にする。

これを皮膚に接する血管から流していく。

皮膚へ構築する更に通常の人とは違い厚く、丈夫になるように、織



維状にし、編みこんでいく。

各関節などを動かし、邪魔にならないよう、厚くしていく、ひたすら厚くしていく。

大量に余ったので、厚くした皮膚の下に、骨をうるこ状にした様な物を埋め込んでいく。

うるこに骨の内部からとった骨を少しだけ混ぜる。

こうすることにより、傷ついても治る・・・かも。

各関節にもプロテクター状に生成していく。もちろん指にいたるまで。

ちなみに皮膚もコラーゲンが含まれているが細かく分けると違うものになっていくので、養分を違うものに加工していく。こうしないと皮膚全部、骨になってしまっからね。

ついでに各所の筋も強化しておく、「全力出したらアキレス腱切れた」「じゃシャレにならないからね。

思った以上に量があり全身に行き渡ってもまだ余った。

次は・・・骨にするか。

骨の内部には所々隙間がある。

だが骨の内部は雑に並んでいる、これを変えていく。

簡単に言えば、中が詰まった鉄よりも、パイプ状にしたほうが丈夫になるのだ。

骨の内部を、凄く細かいハニカム構造にし精密に仕上げていく、たぶんミリよりちっさい。

さらにそれを、規則正しい何重にもしたアーチ状につなげていく。アルミからジェラルミンになったって感じた。

体重もさらに増えたぜ。

目指せ！！超々ジェラルミン。

・・・ちよつとやりすぎたかな？

皮膚はすでに、青銅の剣だと切れやしない。

このとき、思いっきりたたき付けたはずなのに、骨にはひびすら入らない。てか、厚い皮膚とつろこがクッションになり、骨に衝撃が伝わらない。

ためしに裏庭に行き、リミッターを解除して思いっきり学院の固定化がかかっている壁を殴ってみた。

ひびがはいつたよ・・・壁に。

ちよいちよいちよい、人間は、鍛えてない成人男性でも、リミッター解除（火事場の馬鹿力）をすると、1tまで持ち上げられることが出来るそうだ。

その点俺は、各所の強化によりその倍は出せるようになった。まあ感覚でだけど。

要は通常の人とは両手で1tだが、俺は片手で1t出せるのだ。

「・・・まだ俺は人間だ、まだ俺は人間だ、まだ俺は人間だ、まだ俺は人間だ」

おもわずつぶやく。

ちなみに、各所のチェックをやってみたら、いつの間にか心臓の筋肉の質が変わっていた。

いっじつてもいじらなくても変わらなかったなあ。

体をいじる前に出した遍在と、組み手をしてみる。

肺の操作はもはや完璧だ。

リミッター解除を長時間やると、普通体を痛めるのだが楽々最後まで持ち、脳内処理の高速化と同時に駆使した結果。

5対1で楽々勝っちゃったよ。

だって遍在の打撃、効かないんだもん。

関節技かけられても、殆ど効かないし。

ぶん殴ると吹っ飛んでいくし。

そのうち、バイクに乗って仮面でもかぶろっかな？

ははは、しゃれにならん。

## 20 (後書き)

19話の変更をし、20話はマチルダ姉さんでも出そうかと思いましたが、

もしまた元に戻したときを考え、前々から考えていた、肉体強化を出すことにしました。

とりあえず次ぎの更新は日曜日の予定です。

その時に19話を元に戻すか、そのまま進めるかは皆様の意見に従いますので、ご意見お待ちしています。

## 21 (前書き)

19話はこれで確定します。  
お騒がせしましてすみませんでした。  
では、続きをどうぞ。

決闘からしばらくして、いつものように夜、訓練をしようと外を歩いていたら。

ドーン　ドーン

と、爆発音が聞こえる・・・なんとなく聞いたことのある悲鳴も。

こっそり覗いてみると・・・なにやってんだあ？ありゃあ。

平賀君が吊るされて、ツエルプストーさんとヴァリエールさんに、攻撃されている？

タバサさんは傍観中？

いくらなんでも放置したら『平賀君が死んでしまっ』と、思い、ため息混じりに顔を出す。

そしたら、

「あっ、クリスさん。助けてー」

と、言う言葉に、3人の視線がこちらに向けられる。

「で？何をしているんですか？お三方。」

「ふんっ。貴方なんかに関係ないでしょう。」と、ヴァリエールさ

ん。

「ふふ、女の事情に顔を突っ込む打なんて、野暮な人。」と、ツエルプストーさん。

「2人から剣を送られ、どちらを受け取るか今争っている最中。」  
タバサさんありがとう。

なるほど、首を突っ込むのは危険だな。

「平賀君、死なないようにガンバレ。」

「そっそんな。」

今日は訓練やめておくか、見つかったら最悪だ。

帰ろうかと思いきびすを返す。「あっ、惜しい。」ヴァリエールさんの言葉に振り返り固まる。

あそこはたしか宝物庫のはずだ、ひびが入っている。

すごいな、さすがだ。

そのときのことだった。

ドオオオオオオオオオオ

ドオオオオオオオオオオ



でかいゴーレムがこちらに迫ってきている。

タバサさんが咄嗟に平賀君を吊っている紐を切る。

あれは、たしか、フーケか？

朝飯食っている時に話題に出たな。

宝物庫をでかいゴーレムが殴り壊す。

ゴーレムの肩に乗っかっているのが、フーケか。

ひとまず退散だなこりゃ。あっちのほうも逃げてるし。

次の日の早朝学院長室に呼び出される。

どうでもいいが眠い。

教師達が口々に罪を擦り付け合っているのを、オールドースマンが諫め本題に入る。

「それで、昨日の事を詳しく教えてくれんかの？」

ヴァリエールさんが一步前へ出て説明しだす。

~~~~~説明中~~~~~

「なるほどのう。しかしそれでは手がかりは無しか。」

その時扉が開きロングビルさんが部屋に入ってくる。

「ミス・ロングビル!!どこへ行ってたんですか!!」

「そうです!!この一大事に!!」

「一大事だからこそです。」

ロングビルさんは何でも調査に行っていたとのことだ。

調査の内容は、「徒歩で半日、馬で4時間いった先の森にある廃屋に、入っていった黒ずくめのローブの男を見た人がいる。」

それを聞いた1人の先生が「すぐに王室に報告しましょう!王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けてもらわなくては!」等と寝言を言う。

するとオールド・オスマンさんは首を振ると目をむいて怒鳴った。年を重ねた者だけが出せる凄まじい迫力と共に。

「馬鹿者！ 王室なんぞに知らせている間に逃げられてしまつわ！  
その上・・・身にかかる火の粉を己で払えぬよう何が貴族じゃ  
！ 魔法学院の宝が盗まれた時点で、これは魔法学院の問題じゃ！  
当然我らで解決する！」

うんうんそうそう、王室につてあほか。ここの教師はあほばかり  
か。

そんなことを考えながら『早く誰か突つ込まないかなあ』と、ぼー  
っとしながら待ち続ける俺。

そうしているうちに。

「では、搜索隊を編成する。我と思う者は杖を掲げよ」

はやく誰か突つ込め。

「おらんのか？ おや？ どうした！ フーケを捕まえて、名をあ  
げようと思う勇敢な貴族はおらんのか！？」

「なっさけないのお！ いつからこの学院は腑抜けの集まりになっ  
てしもつたのか！」

そうそう、行く必要なんて」「ミ、ミス・ヴァリエール!?」「へ？

シュヴルーズ先生が驚きの声をあげる。ヴァリエールさんが杖を掲げている。

「何をしているのです！ あなたは生徒ではありませんか！ ここは教師に任せて……」

「ですが……誰も……誰も掲げないじゃないですか！」

ぼかんと、していると話が進んでいく。

「なら、私も」

「ミス・ツエルプストー!? キミまで……」

おいおい、まじか。

「ヴァリエールには負けられませんから。」

すると、タバサさんまで杖を掲げた。まあ、期待はしてなかったが。

「タバサ……あなたはいいのよ。関係無いんだから」

「心配」

そして皆で杖を挙げてない俺を見る。

・・・えーと、なんで行く必要があるの？

うわぁ、めんどくっさ。この流れで行くと、必要の無い搜索を俺もしなきゃなんないの？

とりあえず、目立つことと、これから間違いなくフーケのゴーレムに襲われることを天秤にかける。

まあ、別に行かなくても良いんだけど平賀君がなあ。

「オールド・オスマン。」

「なんじゃ？ミスタ・プルトン。」

「ちょっと貴方と、ミス・ロングビルと3人だけでお話が。」

「はあ？何言ってるのよあんた。」

お前は黙れ、この桃空頭。

「『フーケ』のことでせひ、お話が。」特にフーケを強調し言う。

「ふむ。いいじゃろう。皆は少しの間部屋から出ていなさい。」  
よかった。

「そんな、こんな『底辺』なんかと。」

なんだかぶつぶつ言いながら、部屋を出て行くヴァリエールと皆さん。

「さて。話とはなんじゃ?」

「その前に。」

誰が聞いているかわからないので、部屋にサイレントをかける。

「さて。ミス・ロングビル? 質問があります。」

「何でしょうか。」「やや睨みながらこちらに話しかけてくる。

「まず、貴方はどうやってフーケの居所を調べたんですか?」

「え? それは人に聞いて。」

「そうですね。その村に行くまでにどのぐらい時間がかかります?」

「大体2時間ぐらいですわ。」「ひっかかった。」

「そこから小屋まで4時間？」

「そうです。」

よし。後はダメ押しかな？

「村人には何人ぐらいに聞きました？」

「大体20人ぐらいにですけど。」

ちらっと、きょとんとしているオールド・オスマンを見る。

まだか。

「そこへはどうやって行ったのですか？」

「もちろん馬ですけど。」若干イライラしてきたなあ。

そして、ちらっと、きょとんとしているオールド・オスマンを見る。

「なんじゃ？さっきからちらちらと。」

「いえ。なんでも。」ああ、顔が引く付いているのが自分でもよくわかる。

「ミス・ロングビル？今、何時ですか？」と聞く。

「今ですか？今は大体5時ですわね。」

「そうですか。昨日フーケが出たのは何時頃？」

「7時ですけど。」

「その20人に聞いたのはどのくらい時間がかかりました？」

「だいたい、1時間ぐらいだ。」

やっと気が付いたか。

「どうしたのじゃな？ミス・ロングビル。」

「いえ。なんでも。」と、青い顔のロングビルさん。

「え〜と、オールド・オスマン？行く必要がありますか？」

「無いの。」

おっせえよ。気づくのが。

「どうしてわかったんだい？坊や。」

「いや、どっちに逃げたのかもわからない、フーケの居所が次の日にわかった時点で、怪しさ爆発じゃないですか。」

「それにフーケが出たのが7時、その後移動で4時間、見かけたのが11時。村に帰ってくるので午前3時、そんな時間に出かける村



人がいるとでも？ま、盗賊にでも聞いたってなら話は別なんですけどねえ。」

「たしかに無理があつたねえ。」

「わかつたよ、私の負けさ。さつさと王宮へ突き出しな。」

「残念じゃよ、ミス・ロングバ」はい、まった。「へ？」

「話している最中に考えたんですけど。」

「なんじゃ？」

「ミス・ロングビル？何で貴方はそんなに金が必要なんですか？」

「なんだい？いきなり。」

「だって、そうでしょう？見栄っ張りで知られるトリスティン貴族のことだ、報告に出ている数以上の被害があつたておかしくない。」

「それはもちろん遊ぶ金がほしいからさ。それ以外に何かあるって言うんだい？」

「はあ。良いですか？王宮に捕まったら間違いなく死刑ですけど？」

「ふん、承知の上さ。」

「そうですか、それでは貴方が助けようとしているいるだろう『誰か』は、死んでしまいますねえ。」

「は？何言ってるんだい。」

やれやれ、俺もお人よしだなあ。

「貴方は遊ぶ金欲しさと言ったけど、貴方の身なりを見る限り宝石一つすら着けていない。」

「それは、」

「遊びが趣味なら、宝石の1つや2つ着けていてもおかしくは無い。」

「それと、オールド・オスマン？学院長の秘書って言うのはそんなに暇なんですか？」

「そんなことは無いのう。」

「でしょう？あとは、何かに縛られているかだ。」

「借金か、人質か、養っているか。」

「なっ。」

「借金だとしても、貴方ほどの腕前なら借金取りから逃げ出せてもおかしくないの、この線はボツ。」ちよいち抜けているけど。

「残ったのは。」

「なるほどのう。」

「くっ、」

「だからなんだって言うんだい、あんたが助けしてくれるって言うのかい？」

「ま、内容によっては。ねえ、オールド・オスマン？」俺は、この国の貴族なんて嫌いだし。

「しかしのう。」

「私が聞いた話では、貴方はミス・ロングビルに随分とセクハラをしていたようじゃないですか。」

現代日本では大問題なのに。

「そっそれは。」

「触るだけ触っというて、後はポイですか、そうですか。嗚呼可哀相なロングビル、女の人がお尻とか触られたり覗かれたりするのほさぞ苦痛だったでしょうん」わかった、わかった聞くだけじゃぞ。」

「さて、聞かせていただけますか？」

「……私が養っているのは一人だけじゃないんだよ。」

「でしょうねえ、それも働けないほどの子供では？」病気持ちだったら別だけど。」

「なっなんで。」

「じゃなきゃあ、その子たちにも働かせるでしょ。しかも訳ありかな？」

「そうだよ。私がかくまっている中の一人は・・・エ、エルフだよ。それでもいいのかい？」

「うわああ、よりもよってエルフかあ。」

「オールド・オスマンも顔が強張っているよ。」

「ん？エルフ？」

「え〜とその人は貴方の恋人かなんかで？」

「私の妹分さ。」

「先住の魔法が使えるのでは？」

「ハーフェルフでね、先住は使えないんだよ。」

「何が言いたいのじゃな？」

「何で、サハラ砂漠の向こうにある、エルフの里に返さないのかな」と。

「その子の母親がその里から追い出されてね。」  
なるほど。

「うーん、案が無いこともないけど。」

「オールド・オスマン？」

「なんじゃ？」

「あとの決定は貴方に任せます。それに私は従います。」

「・・・はえ？」

「なっ、なんじゃそれは。ここまできてワシに丸投げか？」

「つま、簡単に言えばその通りです。」

「そ、そんな、「私は貴方に従いますよ?」「くううう。」

「し、しかしのう。」

「お主さっき案があると言ってたな？」

「ええありますよ？」

「それはどついつ案じゃ？」

ふふっ、予想通り。

「つまり助けるので？」

「ふんっ。ここまで聞いて助けないなど言ったら悪者じゃないか。」

「あ、ありがとう。ありがとう。」

あ、泣き崩れた。

まあ、さっきまで今にも泣き出しそうな顔をしていたんだ、見捨てたら悪者だあな。

「じゃあその前に、外の人たちを中に入れますか。さっきのロングビルの話の中の矛盾点を見つかけられると厄介ですし。」

「とりあえず、その小屋に行くだけ行って、破壊の杖を取ってきま

しょう。」

「そうじゃの、ほれ、ミス・ロングビル泣き止みなさい、目の周りが赤いのはワシがフェイスチェンジでごまかそう。」

「はい、ありがとうございます。」

サイレントを解き、皆を中にいれる。

そして、立候補した4人（平賀君は強制）と俺と、ロングビルさんで捜索隊が結成される。

「それにしても、3人だけの話ってなんだったの？」

「ああ、ま個人的な話だよ。」

「ふ〜んそお。」

それほど興味が無いなら聞くな。

オールド・オスマン、ロングビルさんとの秘密の会合のあと、土く  
れのフーケ討伐隊が出発した。

本当は付いていく必要は無かったんだが、ロングビルさんにぼろを  
出されると困るので、フォロー役として付いていく。

簡単な話をしながら目的の小屋へ行く。なんかいがみ合っていたが、  
ツエルプストーさんも友人思いだねえ。

「で、偵察権限は誰が行くんだ？」

「んじゃ、俺が。」さっさと終わらせよう。

「すばしっこいのがいい。」と、俺を止めるタバサさん。

みんなの視線が平賀君に集まる。



「へ、俺？」

「そうね、あんたすばしっこいもんね。」

「誰もいないよ。」

そりゃそうだ。

見張りと言って、ロングビルさんと共に小屋の前に立つ。だっていくらなんでも埃まみれはいやだ。

「あつた、あつたわ。」

そりゃそうだろう、隠した本人から聞いたんだから。

「なつんでこんなのがここに？」

ん？平賀君の様子がおかしい。

皆が出てきて、ヴァリエールさんが抱えてきたものを見ると、思わず絶句する。

ロケットランチャーかよ。

その後、学園に戻り破壊の杖をオールド・オスマンに渡す。

オールド・オスマンから、よくやってくれた云々のあと、平賀君が話があると言い出す。

ヴァリエールさん達3人と共に出て行こうとしたら。

「クリスさん、貴方にも聞いてほしい。」

と、呼び止められた。

「破壊の杖、これは俺の世界の武器だ。」

「なんと。」

「どこでこれを手に入れたんですか。」

「ふむ、これはの、命の恩人の持ち物なのじゃよ。」

オールド・オスマンの話によると、昔ワイバーンに襲われたときに、これのもう1本の方を使い助けてくれたとのこと、そしてその人は死に1本は墓に、1本は宝としてここに残したと。

思わず顔が強張り、背筋に悪寒が走る。

話に聞く背格好からして、戦争中の軍の兵士だろう。

はっと、平賀君とオールド・オスマンを見るが、俺の表情に気づい

てないみたいでほつとした。

話が終わり、出て行くこうとする平賀君を呼び止める。

「え？何ですか？クリスさん。」

「この武器は戦争に使う武器だと言ったね。平賀君。」

「はいそうです。」

「しかも、恐るべき威力だと。」

「ええ、この学院の塔の1つぐらいなら壊せます。」

「どうしたのじゃな？ミスタ・プルトン。」

さて、どう言っべきか。

「君の世界の兵士は、この武器しか持たないのかい？」

「いえ、そんなことは無いですけど。」

「君の言うことが本当なら、ここまでコンパクトで強力な武器を使う兵士が、これ1つだけの装備とは考えられない。そうだね。」

「はいそうですけど。」

オールド・オスマンも俺の言いたいことが分かったのか、顔をこわ

ばらせる。

「オールド・オスマン、その兵士の持っていたものはこれだけで？」

「いや、まだ他にもある。」

「今すぐ、それを平賀君に見てもらった方がいいと思いますが？」

「同意見じゃな。」

応急処置で、壁の穴がふさがっている宝物庫に入る。

結果は、俺の思った通りだった。

やっぱりあったよ、手榴弾。適当な保存の仕方をしてよく、爆発しなかったなあ。

平賀君に、「君の世界の物を並べてみてくれ。」と頼み、全て並べてもらう。

結果は、兵士が持ち込んだものだけじゃあ無かった、出るわ出るわ。

平賀君がオールド・オスマンに武器の説明をしていて、オールド・オスマンの顔を強張らせている。

俺は、地球から来たものを見ている。

何で、魔法のステッキ？他にも「こんなもんとっておいてどうするんだ？」見たいな物も多数合った。

銃が撃たれなかったのは、安全装置のおかげなんだろうなあ。お、説明が終わったな。

「所でオールド・オスマン。」

「なんじゃ？」

「これらの武器の管理を平賀君に一任した方がいいのでは？」

「ふむ、そうじゃな。他の物が下手に扱って爆発でもされたら困る。」

「提案としては、置く為の専用の部屋を用意して、扉の鍵を二つで施錠し、1つは平賀君が保管するのが1番かと。」

「他の物が興味本位でいじくって爆発しましたじゃあ、シャレにならない。」

「うむ、明日にでも手配しよう。これらの運搬時にはサイトくん、手伝ってくれるかの。」

「はい、わかりました。」

本当によく今まで爆発しなかったよな、学院。サブ・マシンガンまであるよ、恐ろしく。

その後平賀君と別れ、オールド・オスマンとロングビルさんとで、今後の話を進める。

今日行われる舞踏会は出なくてもいいか。

話し合いは簡単に終わった。

とどのつまり、フェイスチェンジ、使えば早いんじゃないかと。

後、ハーフェルフのティファニアは、孤児たちと共に、家の領地で生活してもらう。

それと、出来る限り目の届く所にいた方がいいだろうと思い、準備が整い次第ロングビルさんもそこで生活してもらう。オールド・オスマン泣き叫んだが無視。

フェイスチェンジそのものは激しい衝撃を受けると解けてしまうため、毎度おなじみの遍石入りのネックレスと腕輪の2個とイヤリングを2個をロングビルさんに渡し、アルビオンヘティファニアに渡しに行ってもらう。

ネックレスと腕輪は両方とも遍在が丸ごと入っているため、いざと言うときは護衛に早代わり。

はっきり言って並大抵のことでは効果は取れないし、まずはれる心配は皆無だ。

こうして家は、土くれのフーケと言う優秀なメイジを引き入れることに成功した。

ラッキ？

ロングビルさんが無事に家の領地に入ったと言つて一報を受け、久しぶりに領地に帰ることにする。

早朝のうちにエルザとラコイを引きつれ、バイクにまたがり出発する。

「いやーしかし久しぶりだな、実家に帰るのも。」

「そうですよ、クリスさま、全然帰らないんですもの。」

「はっはっは、んじゃ領地までかっとはすぞ〜。」

「ちよっちよっと、お兄ちゃん？きゃあああああ〜。」

飛ばしまくったおかげで一日でついた。

領地に着き両親に顔を見せ、各所を見て回ることにする。

なんか以前よりも領地、でかくなってないか？



領民から話を聞くと、超貧しい地域を嫌がらせのごとく押し付けられ、その上色々と技術が他の領地に持ってかかれているとのことだ。

まあ、狙いどおりだな。

技術そのものは別に持ってかれていても実の所あまり関係がない。

そのために領地内で農業もやっているのだ。

夜、両親との夕食時に提案をする。

簡単な工房を思いついたと。

今はまだ誰にもいえないが、とあるルートから手に入れた純度の高いガラスの作成方法、瀬戸物の作成方法、と学院に入る前から考えていた案である、海の方の産業に手を出す。

まあ、今回も例に漏れず簡単に作れるものをチョイスしておいた。と言っても、最初は苦労するが。

ちなみに海の方は、乾物関係。簡単に言えば増えるワカメかな？あと干物。

ちなみにマチルダさん（ロングビルさんの本名）の所へ行くと歓

迎された。

さて、今回のメインだ。

「始めましてミス・ティファニア。」

「あつ、はい始めまして。」

すっげえ胸……下着も手を出すか？

「さて、ここでは俺は何て言われているか知っているかな？」

「ああ、驚いたさね、まさか全ての病を治せるなんてね。」

「ふふふ、学院では表立ってやったことは、一度も無いからね。」

「さてそれで本題だ。」

「なんだい？」

「実は俺、病気を治す関係上、体の造形もいじれるんだけど。」

「なっ、それってつまり。」

「そっ、そちらさえ問題なければ、耳を短くしようか？」

「ほっ本当ですか？耳を短く。」

「まあ、無理にとは言わないから、よく考えよ」やりませう、やって

ください。」

「えっと、自分で言っというて何なんだけれど本当にいいの？その、エルフの血に対する誇りとか。」

「いいえ。長年この耳のせいで、マチルダ姉さんには迷惑をかけていたんです。」

「ティファ、そんな迷惑だなんて思っでは無いよ、私はあんたを本当の妹のように思ってたんだからね。」

「マチルダ姉さん。」

厚く見詰め合う二人そして、半泣きできつい抱擁。

・・・そして、俺置いてけぼり。

まあ、そんなことがありちゃっちゃと耳を普通の人とわからなくした。

本当は、短くすることに対しての葛藤があると、思っただけかなあ。

孤児院を後にして、他にも色々と見て回る。

家に戻り、最後に驚きの報告を受ける。

学院に行く際に、外へ出て経験をつめと言って外に出した我が助手の一人が結婚することになり、俺に式に出てほしいと言うのだ。

はあ〜

まあ、殆ど弟子のようなものだったので行かなきゃ行けなかなあ。

何故こんなにも嫌かと言うと、婿に行く先が問題なのだ。

一応、手紙には配慮をしてくれるとのことだが・・・相手の結婚式で気を使われる俺って。

ここまで言われたら、出ないわけにはいかないだろう。

結婚式はラグドリアン湖で1年後に、結婚のお相手はヴァリエール家の次女で、カトレアと言うらしい。

馴れ初めは、いつものごとく各所で人々を治していた所、その噂がヴァリエール家の耳に入り、不治の病であるカトレアさんを治し（ちょっと苦労したらしいが）その結果、ぜひ婿にとのことで婿入りしたとのことだ。

義母親にはなんか大変らしいが、本人はまんざらじゃあない様子。

まあ、これからも色々していきたいし、ヴァリエールとの繋がりが出来たと思えばいいかな。ははは

その後学院に戻ると、異様に上機嫌なヴァリエールさんがいた事は  
言うまでもない。

やねやね。

### 23 (後書き)

はい、カトレアさんの治療を助手その1に押し付けました。  
これで今後、ばれても恐怖の義母上イベントは発生しません。 . . .  
たぶん。

さあ、これからどうしようかな〜

オールド・オスマンに事後報告をした時だった。

オールド・オスマンが泣きついてきた。

「潤いが。年寄りのたった1つの楽しみが。」と。

正直言つてうぜえ。

だから俺はこう進言したんだ、まあ無理だろうとも思っていた。

「待遇上げるから、戻ってきてくれとでも手紙書けばいいじゃないですか。」と・・・

しばらくして、マチルダ・じゃなかった、ロングビルさんが戻ってきた。

戻ってくるとは思わなかったけど。

さらに俺は、驚愕の事実を聞く。

なんでもオールド・オスマンと交渉してティファにいままで窮屈な生活をしてきたのだから、学院生活をしてやりたいと、入学の許可を取り付けたと、1ヶ月後に1年生として入学すると。

まあ、耳は丸くなったわけだし、ばれることも無い。

まあいいか。

タバサさんにガリアから任務が来た。

何時ものように遍石からの情報で、ミノタウロス退治だとわかる。

チャンスだ。

タバサさんに村で先に情報収集するよう伝え、日本刀とスキルニルを元に作り上げたマジックアイテムを持ち、オリジナルの飛行魔術で追いかける。

ちなみにこの飛行魔術、重力の向きを変え・進行方向へ飛び・体の回りに風な繭を作り抵抗を無くす。

はっきり言って恐るべき速さで飛ぶことが可能だ。

遍石からの情報で、なんでも10年前にもミノタウロスが居たらしく、そのときは偶々立ち寄ったメイジに助けてもらったと。

今回は広場の掲示板に名指しで生贄を指名されたとのことだ。

村に着きタバサさんと合流する。



ミノタウロスが文字なんて書くか?と思い、ちゃっちゃと洞窟に向かう。

タバサさんはシルフィードを囿に使おうと言い出したが、必要はなさそうだ。

ていうか、洞窟内にあきらかに人間の足跡いっぱい。

引っかかる奴がいるんだろうか?

取り合えず俺1人で入ろうとしたらタバサさんに止められた。

「1人で行くのは危険。」

まあいいか。

とりあえず、あほな人身売買業者どもをぶちのめす。

まああれだ、適当にのんきに固まっている所をエアストームとかぶつ放したら、みんな吹っ飛んだ。

横でタバサさんが驚いてる。もうそろそろ計画を実行するのだから実力を見せておいたほうがいいだろう。

「貴方は、水の使い手ではなかったの?」

「ん?言ってなかったっけ。」

「聞いてない。」

まあ、言う必要なかったしな。

後ろから女がこっそり近づいてきた。

杖にしている日本刀にある遍石で、見えているんだけどね。

ウインディ・アイシクルを飛ばそうとしていた所を、居合い抜き  
の要領で抜き放ち、風の刃で女の杖を切る。

「なっ。」

「はいはい、じっとしていな。」

「次は当てるよ?。」

これまたタバサさんが驚いている。

「それはただの剣じゃなかったの?。」

「ん?俺特製マジックアイテム。」

そのとき。

「ほう、中々の腕前だな。これは手助けする必要なかったようだね。」

「なっ、ミノタウロス？会話ができるのか。」

そのミノタウロスの名前は、ラスカスと言っらしく何でも10年前にミノタウロスを倒した貴族だとか。

簡単な話をして馬鹿共を村に引き渡すため分かれる。

村に着き馬鹿共を引き渡す。まあその際袋叩きに遭っていたが自業自得だろう。

「おい、向こうの村や街の近くで、子供がいなくなっているが、それも全部おめえの仕業だろ？」

1人が首を振って答える。

「知らない、俺じゃない。俺はつい、1週間ほど前にこの辺りに流れてきたんだ。」

「嘘をつけ！まあいい、お上にきっちり取り調べてもらえばいいだけの話だ。」

「ほんとだ！10年前のミノタウロスの話を聞いて、それで今回の計画を立てたんだ、嘘じゃない！」

・・・

次の日、タバサさんとシルフィとの3人?とで洞窟に再び入る。

「やあ、どうしたんだい。まだ何か用かな?」

「ああ、ちよつとね。」

「ほう。ちよつとは?」

「ああ、前に入った時から思ってたんだが、ラスカルさん。貴方は何を食べているのかな?」

その瞬間空気が変わる。

「ぶごぶごぶご、何時気がついた?」

「まあ、最初からかな?」

「ミノタウロスを含め強力な亜人は、体の維持の為にかなりの量を食べなければいけない。そして貴方は10年前からここに住み着いていると聞く。」

「最初は周辺の獣で事が足りるだろうが、ミノタウロスが同じ場所にい続ければ結果は。」

「なるほど。君の推測は正しいよ。だがどうするね。土地勘のない洞窟だ、どう考えたって私のほうが有利だ。」

「なるほど、確かに。」

「この洞窟では、こんな近くで威力の高い魔法は出しにくい。それにこう狭くちゃ俺の剣も本領発揮は出来ないな。」

ま、日本刀を振るだけでミノタウロスごと倒せるんだけど、今回はそれが目的じゃあないしね。

「ぶつぶつぶ。よくわかってるじゃないか。では、どうするのかね?」

「どうする。」

と言って日本刀を捨て、ラスカスに歩み寄る。

「なっ、危ない。」

「彼女の言う通りだ、それは自殺行為だな。」

「へえ、じゃあ、やってみれば?」リミッター解除。

「なっ、なめるな――!」

と言い、左手に持った斧を振り上げ　振り下ろす。

ズン

「なっ。」

今のは、ラスカスさんかな？タバサさんかな？いや両方か。

驚くのも無理はない、ミノタウロスの強靱な腕力で振り下ろされた斧を、人間である俺が右手一つで受け止めているのだから。

まあ、叩き切る程度の切れ味しかない刃物を、受け止めるなんて、この体なら朝飯前だ。

「ふっ」

バキヤッ

左手の手刀で、斧の柄を叩き折る。これでもう杖としても使えない。

「そんな馬鹿な！！只の人間がそれほどの力を持っているわけがない。」

「あれ？目が見えないのかな？今やって見せたでしょ。」

ラスカスが息を呑む。

「うっっ、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

左手で殴りかかってくる。

「はあああああああああああああああああああああ

こちらも左手で殴りかかる。

互いの左の拳がぶつかる。

ミッ

骨のきしむ音がする。

ベキベキ

骨の折れる音がする。

俺の顔を見ているラスカスが笑う。

そして・・・

ブチブチブチブチ

ラスカスの左手が砕け、腕が折れ、肩から千切れ飛ぶ。

「があああああああああああ、そんな馬鹿なああああああああああ。」

まあ、いくらミノタウロスが頑丈だからとは言え、1tには耐えられんわな。あっちもリミッター解除が出来れば、話は別だが。

タバサさんが尋ねてくる。

「貴方は人間なの？」

もしかしてやりすぎたかな？

「ん？俺の得意な事はなに？」

「それは、病の治療。」

「ああ。只その中には、体の構造をいじらなきゃ治らない物もあつてね。」

「それってつまり。」

「ん、ちょっとだけ自分の体をいじった。」

その時。

「ははははははは、まさか人間でありながらミノタウロスを超える者がいるとはな。」

左腕が肩から千切れたのだ、しばらくしたら出血多量で死ぬだろう。



そして、ラスカスさんは自分の過去を言い始める。

昔、体を病に冒され放浪のたびをしていた時、この村にたどり着きミノタウロスを倒したと。

そのときに、ミノタウロスの体の生命力の強さを知り、脳移植をしたとのことだ。

・・・すごいな、いくら俺でも脳移植は無理だ。

「そして、3年ほど前だ。子供を襲う夢を見た、獣のように、私は子供に食らいつていた。」

「それから何度もそんな夢を見るようになった。私は初めは、夢だと思っていたよ。目が覚めてそばに転がった子供の骨を見て、ようやくそれが現実のことだと理解した。」

「だんだんと、自分の精神がミノタウロスに近づいていくのが分かった。とても空腹のときなど特に衝動が抑えきれなくなった。」

話からすると、移植による拒否反応というよりも、異物を取り込もうとしているのか。すごいな。

「ぶじぶじぶじ、もはや笑い方すら忘れてしまったよ。わたし、あ

んたは、まだ生きたいのか？」

「何をいきなり。」

「いいから、答えな。その答えによっちゃあ助けてやるよ。条件付でな。」

「出来るのか！！そんなことが。」

「ああ、簡単に言つと、あんたはミノタウロスに侵食されているのが、原因だ。だったら逆にあんたの脳からミノタウロスの体を侵食してやればいい。」

「そんなことが。」

「彼なら可能。彼の2つ名は『全治』。彼はありとあらゆる病を治すことが出来る。」

フォローありがとうタバサさん。

「ぜひ頼む、私を助けてくれ。」

と言って膝を着ける。

とりあえず、肩の出血を止める。

さて、久しぶりの大仕事といきますか。



## 24 (後書き)

え、ちよいと変更して直接、ミノタウロスの退治が依頼されるようにしました。

極楽鳥の件は今後も出てきません。

25 イザベラとご対面 ラスカスさん容姿変更(前書き)

お久しぶりです。久々に投稿します。

とりあえずは、本文をどうぞ。

## 25 イザベラとご対面 ラスカスさん容姿変更

「一つ聞いていいか。」

「なんです?」

「何故私を助けることにしたのだ。私はミノタウロスに侵されたとはいえ・・・子供を喰らったのだ」

「そうですね、原因が何であろうとも、人として決して許されない行為です」

「では何故!?!」

「・・・ラスカスさん貴方は罪を償為に死ぬのと、生き続けるのはどちらがより重いとお思いですか?」

「それは・・・」

「私も死の苦しみを味わったことがあります。死の恐怖あれはなかなかにきつい」

「けれど、死は誰しもが1回しか経験しない 死は一瞬で終わる。」

「しかし罪を背負って生きる事は違う その者が生きつづける限り、続いて行く。決して消えることのない罪と共に生きていく。」

「罪を償う為に死にたいなんて言うのは、罪から逃げる口実だ。」

「その罪を心から悔んでいる者には特にね。」

「貴方は死にたがっていたのでしょうか？ ばれればですよ、あれじゃあね。」

まず間違いなく避けると思っていたのだろう、唯振り上げ降ろすだけの攻撃ではね。

「貴方は生き続けるべきだ 償う為に。」

ミノタウロスの体であるラスカスさんなら、特にきついだろう。

「……ありがとう。」

まあ理由はこんな物で良いかな？ 外見がいかにミノタウロスと言えども、人や生き物は殺したくない。

以前にミノタウロスと対峙したとき、ミノタウロスを倒すと同時に倒れたため気付かなかったが、

2回目はしっかりと倒した所を見たため罪悪感が半端なかった。

てか2・3日は肉が食えなくなつた、その時の救いは余り酷い状態にしなかったことと、患者で怪我とかで血を見てある程度慣れていたことだ。

まあ今後大きな動物を殺したくはない、とは思ったが、「まあ、この世界で生きる以上このままじゃいけないかな？」と、思い慣れようとした。・・・したんだ。

手始めにまず厨房の裏へ行き鶏を絞める光景を見た。

そして、強制ダイエットコースとなった。

鶏を生きたまま首をまな板に押さえつけ、

ダンッ

と、首を斬りとばす。

何故か首の無いはずの鶏が歩き羽ばたく。

この光景に固まっていると、そのまま羽を耄り取り、腹を割き内臓を・・・ウプッ

そう言った事をする、農家の出だったら問題無かったのだろうが、一般家庭出身の俺には慣れる事は無理だと感じた瞬間だった。

「さて、これでもう衝動が襲いかかることは無いでしょう。」

「おお、本当か。」



「そうですね、試しにしばらく何も、口にしないでいてください。」

ちなみに、遍石は首から下げたままである。

万が一暴走したときの為の予防線だ。

「さて、私は何をすればいいんだ？」

「まずは、現状を説明します。」

タバサさんの今の状況を説明する。

「何と、この10年でそんな事が」「しかし、私になにができるのだ？」「

「それはですね・・・」

2日後

「ミノタウロスだーーーー」

村人の1人が叫びを上げる。

ぶおおおおおお

ミノタウロスが村に走り、入り込んでくる。

「待て」

少しボロボロになった、タバサが現れる。

タバサが、ウインディアイシクルをミノタウロスに向けて放つ。

ドドドドド

ミノタウロスの体に氷で出来た槍が刺さる。

その瞬間、ミノタウロスが持っていた斧を投げ

ッ

タバサに斧が突き刺さる。

ミノタウロスはヨロヨロとこの場を逃げ出す。

そして村人が1人また1人と姿を表す。

「騎士様、騎士様ー」

「駄目だ、死んでおられる」

「そ、そんな」

シルフィードがタバサの亡骸に追いつがる。

「キュイキュイキュイ」

「いくらミノタウロスでも、あの傷じゃあ生きてはられねえべ」

「これからどうするべ」

「やはり王宮に報告するしか」

「皆さん、私が王宮へと行きましょう」

「そんな、あなたは無関係の旅人で」

「一応事情も知っていますし、事の次第を全て見ていましたからね、それに王宮の方角に用がありますので」

「それじゃあお願いするか？」

村人達が村長を交え話し合う

「しかし足が」

「それなら、ガーゴイルさん。私を王宮まで連れて行って下さいますか？」

「キュイキュイ」

シルフィードが首を縦に振る

「それじゃあお願いします」

シルフィードの背にタバサの亡骸を乗せ森深くへと入る

そこでミノタウロスと、ミノタウロスの近くにいるタバサさんが待っていた。

「クリス殿どうだった？」

「大丈夫だ、村人の人達はみんな、ラスカスさんとタバサさんが死

んだと思い込んでいる。」

「じゃあこれから王宮へと向かうの？」

「ああ」

計画はこうだ。

タバサさんが気になることがあると言い村に残る。

その間に俺は旅人に扮し、タバサさんとは無関係を装う。

暫くしてラスカスさんが、村をおそうふりをする。

タバサさんがミノタウロスと、死闘をしているふりをする。

村人全員避難したのを確認し、ミノタウロスにダメージを与えるとき、俺がスキルニルを元に作り上げた死を演じる人形と、タバサさんとすり替え斧によって殺されたふりをする。

結果、村人は全員タバサさんが死んだと思い込んでいる為、上の連中がいくら調べても嘘の情報しか上がってこない。

これで少なくとも、タバサさんの身に危険が及ぶことが無くなる。

まあ、真の目的はここからだ。

「さあ、王宮に向かいますか」

ラスカスさんはこのままだと目立つ為、首から下げた遍石総出でフエイスチェンジをかけ、普通の男のように見えるようにする。

まあ、かなりゴツイ大男になってしまうが。

そしてみんなで王宮へ向かう。

ちなみに、シルフィード、ラスカスさんを乗せるのをめっちゃ嫌がっていたが完全スルー……

そして王宮へ

ラスカスさんとシルフィードには、途中の林で待つてもらい、スキルニルのタバサさんの死体と、変装した俺・タバサさんとで今回の命令を出したイザベラの元へと案内される。

「あ、あなたたちだね、エ、エレーヌの死を見届けたってのは」

イザベラがタバサさんを、エレーヌと言っていたので、驚いているのを慌てて背中に隠す。

ちゃんと、どんな事があっても動揺するなと言っておいたのに。

「はい、騎士様の、最後のお言葉を、お伝えしても宜しいでしょう

か  
「

「あ、ああ言いな」

「『イザベラお姉ちゃん、助けて』、と」

「っ  
「

「も、もういいよ、出て行きな」

兵が俺達を連れ出す。

外に出て行き、すぐに二人組の兵が現れる。

「その君、ちょっと手伝ってくれたまえ」

「はっ、しかし」

と、言ってこちらをちらりと見てくる。

「そのの彼等は、私が連れて行こう」

と、カステルモール。

「は、はあ」

この兵士二人は、2日前にざつと作戦を伝えて呼んだ、カステルモールとそのお仲間さんだ。

お仲間さんの方には詳しい説明は一切していない。どこからばれる

かわからないし。

さてと

回りに誰もいないことを確認し、イザベラの部屋に聞き耳を立てる。

すると

「エレーヌ、エレーヌ〜ごめんよ〜」

「何も出来なかった、何も出来なかったあ〜」

と、泣き叫んでいる声を聞き「そんな」とか「まさか」とか言いながら、驚いているタバ&カステルモール。

やれやれ

まず、カステルモールが扉を開けて中に入る。

「お話があります」

ディテクトマジックとサイレントをかけたのを確認し中に入る。

イザベラの目の回り真っ赤っか。

タバサさんが被っていたフードを取る。

「なっ」



「イザベラお姉ちゃん、騙してごめんなさい」

「エ、エレヌ、エレヌ〜よかった、よかったあ〜」

イザベラさんが、タバサさんに泣きながら抱き着く。

しばらくして

「あんたたち、どういつ訳か全部話してもらっからね」

完全に混乱していたイザベラが冷静になり、

イザベラは激怒した。

まあ当然だな、計画を立てた俺が言うセリフではないが。

「簡略に言いますと、シャルロット様の母君の病を、直す方法が見  
つかりました」

「なっ、本当かい」

「はい、本当です」

「ふん、成る程ね」

「えっ、解つたの」

驚愕の表情のタバサさん。

「……シャルロット様、イザベラ様と今後の事を話しますので、暫く引つ込んで下さい」

「なっ、貴様。シャルロット様に対して、何という」あー、カステルモール？」

「はっ。何でしょうイザベラ様」

「暫く黙ってな」

「えっ？し、しかし」

「黙ってな」

「……はっ。畏まりました」

イザベラさんに睨まれて、沈黙するカステルモール。

「で、あなたは何者だい？」

「シャルロット様の協力者で御座います」

「ふん。名前は」

「そうですね、フジサキとお呼び下さい」

「偽名って訳かい」

「まあ、そんな所です」

「さて、まずシャルロット様ですが」

「あなた、口調戻しな」

「宜しいので？」

「ふん、全治だろ」

「……何があってもばらさないでくれよ？」

「ああ、ばらさないよ」

苦い顔の俺と、したり顔のイザベラさん。

「じゃあ、まずシャルロットさんの事だけど。このまま死んだことにしよう」

「ああ、てか死んだことにするしかないねえ。一体何人に見られた  
と思っただい？」

「まあ、そうだな。それはスキルニルを元に作ったもんで、特殊な  
魔法がかかっているから、ディテクトマジックでも引つ掛からない  
上に、3週間は持つ代物だ」

ちなみにこの世界、土葬が一般的な為まず、ばれない。

「ほう」

スキルニルの内側に遍石を入れ、内側から遍在が外と遮断する魔法  
をかけているから、節約すれば1月以上保つんだが・・・中から外  
が見えないから、節約のしようがないのが欠点だな。

「それと同じ物を5個作る」

「わかったよ、いつ頃にする？」

「関係性が無いように思わしいから、最低でも2月以上あとだな」

「ああ、そうそう警備の方を」

「ああ、それなら前々から秘密裏にやらせているよ」

「それと、このままじゃアイザベラさんが危険だろうから、カステ  
ルモールさんにもやって貰えば大丈夫だろう」

「ふん、気遣いは無用だよ」

「そうゆう訳にもいかないだろう?」

「ふん」

「それで、学院長には何処まで話しているんだ?」

「全部話しているけど、大丈夫かい?」

「髪と目の色を変えて、眼鏡を取れば大丈夫だろ」

「其処まですれば、大丈夫さね」

「あとこれを」

遍石を渡す。

「何だい?これ」

「俺と話が出来る石だ」

「起動合図は、何か固いもので3回叩け。詳しい日時が決まったら教えてくれ」

「へえそんな物を。あんた中々やるねえ、わかったよ。エレーヌの事をくれぐれも頼んだよ?」

「ああ、確かに頼まれた」

「さて、学院に戻りますか」

「えっ、話は終わったの？」

これまた困惑顔のシャルロットさん。

「あゝシャルロットさん？」

「なるべく早く、ここから離れたいから道中で話すよ」

「わかった」

「カステルモールさん？イザベラさんの事を宜しく頼んだよ」

「確かに承った。シャルロット様の事を、宜しく頼む」

そして、城を出て行きラスカスさん達と合流する。

「話は終わったのか？」

「ああ、終わった」

「学院に戻る最中に話す」

「タバサさん？ラスカルさんに話すのと、同時に説明するからラス

カルさんに乗って」

「シルフィードには、タバサさんを通して教えて」

「わかった」

## 25 イザベラとご対面 ラスカスさん容姿変更（後書き）

投稿が大変遅くなり、申し訳ございません。

とりあえず、途中で終わらせるつもりはありませんが、色々あり、

今後カメイや、ナメクジ・・・海星なみに更新が遅くなります。

今後ともよろしく願います。



26 (前書き)

お久しぶりです。  
まずはどうぞ。

「さて、まずは今後の事を「さっきの会話の意味を教える」  
えっと

「さっきの会話とは何だ？」

ラスカスさんに、先ほどのイザベラさんとの会話を話す。

「なるほどな。確かに、その会話では内容がわからないな・・・当事者以外は」

だよね、普通タバサさんも、少しは解っていいもんだよね

「タバサさんはイザベラさんが君のことを、どう思っていると思う？」

「私の事を、嫌ってはいなかった」

その通り。そしてそれこそが1番重要なことだ。

「なんでわざわざ、ガリアから遠いトリスタニア魔法学院に行かせたんだと思う？」

「なんらかの利点があった？」

「そうだね、利点は2つかな？」

「2つ?」

そう、恐らくは。

「1つはタバサさんに対し、危害を加えにくくするため」

「危害とは、どういうこと?」

「君は自分が『ガリア国王』にとってどれだけ危険な存在か、わかっているのかい?」

タバサさんは何も言わない、ただ目が先を促している。

「『ガリア国王ジョセフ』本人は、あまり気にはしてないみたいだけど。恐らく君を殺そうとしている奴らがたくさんいるはずだ」

オルレアン公シャルルが殺された後、ジョセフ派閥の者にシャルル派閥の者たちが粛清されたと聞く。

「何故なら君が、『故弟王シャルルの忘れ形見』だからだ」

当然、シャルル派閥を率いる可能性が高い『シャルロット・エレヌ・オルレアン』を狙う輩はいるはずだ。

「カステルモールみたいに粛清を逃れ、機会をうかがい、タバサさんの王権を取り戻そうとしている者もたくさんいるはずだ」

カステルモールはタバサさんに出会ったとき『我ら東薔薇騎士団一同あなたに従う』と、言った。

恐らくガリア国内に、簡単に言えば『反逆者』が他にもいるはずだ。

「それを手っ取り早く鎮めるには」

タバサさんがやっと気が付いたみたいだ。

「私がいなくなればいい」

「そうだ。だけど、君がトリステインに、しかも学院という閉鎖的な空間にいればそうそう君を狙いにくくなる」

いかなる理由があろうとも、国外である『トリスタニア王国』の学院に暗殺者を送ったなんてばれたら国際問題だ。

国外であるため、もみ消すこともできない。

「それに、周りにはイザベラさんが国外に追い出した用にも見えなくはない。見方を変えればタバサさんには人質がいる為逃亡もできない」

「でも、定期的に私は呼ばれてる」

「そうだね、でもそれはそれで不自然だと思わないかい？」

「不自然？」

「・・・思わないのか？」

「定期的に呼び出すのだったらわざわざ遠いトリスタニアじゃなく、

近くのガリア国内に居た方が、早いじゃないか」

ガリアとトリスタニアは遠い。竜を使って早くて2日で着くといったところだろう。

「そしてもう1つは、タバサさんが亡命しやすいようにかな?」

「でも私には」

「そうだね、人質がいる」

それが今まで足枷になってたんだなあ

「だからこそ、任務をやらせてるんだろう」

「どづいこと?」

「話を聞く限り、1番最初のキメラの件から色々苦労してたんだろう」

「苦労?」

「周りには手を出させないよう、殺そうとしているように見せなきゃいけない。だけど助けたい」

「もしかしたらだけど、最初から複数の任務の候補があつたんじゃないかな?」

「だけど、キメラを選んだ。それは地元の協力者がいたからだ」

「普通、凶悪な獣退治に要請すらしてないのに、『メイジですらない協力者』がつくなんてそうそうないと思うよ」

平民は、先住魔法の使えないコボルトですらそうそう勝てない。たまたま最初の任務に、協力者がいるなんて出来過ぎている。

「・・・」

「その後は訓練も含めてかな？」

「訓練？」

「そうだ、なるべく生き残る可能性が高い任務を選んで、タバサさんに経験を積ませたんだろう」

誰かに、命を狙われても生き残れるように。

「タバサさんをわざわざ怒らせるような、任務が結構あっただろう？」

「魔法の威力を、手っ取り早く上げるにはどうすればいい？」

タバサさんが、しばらく考え込んで答える。

「感情を爆発させる」

魔法の威力はその時の感情によって上下する。そして人の感情で一番簡単に高められるのは怒りだ。

「タバサさんが何らかの仕返しをしたときに、何か報復があったか

い？」

「無かった」

「任務中に何回か味方になってくれる者にもあつただらう？」

カステルモールは偶々だったとしても、他はちよつと調べればわかるものばかりだった。

何か有つたときに、フォローしてくれる味方がいると言つ事を、教えられたのだらう。

まあ、どこをどう考えても相当危ない綱渡りだが、それだけの『覚悟』が有つたと言つ事かな？

しばらく、タバサさんが茫然としたかと思うと「そんな、イザベラお姉ちゃん」と、言つたと思つたら

「ちよいまちー、どこに行く気だー」

ラスカスさんの背中から飛び降りようとしたのを腕を掴んで止める。

「イザベラお姉ちゃんに謝りに行く」

おいおいおい

「今、そのイザベラさんは『偽物』のタバサさんの葬儀の準備真っ最中だつてば、本物が行つてどうする」

あつぶねー、何つー事を言い出すんだ。

その後タバサさんは話をじっと聞いていた

何故イザベラさんが俺を知っていたのか

トリスタニア国内のしかも学院などにスパイを簡単には送れない・  
・はず。

一応学院長はトリスタニアの賢者？とも、呼ばれてるし？

イザベラさんは学院長から聞いたのだろう、俺とタバサさんがコソ  
コソやっている。

何故、イザベラさんと学院長が繋がっていると言い切れるかとい  
うと、

『タバサさんは国外からの留学生』

『もしタバサさんの身に何かあれば、本来は国家間問題』

『タバサさんはちよくちよく無断でいなくなる』

『例えあの学院長でも、いくら何でも国家間の争いの元となるのを  
放置は有り得ない』・・・はず。

そして、いくらタバサさんでも地位のある人だろうと、そうそう話  
せる状況では無いとわかるはずだ。・・・たぶん



学院長に理由を聞かれても答えないだろう。

つまり、恐らく学院長がタバサさんを何故放置出来るのかと云うと『いなくなる理由を知っている』としか説明が付かない。

イザベラさんから学院長に、接触があったとしか考えられないと言  
うわけだ。

イザベラさんが全部話したと言っていたので、何から何まで全てを  
タバサさんに協力してもらおう用になってとこかな？

まあここら辺は、学院長に直接話を聞けばわかるだろう。

護衛はカステルモールさんみたいな、『タバサさん側の人間』がイ  
ザベラさんが、タバサさんを殺した風に見えるだろうから、イザベ  
ラさんに護衛が必要だった。

それとジョセフ派閥の人間にとって、タバサさんとタバサさんのお  
母さんが邪魔だろうから、イザベラさんが秘密裏にタバサさんのお  
母さんを守っていたんじゃないかな？

後最後に、タバサさんの実家に居る人は全部で何人？と聞くと。

「5人」

「俺が作ると言った死を演じる人形は何体？」

「5体」

「そう言うことだ。タバサさんが死んだ後直ぐに、助け出すと関連性を疑われるから、暫くは動けないけど時期が来たら必ず助け出すから、それまで待っていてくれるかい？」

「わかった・・・ありがとう」

うつむき、泣きそうな声で言ってくるタバサさん。

「それはまだ早い、泣くのは全部が終わってからだ」

「道中に、タバサさんの視力の回復と、目の色と髪の色を変える事にした」

「何色がいい？」と聞くと、「赤」と、答えたのでタバサさんの目と髪は今燃えるような赤になっている。

あと声帯を少しいじる。

その為に、ディテクトマジックで入念に声帯・喉などの構造をスケッチし再現出来るようにする。

「よし、声を変えるぞ」

「やって」

よし

それと

「あとはタバサさんの新しい偽名を考えると、口調やししゃべり方

を変えるだけだ」

「わかった」

「・・・わかってるだろうけどバレないようにしつつしてくれよ」

「努力する」

だいじょうぶか？

本当に

ちなみに風韻竜のシルフィードには。

「キュイキュイ、嫌なのねーシルフィのウロコの色を変えるなんて」

「いや、タバサさんはいないのに、シルフィードだけいるのは変だから」

説得を試みるも果敢に抵抗？するシルフィード。

「嫌なのねー嫌なのねーお姉さまも何か言ってなのねー」

すると、今まで閉じていた口を、タバサさんが開いた。

「クリス」

「お姉さま——（喜）」

「なに？タバサさん」

「色は赤で」

「お姉さま——？！（泣）」

「・・・わかった」（問答無用か）

「そんな——きゅいきゅい」

「きゅい————」

その後、嫌に切ない悲鳴？が森全体に響き渡ったことから、その森は嘆きの森と・・・呼ばれなかった。

ラスカスさんには学院の途中の森で、待っていてもらうことにした。

「後で、小屋を建てるの手伝いますよ」

「すまないな、クリス殿」

ラスカスさんを置いて学院の近くまで行く。

学院に入る前に、

「さて、じゃあまずは学院長に話をしにいく訳だけど」

「タバサさん、その杖はちょっと特徴有りすぎだから、布か何かに巻いて持つか、隠して」

「解った」

言うや早々と、マントを外し杖に巻きつけるタバサさん。

さてと

「じゃあ俺も、剣しまつてくるから先に、学院長室に行つてて」

「解った」

俺は部屋に戻り、日本刀を置き学院長室に向かい始めた・・・向かい始めた。

何故か、すぐにタバサさんに呼び止められたけど。

ちなみに、タバサさんの背後にはミス・ツエルプストーがいたが。

マジで？

## 26 (後書き)

とりあえずは、27話です・・・ずいぶんおそくなりました。

Wise Foolさんのご意見により26話のラスカスさんの外見等を変更いたしました。

あとこちらの事情により、感想の返信が出来なくなりました。

こちらのボキャブラリー的な意味で。

私感想とか書くの苦手なんですよおおおおおお。

自分でもわかってますとも最初から、次回書き込む、次回書き込むと同じことばかり。

皆様が感想をかけなくした方がいいと、おっしゃるならそうします。

では次回なるべく早く書けるようがんばりますので、お楽しみに。

そうそう、後こころ辺の描写・説明が欲しいという点があったら教えてください。

私の文才で出来る限り入れてみようと思います。

ただ、今後の都合上書いていないのもありますんで、その所は勘弁してください。

## 27 (前書き)

久しぶりに早めに投稿します。

かなり短めです。



今、目の前に、タバサさんがいる。

今日俺は、いや俺達はガリア王国から帰ってきた。

ラスカスさんと言う、なかなか強力な協力者を仲間に入れ、イザベラさんと『シャルロット』親子を助け出す為の準備について実りある話ができたと思う。

そう全ては秘密裏にタバサさんを死んだことにし、全てから解放する為に・・・

まるで絞り出したような声が出てくる。

「えっと、君の後ろにいる人は・・・」

「あら、これは失礼、ミスタ・プルトン。初めまして、私は、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー、以後お見知りおきを」

そういうことを聞きたいんじゃない。

「いや、えっと、その、ミス・ツエルプストー？そういうことを聞きたいんじゃない？なんていうかね？君の前にいる子のなんだけど・・・」

「ああ、『まだ』詳しい話は聞いてないですけど、名前すら知らないですわよ？ミスタ」

へ？なんか睨まれた・・・いやそれよりとりあえず、この子がタバサだっことは黙っててくれるみたいだな。

「えっと、君はミス・ツエルプストーとどこまで話をしたんだい？」

「してない」

「へ？」

「私はまだ『ミス・ツエルプストー』に、一言たりとも話しかけてはいない」

へ？

どゆこと？？？？

「ああ、ミスタ・プルトン？この子話しかけても何も答えてくれな  
いから、この子に『今の現状を説明してくれる人の所に連れて行っ  
て』って言ったの。だってこの子がここにいるってことは協力者も  
ここにいてってことじゃなくて？」

八八八

「えっと・・・どうやって？」

辺りを見渡し、人が近くにいないことを確かめ、小声でミス・ツエ

ルプストーが言う。

「あら、私とこの子は親友ですよ？たとえ『彼』だろうと見分けて見せますわ？」

す・すげえ・・・

「す・すごいっすね」

「ふふ、この子特徴的な癖があるから」

「まあ、最初は信じられなかったけど」と言っつて、タバサさんの頭をなでだすミス・ツエルプストー！。

思わずタバサさんを見るが、タバサさんもその癖は解らないようにただ首を振るだけ。

前途多難なのか、それともミス・ツエルプストーが特殊なのか。

ここでは話せないの、当初の目的だった学院長室に行く。

まあ、部屋の前まで3人そろって、完全無言だった。

せっかくタバサから『この子』になったのに、ばれるわけにはいかない。

学院長室につき、ノックをする。



「え、えつとクリス・ド・プルトンです。入っても『もう』よろしいでしょうか。」

やや大きめ声で、言う。

「ま・待ちたまえ！！もうちょっと、もうちょっとだから『ガタガタ』」

もしかすると、頼らないでこっちで勝手にやった方が安全かな？と  
考え直「もう、大丈夫じゃ。もう、大丈夫じゃよ。入ってきなさい  
！！」

・・・部屋に戻ろうかな？

## 27 (後書き)

やべえ、タバサの新しい偽名が思いつかない。

もし、キュルケがタバサに妹みたいなきちんとした、貴族らしい名前をつけるとしたらどんな名前になるかな？

誰かに名前をつけるとか、センスマイナスなんで思いつかない。

誰かぷりーず

ちなみに名前が決まるまでマジで次の投稿はできません。

なんかもう感想と、名前の案が来たんですけど、詳しく言います。

0000・ド・0000とかそういう感じで・・・

と思ってたんですけど、ゼロの使い魔って基本そういう名前を持っている人の方が逆に、少なかつたなあ。

まあ、そのせいでちよいと苦労してるんですけどねWWW

もうシエリルでいいかな？

28 11/13 偽名の設定修正(前書き)

またまた早い更新をします。  
ではドゾー

ミス・ロングビルの怒声と撲殺行為が無事に？収まり、学院長室に入る。

・・・あの赤いシミ、ソファで隠れてるけど血痕だよな。思わずそれを見てみると

「おっほん、それで何の用だね、ミスタ・プルトン？」

「ああ、はい今日の用事・・・は・・・」

学院長が・・・なるほどこれが『フルボッコ』か。

学院長はボコボコだった、文字通りボコボコだった俺の隣にいる2人も唾然としている。

2つある鼻には赤く染まった布が押し込まれ、目の周りは青くなっていた。

服はよれよれ所か、所々破れていて、ちょっとフラフラしているようにも見える。

骨にひびぐらい軽くいつてんじゃないか？

「あの・・・学院長？」

「なんじゃ？ミスタ」（ヒューヒュー）

オールド・オスマンの呼吸音がおかしい。

「あの、その傷？治しましょうか？」

「おお、本当かミスタ・プルトン。実はさっきから立っているのがやつて」あら、そんなことは必要ありませんわ、ミスタ「ミ、ミス・ロングビル？」

「この話が終わったら、弱みに付け込み、女性の体を無断で撫でまわしてくるオールド・オスマンには、『土』に還っていただく予定ですよ？」



え？

ずいぶんの良い笑顔で言ってくるロングビルさんが怖い。

なんて言うか、黒いオーラが立ち昇っているような幻覚が見える。

「あら、そうなんですか？それは素晴らしいですわね」

「でしょう？」

「素晴らしい考え」

今まで気が付かなかったが、俺の隣にいるロングビルさんと親しうに『ウフフ』と笑いあっている赤毛の女性2人からも、黒いオーラが見える。

オールド・オスマンがこちらを見てくる。

目が語っている「わし、消される？埋められる？助けて」と。

恐らく、ティファニアさんの件で調子に乗りまくったんだろう。

もしオールド・オスマンがいなくなったとき、この学院にいる人のほとんどはこう答えるだろう。

『いずれこうなるだろうと・・・』と、

弱みに付け込んで、セクハラした結果なので自業自得すぎるし、3人の女性が怖すぎるので思わず目を逸らす。

瞬間、オールド・オスマンの表情が絶望に染まる。

・・・って、いやいやいやいや、頼りにしようとか今後の事を相談しようとしている人が、いきなり死亡決定って。

正直怖いけど、勇気を持って話しかける。

「あのお」

「ああ、そういえば『肥料』に用事があったんでしたわね？どうぞぞ

存分に『最後』の会話をしていまして？」

もう土に還るの確定済みですか、そうですね。

「いや、あの、オールド・オスマンを頼りに来たんですけど・・・」  
「え？ そうなんですか・・・」つち、運のいい爺だねえ

あれ？ なんか今度は幻聴が。

ちなみにオールド・オスマンは涙を流しながらまるで『自分は助かった』『まだ、生きられるんだ』と、言い出すような表情をしている。

・・・頼りになるんだろうか、激しく不安だ。

「さて、それでミスタ・プルトン？ わしを頼りに来たとのことだが、オールド・オスマンを治療して（骨の各所にひびが入り何故折れていなかったのかわからなかったが）なんとか話を、進めることが出来る様になった。

「その前に失礼して」

ディテクトマジックと、サイレントを嚴重にかける。

「ほう、そこまでのことか」

「はい、下手に行動すると命に係わるかと」  
部屋に緊張感が漂う。

「ミス・タバサのことで進展が」  
と言って、タバサさんを見る。

「なんと、もしかや彼女が」

「はい、そうですね」

「申し訳ありませんが、ミス・ロングビルには外していただきたいのですが」

「あら、ご冗談を。確かにこの中で私が事情を一番把握していない

のでしようが、ミスタ・プルトンには、返しても返しきれない恩がありますわ。ぜひお力にならせてください」

何かあった場合、教師側に口裏を合わせてくれる人が一人でも多い方がいいだろう。だが

「そうですね、ありがとうございます。ですが、ミス・ツエルプストー」

「あら、なにかしら？ミスタ」

「君はやめといたほうがいい、いくらなんでも危険すぎ」「フッフ、私は、この子の親友ですわ、たとえば何があるうと、ここを動かないわよ」

「下手をすると、お家取り壊しの可能性も否定はできないんだ。危険だ」

「フッフ、私の実家は大貴族ヴァリエール侯爵家と張り合えるんですのよ？むしろ危険なのは貴方の方ではなくて？」

まあ、その通りすぎるので言葉に詰まる。

しかも引く気は絶対になさそうだ。

一応オールド・オスマンに視線を配るが

「ふむ、これは大変危険なことじゃぞ？下手をすると家など関係なく暗殺されるかもしれん」

すると、おもむろにミス・ツエルプストーは杖を取り出し掲げる。

「・・・私、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーの名と、杖にかけて、ミス・タバサを守り抜くことを誓いますわ」

「ふむ、たとえばミス・タバサに命の危機が迫っても軽率な行動をせぬことを誓えるかの？」

「杖にかけて」

「いいじやろう。ミスタ・プルトン、どうやら彼女は何があってもここを動く気はないようじゃ」

「わかりました。ただわかつてはいると思うが絶対に他言無用だ。いいね」

「わかつたわ」

「じゃあ、まずは何故『タバサ』と名乗っているか。そして、どうして俺と行動をしいて『今の姿』になっているかを説明する」

オールド・オスマンと共に全てを説明し始める。

シャルロット・エレヌ・オルレアンの本来の地位からジョセフ？世が仕向けた弟の暗殺、そして弟の妻に飲ませた薬の効果。実質人質も同然の母親を庇う為の日々。

ミス・ツエルプストーは怒りに震える。

そして、エルザと俺の実力は伏せさせてもらったが、俺の『全治』の2つ名の説明。

シャルロット・エレヌ・オルレアンの母親を治すことが出来ること。

イザベラさんと学院長の繋がり。

シャルロット・エレヌ・オルレアンが正式に死んだこと。

学院の裏山にいる信頼できる仲間。

そして今に至る。

「タバサ、いえ・・・シャルロット今までつらかったでしょうね」  
ミス・ツエルプストーがタバサ、いや、シャルロットさんを抱きしめる。

「そんなことはない。希望はあった、今は大切な信頼できる親友に仲間もいる」

「そう・・・それと」

ミス・ツエルプストーがこちらを向く。

いきなり片膝を付き頭を下げる。

「え？」

「今までの数々の無礼をお許しください『全治』クリス・ド・ブルトン殿。そして貴方様の偉大なる杖をどうか、シャルロット・エレーヌ・オルレアンの平穩の為に、お貸しいただけるよう、お願い申し上げます」

「え？あ？ああ、いやまあ、大丈夫ですよ、ミス・ツエルプストー。もとよりそのつもりですので」

「ありがとうございます。それと」

ミス・ツエルプストーは立ち上がり言う。

「キュルケ、キュルケで結構ですわ、ミスタ・プルトン」

「ああ、じゃあ俺もクリスでいいよ？キュルケさん」

「ふふっ、『さん』はいらないわよ？」

「え？あ」

困惑している俺にロングビルさんが言い出す。

「ああ、なんでかクリスは『さん』は要らないって言っているのにどうしても取らないんだよ。苦手だとか言ってる」

「いや、まあ、女性を呼び捨てにするのはちょっと・・・」

正直、抵抗ありまくりだ。

「あら、貴方の使い魔である彼女らは呼び捨てなのに？」

「まあ、どっちかっていうと、妹みたいに思っているからねえ」

「さてそれじゃあまずは、シャルロットさんの今後の新しい設定と名前だ」

皆で一斉に首をひねり考えだす。

「ある程度真実性が高い立場がいいのう」

「そうだねえ、できればどこかの有力貴族の保護下がいいんじゃないかい？」

「でも、こう言うのはなんだけど、保護下と言ってもプラス要因がないしなあ。だからといってガリアの貴族は論外だし」

「いざとなつたら私の腹違いの妹とかどう？お父様あちこちに手を出してるし」

・・・それはそれでどうなんだ？

「簡単に嘘だとわかるようじゃだめだぞ？」

「まあ、わしが後見人と言うことにして、わしの伝手を使って口裏だけ合わせてもらおうとするかの」

「それが、確實でしょうね、その所は如何に貴族とはいえ、ほとんど何も権限を持ち合わせてもない俺たちじゃあ、どうしようもないですし」

「じゃあ、あとは名前ね。私がシャルロットの新しい名前を考えるわ」

まあいいか。名前を考えるセンスなんて持ち合わせてないし、キュルケさんに任せよう。

しばらく、ウンウンとうなって考えていたキュルケさんが顔を上げ「シエリル・イヴェール・ド・ネージュなんてどうかしら？たしかかなり前にネージュって名前の貴族が没落したってどこかで聞いたわ」

「うーん、シャルロットさんはどう？」

「それでいい」

ちよっとは悩もうよ、新しい名前なんだからさ。

「うむ、ミス・ロングビルではシエリル・イヴェール・ド・ネージュが先週にこの学院に編入した書類を早めにつくってもらっていいかのう？」

「わかりましたわ、オールド・オスマン」

「へ？なんで先週なんですか？」

ふむ、

「調べられたときに『シャルロット・エレヌ・オルレアン』の死去の時期と逸らしたいからじゃあないか？」

「そのとうりじゃ、なるべく時期ははなれていたほうがいいんじゃない」

が、あまりに遠すぎるとほかの生徒や教師、従業員が覚えとらんと  
言うのも。怪しまれるしのう」

「幸か不幸かミス・タバサはミス・ツエルプストー以外とはそれほ  
ど交流をもつとらんからのう。まあミスタ・プルトンが容姿や声ま  
で変えてしもうたから、まず気づかれんとは思うが。念のための」  
「ふむ、ではわしのつてを伝って口裏を合わせてくれる者を探すと  
するかのう、そのさいに領地名が変わるかもしれんがいいかの？ミ  
ス・ツエルプストー」

「はい、意義はありませんわ、オールド・オスマン」

さて、これで6日後に『シエリル』さんはクラスへ入ることになっ  
た。

それまでに今まで使っていた杖ではなく、新しい杖を用意すること  
新しい服とマントを新調する。

これでとりあえずはひと段落だ、後はイザベラさんから、シャルロ  
ットさんの母親を助け出す日程が来るのを待つだけだ。

まあそつちもかなり苦労すると思うが。

28 11/13 偽名の設定修正(後書き)

新しいタバサの名前は、リボン様・White Seal様の案  
を使わせていただきました。

センスの無い私に代わり考えていただき、どうもありがとうございました。

他に何か言おうと思ってたんですが、書いているうちに忘れてしま  
った。OTZ

思い出したら書こうかな。

ネージュ様の意見より修正しました。

私の頭ではこれ以上の修正は不可なので、いいのがあったら教えて  
ください。



29 (前書き)

29話です・・・以上



「だれこの人お兄ちゃん（クリスマス様）」  
「え？いやえつと・・・とりあえず部屋に入れ」

エルザにタックルされて、部屋から飛び出したままだったので、とりあえず部屋に入る。

「で？このひと誰？お兄ちゃん」

「え、いやえつと」

どう説明する『誤魔化す』かと考えていると、突然エルザが、

「この、匂いどこかで？」

へ？

「に、匂いつて？」

「言つてなかったっけ？私たちの一族は鼻がすごくいいの」  
聞いてないオ

「それにこの無表情どこかで・・・」

ヤ・バ・イ

冷や汗をたらたら流しながら考える。

タバサさんに協力していると云う事は、ずっとエルザとラコイには黙ってきた。

ばれたら何を言われるか・・・

「ん？」

「へ？」

唐突に、エルザがこっちを向き怪訝な表情をする。

「なんで、お兄ちゃんからこの女の人の匂いがするの？」  
へ？

そう言えば帰りは、シルフィードと一緒に乗って帰ってきたっけ『寄り添って』・・・

「な・ん・で？お兄ちゃん、ま、まさかこの6日間ずっとこの人と一緒にいたんじゃない？」

「そ、そうなんですか？クリスマス様」



目の前にはエルザとラコイが黒いオーラを背負って・・・幻覚だな  
幻覚、間違いない。

「で？どういうこと？全部説明してねお兄ちゃん？」

「ええ、全てを正確に、教えてくださいね？クリスマス様？」

「ハイ、ワカリマシタ」

さきほど、学院長室でした説明全てを話す・・・正座したまま。足  
痛い

「まったく、やっぱりタバサお姉ちゃんと、関わってたんだねお兄  
ちゃん」

「そんな危険なことを黙ってやっていたなんて、私たちはクリスマス様  
の使い魔ですよ？なんでおっしゃってくださいさらなかったんですか？」

「ああ、まあそれはね？よっこいしよ」「ああ、お兄ちゃん（クリ  
ス様）はそのままです」「さいですか、正座のままですか、そうです  
か。

「危険な目に合わせたくはなかった」と、言っても無駄に終わった。  
これからは、シエリルさん関連で動くときは必ず言うようにと念を  
押され、この話は終わった。

が

「えっと、話は終わったよ？シエリルさん」

「そう」

「えっと、『話は終わったからもういいよ』って意味だと思っよ？  
シエリルお姉ちゃん？」

「そう」

「シエリル様？その、どうするおつもりですか？」

「ずっとここにいます」

「」「」「」「」

「どういうこと?」

「クリスは私が守る、ずっとそばについている」

「・・・思わず頭を抱える。」

エルザとラコイも茫然としている。

「よし、キュルケさんの所へいこう」説得してもらおう。

エルザとラコイにキュルケさん呼び出してもらい、広場で話すことにした。

キュルケさんに説明した後の第一声は「ふん、無理ね」だった。

「へ?」

「だってこの子、とっても頑固よ?一度こうと決めたら、てこでも動かないと思うけど」

「そんな」

「ふふ、説得がんばってね?シエリル私は応援してるわよ」

こうして、俺とエルザとラコイでの説得が始まった。

「男女一緒の部屋はまずい」と、言えば

「エルザとラコイは一緒にいる」と、言われ

「俺の方がシエリルさんよりも強いんだけど」と、言えば

「それでも、不意打ちには対応できない」と、言われ

「それはシエリルさんも同じじゃあ」と、言えば

「私はこれから常に周囲に注意を払う」と、言われ

「それだと不審者・・・」と、言えば

「私は気にしない」と、言われ

「そもそも男子寮にシエリルさんが入ると周囲の目が」と、言えば

「私は気にしない」と・・・

「俺が気にするうつつうつつうつつうつつうつつ」

「でもエルザとラコイは」

「使い魔！！ぎりぎりセーフなの」

「お願いします、勘弁してください」

と、土下座をしてなんとか。

「わかった」と、しぶしぶ引き下がってくれた。

・・・疲れた

29 (後書き)

はい、エルザとラコイに早速ばれました。

サイトがタバサの母親を助けた後の行動から考えると、こつとなるかなと。

さあ、ガンガン書くぞ〜



30 (前書き)

最初の方ちよこつと追加しました。

いつものように俺は、寝た後ポケ〜つと授業を聞いていた。オールド・オスマンの協力により、シエリルさんの設定は上手いっつたらしい。

ネージュ領や、後見人等のことはオールド・オスマンに頼り、丸投げして本当に良かった。俺やキュルケさんではどうしようもないからな。

そしてシエリルさんの転入は、無事？に終わった。シエリルさんと俺は同じクラスになった。あのじじい、な〜にが「こっちのほうで、フォローなりなんなりしやすいじゃろ？」だ。

まあ、唯一おこった騒動と言えば、ミスタ・グラモンが早速と口説きに行つて、ミス・モンモランシにぶんなぐられていたけど・・・俺が席に座るとまず、エルザとラコイ、それにシエリルさんによる俺の隣の席の奪い合いが行われていた。

それを見ていた何人かが「なぜ、ミス・ネージュが君の隣に座ろうとするんだ」と、言ってきた。

どう言おうかと困っていると、キュルケさんが「シエリルとクリスは知り合いなのよ。ちなみに、私とシエリルは親友だけどね」とフオロー？をいれてくれた・・・その後キュルケさんと俺が何故か、親しくなったことで一悶着あつたが。

まあ、その程度ですんだ。ちなみに、俺の隣の席はローテーションで座ると言う事で、落ち着いてたようだ。

しばらくするとコルベール先生が「あややく失礼しますぞ」とか言

つて教室に入ってきた。奇抜な格好をして。金髪のカツラを頭に寄せ、派手な刺繍の入ったローブを身にまとって・・・てか「あややく」ってどこかで聞いたことがあるような、まあいいか。

等と考えているとコルベール先生の頭からカツラが落ちた。すると誰かが「あ、すべった」と言い、教室は爆笑の渦が巻き起った。

俺も「プツ」と、笑ってしまった。

エルザは言うまでもなく、ラコイまで笑っている。珍しいことについても無表情のシェリルさんまで。

コルベール先生の言う事には、なんでも今からアンリエッタ姫殿下が学院にくるそうだ、来なくていいのに。

学院の門の前で生徒が全員並んで杖を掲げている。

「へえ：あれがアンリエッタ姫様か。凄い人気だな」と、平賀君の声が聞こえる。

今、立ち位置は俺の右にエルザ・ラコイ、左にシェリルさん・キユルケさん・ミス・ヴァリエール・平賀君となっている。

アンリエッタ姫殿下は馬車に乗り、笑顔で手を振っている。なんか、笑顔が張り付いてるって感じだな。

まあ、あそこまでの地位となると色々あるんだろうなあ。

次の日の早朝、いつものように早朝訓練をしようとしていたら、珍しいことに平賀君に出会った。

「あれ？平賀君？何してるんだいこんなに早く」

「あ！！クリスさん」

「ちよつと、サイト何してるの・・・って、あんた」

「どうしたんだい？サイト・・・って君は」

平賀君にミス・ヴァリエールにミスタ・グラモン？

「えっと、なにしているんだい？こんな朝早く」

「あ・あんたには関係ないでしょ」

「そうだね、君には関係ない」

と、ミス・ヴァリエールとミスタ・グラモン。

「ちよつ、お前らそんな言い方ないだろ。えっとすいませんクリスさん」

「いや、まあいいけど、どうしたの？こんな早くから」

「いや、それが、ちよつと野暮用でアルビオンまで」

と、平賀君がとんでもないことを言い出した。

「ア・アルビオン？何でそんな所に、あそこは今内戦真つただ中だぞー！！」

思わず声が大きくなる。

「ちよつとあんた、声が大きいわよ」

「そうだよ、ミスタ・プルトン？それには関係ないじゃないか」

「あほか、そう言う問題じゃない、もしどうしても行くというなら  
オールド・オスマンに報告させてもらうからな」

「「なつ」」

「学生があんなところに行くなんて自殺行為もいい所だ、絶対に止めさせてもらうからな」

と、言ったところで

「エア・ハンマー」

ドンッ

「がっ」

俺の体が吹き飛ばされる。

意識が朦朧とする中で、声が聞こえる。

「やれやれ、危なかつたね。僕のかわいいルイズ」

くっ、もう意識が、刀よこい・・・

そして、意識が無くなる。

「う・ん」

目が覚める。

「ここは？」

「あ、クリスさん。目を覚ましたんですね？」

「え？この声は」

まだ、朦朧とする中で前を見ると、後頭部が見える。

頭？

パカラツパカラツパカラツ

馬の上？

意識が完全に戻るとそこは馬上だった。

しかも、体が縛られている・・・？

「ああ、すいませんクリスさん。今解きます」

どうやら、前にいるのは平賀君で、平賀君と俺を馬から落ちないようひもで縛っていたみたいだ。

「で？平賀君？説明してくれるかな？今の状況を」

「あ、はい。すいません」

平賀君の説明を黙って聞く。

平賀君の説明だと、なんでも今向かっているのはアルビオン。ただ今内戦真っただ中の国で、そこに野暮用があっというくらいしい。野暮用の内容はしゃべれないと。

それと、俺を吹っ飛ばした奴はミス・ヴァリエールと共にグリフオンに乗って前方を飛んでいる、ワルドとか言う魔法衛士隊長だとか、なんだか平賀君の機嫌が悪いな。

俺を吹っ飛ばした理由は、結構な声で騒いだから。わざわざレビテーションをかけてまで馬から落ちないよう縛ったのは、オールド・

オスマンに報告されると面倒だから、だそつだ。  
ふっ、しかしぬかつたな。

部屋には遍石がある。そこから遍在を出して、オールド・オスマンに知らせれば、と意識を遍在に向けると・・・後ろから高度をとり一定の間隔でついてきている。

しまったああああああ

朦朧としてたから呼んでいたー

基本命令で「不用意に人に姿を出すな」と、コマンドしたため、新たに出てきたワールドとか言うのに反応して、俺の命令が出るまで待機していた。しかもご丁寧に遍石が入った袋までひっさげて。もうちょっと他にその要領を使ってほしかった。とりあえず、そのまま後からこさせよう。

起きて早々に詰んだ。

平賀君は「ワールドが言うにはもう帰っていらしいですよ？」とか言っていたが、そりゃそつだろつ。

太陽が上に来ている。

今まで馬で走つてただろうから、今からたとえフライで帰つたとしても、竜を使おうが絶対に追いつけないだろうさ。

「いいよ、一緒に行くよ」

途中で止めるにしてもなんにせよ、一回止まってもらわないとどうしようもない。

まさか、平賀君だけ連れて帰るわけにもいかないし。

数時間後、途中で馬を変えて走り続ける。

その際に、いつまでも平賀君の後ろにへばりついているわけにもいかないの、俺一人で馬に乗る。

馬を変えるときに皆を無理にでも止めたかったのだが、グリフォン

が、つまりミス・ヴァリエールが降りてこなくて、無理だった。

休みなく延々走り続け、平賀君とミスタ・グラモンがへばってきた。  
「君たち大丈夫かい？」

「はあはあ、き、君に、心配されるほど、ぼかあやわじゃ、ないよ  
とてもそうは見えないけど。」

「はあはあ、クリスさん、つ、疲れないんですか」

まあ、常日頃から鍛えているからねえ、スタミナが違う。

「いや、平気だけど」

途中で、レビテーションを使うことを提案しようかとも思ったが、  
疲れていた方が止めるのが楽だろうし、やめておくか。

日が傾きかけた頃に突如道に松明が投げ込まれる。

「敵襲か!!」

前方のワルドが叫ぶ。

おいおい、山賊かよ。

崖の上から矢がとんでく「エアハンマー」知り合いの音がして、  
飛んできた矢が吹き飛ばされる。

「エア・ハンマー」

次に山賊どもが吹き飛ばされる。

「エア・ハンマー」

さらに山賊(ry

「エア・(ry

さ(ry

「エ(ry

「って、シエリルさん、山賊共死んじゃうっうっうっうっうっうっう  
う」

風竜・・・じゃなくて鱗が赤いからこの場合は火竜かな？  
まあ、鱗が赤い竜にのったシェリルさんとキュルケさんに・・・明  
らかに怒っている表情の、エルザとラコイが降りてくる。

もしかして、俺、違う意味でピンチ？



というわけで、やっとアルビオン編突入です。

いやー長かった、長かったなあ。

さてウエールズがどうなるか、乞うご期待。

後、いまさらながら言いますが、私これが初めての作品なんですよね  
wwww

しかも、にじふあん、いったいどう見れば、評価がわかるのかわからない  
wwww

その上自分で切ったとはいえ、ほとんど感想が来ないから、評価が高いのかどうかさらによくわからない。

ちよいと、不安な今日この頃です。

・・・皆様、見捨てないでね？

### 31 公爵直しました

・・・このあいだに引き続き、俺はまた正座している。

「なんで、エルザも一緒に連れてってくれなかったの？お兄ちゃん！！？」

「そうですね、なんで連れて行ってくださらなかったんですか？クリスマス様！！？」

「私は貴方にどこまでも憑いて行く」

「いや、あの、その今回は『シエリルさん』関連じゃないし」

「今回はアルビオンに行くんでしょう？私だって今とつても危ない状態だって知ってるよ！！？」

「そうですね、そんな危ない所に行くのになんで教えても下さらなかったんですか！！？」

「私は貴方を護る」

「きゅ、急だったし、それにほら、エルザが言ったようにとっても危ないし」

「なんで、そんな危ないところに私たちに何も言わずに行こうとするの？今まで以上に危ないんですよ！！？」

「そうですね、もしクリスマス様になにかあったらどうするんですか！！？」

「私は貴方を危険から護る」

「い、いや、それは本当に急だったし、ね」

「なにがどう急だったの！！？」

「そうですね、何がそんなに急だったんですか！！？」

「どうして、そんなに急いでいたの？」

ヤ・バ・イ



俺がどうしようかと完全に混乱していると、ワールド（馬鹿）は何を勘違いしたのか、自己紹介を始めた。

「僕は、魔法衛士隊の1つ「グリフォン隊」の隊長、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワールドだ。気軽にワールドと呼んでくれたまえ」

「……よろしく（お願いします）『ワールド』（さん）（様）」「」

「ああ、よろしくレディ達」

挨拶をするや否や、首根っこを引つ掴まれ

「……ちよつとお兄ちゃん（クリス（様）あつちで話があるんだけど）（あるんですけど）（ある）」「」

そして、ずるずると引きずらて行く。

「助けて」

思わず声を絞り出すが、平賀君、ミス・ヴァリエール、ミスタ・グラモン、馬鹿（ワールド）は、キョトンとし。

キュルケさんは小さく「ご愁傷様」と、つぶやいた。

「ちよつとお兄ちゃん、あれに気絶させられたってどういふこと」

「いや、アルビオンに行くのを止めようとしてたら急にね」

「あれに攻撃されたんですか？あれに」

「いや、まあ、そうなるんだけどね？」

「貴方は少しの攻撃なら大丈夫じゃないの？」

「いや、さすがに意識してないところから急に攻撃されたらね？」

「つまり、話しているところに急に気絶させられて、あれにさらわれたってことなんだね」

「いや、つまる所そうなんだけどね？」

「大丈夫なんですか？あれに怪我させられたんじゃ」

「いや、まあ、どちらかと言うと脳震盪に近いのかな？怪我はしてないよ」

「つまり貴方は私よりも強いのにあれの不意打ちに対応できなかったと？」



ときに、ミスタ・グラモンが「ワルド子爵、奴らはただの物取りだと言っておりますが」と、言ってきた。

「おいおい、まさか貴族3人に、しかも1人はグリフォンに乗っているのに、弓矢や剣で襲ってきた奴らがただの物取りなわけ「そうかでは捨て置こう」・・・はい？」

「え？放置して行ってしまうんですか？馬・・・あ、いや」「ば？」

「いえいえ、ワルドさん？」

「ふむ、奴らはただの物取りだと言っているんだ、捨て置いても問題ないだろう」

「あそこにいたら道を通る者に気が付くだろうし、そうしたら、あれを役人に引き渡せば恩賞が出るから役人に報告が入るだろう」

「もしそのままだったとしても、それは自業自得さ」

「まあ、それはまずないだろうけどね」と、言っているワルドを俺は見ると、

軍人が、しかも仮にも、隊長を任せられている者にしては、あまりにもお粗末な対応だ。

それに、ミス・ヴァリエールは『婚約者』だと言っていた。

もし、俺がアルビオンに行くことに賛同したとしても、絶対にエルザ・ラコイ・シェリルさんは連れて行かないだろう。

何故なら今アルビオンは内戦中だからだ。

どこの世界に、内戦中の国に婚約者を連れて行くやつがいるだろうか。

しかも、ミス・ヴァリエールは『公爵家』の子供。

いくら俺でも、こちらの世界の基本知識として地位の差も教えられている。

公爵家は王位継承権を持っている。

まあ、簡単に言えば公爵家三女つまり『低くても王位継承権を持つ娘』を『内戦中の国』へ、連れて行くわけだ。

もし、ミス・ヴァリエールが死んでしまったらどうなるか、予想す

らできない。いや、したくない。

そのまま、馬に乗っていたものはシルフィードに乗り込み、グリフオンに引き続きついていく。

ある程度離れたら、念のため、後ろから付いてきている刀から1つ  
遍石を物取り？共の近くに落としておく。

今まで延々馬で駆けてきたが、道中誰もいなかった。

なのに放置していこうと言うんだ。

もしかすると繋がりがああるかもしれない。

### 31 公爵直しました（後書き）

はい、31話です。

主人公に首輪が付きました（笑）

え、アルビオンに行かせるのは割と早めに決定していたんですけどね？

きっかけどうしようかな、なんて考えてたんですけどね？

まあ、ふもさんの言うようになり強引だったのは認めます。

当初は、気絶させずに強引にワルドに連れて行かせる予定だったんですが、そっちの方が更に強引すぎるかな、と思い、気絶させました。

あと、クリスが一撃で気絶するのはちょっと・・・と、思われていたんですが、

たとえば、鍛えられ上げられてるプロボクサーが、出会いがしらにいきなり、素人に殴られたら流石に下手すると死ぬような気がするんですが・・・

例えが違うかな？

とりあえずクリスは脳震盪？と言う事で。

ちなみにワルドからしてみると、自分の作戦の障害その1なので、特に遠慮はしません。

そうそう、雷帝さん、アクセス解析の見方ありますがどうございませう。

さてこれからどうなるか、お楽しみに。



「諸君、もうそろそろラ・ロシエールだ」

前を、グリフォンに乗っていた『馬鹿』が高度を落としこちらに伝えてくる。

馬鹿ことジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドは、予想道理『敵』だった。

まあ、今の所それしかわかっていないが。

遍石で見えていたが。偽装した物取り共の下に来たのは、白い仮面を着け服装を変え、『ワルド』の声で物取り共に話しかけていた。

わざわざ、学院生の素人、ミスタ・グラモンに取調べさせたのはその為なのだろう。

この世界では『音』について何も研究がされていない、声がどう出ているのかも知られていない、声を変えるのに布越し等と言った程度しか方法が考えられていないのだ。

当然、物取り共にしゃべった声で取調べを行えば正体がばれる。

運が良かった、全体が見える位置に遍石が落下したものだ物取り達いや傭兵達に「依頼した場所で待つ」と言い、ワルドは木の陰に消え『消滅』した。

遍在、ワルドは風のスクウェアか。

今、遍石から遍在を出し、傭兵共を上から追っている。

しばらくは、様子見だな。

船の発着場である口・シエールに着くなり、早速とワールドはアルビオンに行くための交渉をしていたのだが、アルビオンの浮遊航路？の関係上船が出るのは翌々日とのことだ。

まあ、軍人の、しかも一般人には知られてはいけない特殊任務に出るのに、下調べを何もせずに行く軍人がいるかどうかは疑問だが。

結局アルビオンに出る船は無く今夜はこのままこら辺で1番上等な宿である『女神の杵』亭に行くことになった。

着くなりワールドは店主の所に行った。

テーブルに着くと俺は、平賀君たちの方に向き直り話しかける。

「さて、これからどうするつもりなんだ？」

「え？どうするつもりってどういうことですか？」

「学園を出る前に言ったはずだが、アルビオンは内戦中だ。」

「ふん、それがどうしたって言うのよ」

この桃空頭が、何を考えているんだ。

「だから、一介の学生ごときが何の当てもなく、今のアルビオンに行くのは自殺行為だと言っているんだ」

「ふん、ようは君はアルビオンに行くのが怖いのだろうか？」

「？、ミスタ・グラモン？今はそんなことを言っているのではないんだが」

「ふつ、君は『魔法』も『学』も貴族としての『誇り』も、持っていない『底辺』のクリスだからね。隠さなくても別にいいよ」

俺が、この金空頭に口を開こうとしたとき、横からシエリルさんが会話に参加してきた。

「クリスへの侮辱は許さない」

・・・違った、正確には俺に売られた？喧嘩をシエリルさんが買ってしまった。

「ミス・ネージ君には関係ないだろう？」

「私には関係ある。彼への侮辱は私が許さない。すぐに取り消して」と言い、杖を握りしめるシエリルさん・・・

「待った待った待った、シエリルさん杖を下して!!」

「でも、お兄ちゃん？私もシエリルお姉ちゃんに賛成だな」

「そうですね。やはりここはお怒りになるべきだと思いますが？」

「前々から言っているだろう、俺の2つ名なんてどうでもいいって。それに今はそんなどうでも良いことを話しているんじゃない」

「でも」「だつてえ」「ですが」と3人。

「でももだつてもですがも無い」

「だけど、そんなに危険なんですか？クリスさん」と平賀君・・・さすがゆとり世代。

「君ねえ、君たちが行くこうとしているのは戦争中の国だよ？」

「それはそうですね」

「君の国で戦争中の国へわざわざ一介の学生が行くようなことがあるのかい？」

「それはそうですね・・・」俺の世界ほどの事じゃあないだろうなあ

・・・聞こえたぞ。

なるほど、どうして平賀君がそれほど強く反対しないのかが分かった。

まあ、こつちの世界ではメディアも発達してないし、実際この世界の戦争がどれほどひどいのかも俺も知らない。

どうやって止めようかと考えていたところ、

「諸君、部屋をとってきたぞ」

ワールドがやってきた。

俺たちは今、夕食を食べている。

そっぴゃあ、朝から何も食べてなかったな。

ワールドは何か目的があつて平賀君達を連れて行くこうとしている、だ

からこいつがいるときに止めようとしても無駄だろう。  
いくらなんでも今、この時間から帰れなんて言い出すことはないだ  
ろう。

少なくともあと1日、1日はチャンスがあるはずだ。  
なんて考えていると」「さて、諸君。泊まる部屋割りを言っぞ」「等と  
言い出した。

「部屋割りは、サイト君とギーシュ君、ミス・ネージュとキュルケ  
嬢、エルザ嬢とラコイ嬢、そして、ミスタ・プルトンには一人  
泊まってもらって僕とルイズが同室だ」

「なっなんでルイズとあんたが」

「僕は彼女の婚約者だ。一緒に部屋でももんだい」「なんでエルザと  
お兄ちゃんが一緒にじゃないの?」「ない?・・・へ?」

「だっかっらっ、なんでお兄ちゃんとエルザが一緒にじゃないの?」

「いや、若い男女が一緒に部屋は問題かと」  
いや、お前が言える立場じゃないだろう。

と、心の中で突っ込みを入れる俺。

「私もクリスマス様と一緒にいいです」

「い・いや、だから」

「私も一緒にいい」

ワルドがどもっている間に、エルザ・ラコイ・シエリルさんが俺と  
の相部屋を希望してきた・・・やばい。

まあ、無駄な可能性も高いがとりあえず、

「ちょっとまった、俺にも意見を言わせてくれ」

「今日言ったよね?今後1人にはさせないって」

「クリスマス様の意見は反対です」

「私は貴方にどこまでも憑いていく」

・・・無駄だった。てかラコイ、俺まだ何も言ってない。

「いや、しかしだねえ、しかも4人一緒にちょっと」

ワルド頑張れ。

「あら、いいじゃない？それに4人一緒なら逆にやましいことでもできないんじゃない？」

「黙れキュルケ！！」

「けしからん、けしからんよ。そんなうらやmゲフンゲフン。と、とにかく！そんなことほかあ反対だね」

「本音が漏れてるぞ、ミスタ・グラモン。」

「しかし、頑張れ。」

「そ、そうよ。うら若い女の子がなんてことを言うの！..」

「その前にワルドとの相部屋を反対した方がいいと思うぞミス・ヴァリエール。」

「だが、頑張れ。」

「うらやましい」

「平賀君、そういうことはもっと小声で。」

「やゝだゝ、お兄ちゃんと一緒の部屋がいゝいゝ」

「何と言おうとダメなものはダメだ！！エルザ。」

「いやしかし」

「がんばれ超頑張れワルド。」

「ヤダ！！エルザお兄ちゃんとの一緒の部屋がいい。それに私はお兄ちゃんの使い魔だもん問題ないもん」

「いやだからねええ・・・何？使い魔？君が？」

「そうだよ？エルザとラコイはお兄ちゃんの使い魔だよ？」

「そんな、馬鹿な人が使い魔だと」

「ん？ワルドの様子が変だな。」

「ええ、まあ、エルザとラコイは俺の使い魔ですけど？」

「人じゃないけど。吸血鬼と翼人だけ。言えるわけないけど。」

「急に黙り込むワルド。」

「何かぶつぶつと始祖とか何とか言っている。??」

「どうしたんですか？ワルド様？」

「いや、ちよつとねルイズ・・・」

「ちよつと君たちの使い魔のルーンを見せてくれないか？」

「えっ何で？」

「ん？そういえば俺もルーン見たことなかったな」

「え？そうだったけ？」

あの時はあまりの衝撃で、ルーンなんて完全に忘れてたからなあ。

「それで、君のルーンはどこにあるんだい」

なんかやけに食いつくなあワルド。

「えっと、フトモモだけど」

「フトモモ？手や頭じゃなくフトモモ」

と、ワルドがまたブツブツ言ったと思うと・・・

「とにかく見せてくれ」

といい、いきなりエルザのスカート『ばっ』とをめぐり上げた・・・え？

「ふむ、ルーンは・・・」と、まじまじフトモモを見ているワルド。皆が完全に固まっていると、

「きつきゃああああああああああああああああああああああ！！何すんのこの変態！！！！！！」

といい、エルザが変態の頬をはたく。

吸血鬼の腕力で、しかもフルスイングで。

結果『ずばあああああああああんなんなんなん』と、言う音と共に吹っ飛ばす変態。

キリキリキリと回転し、ちよい遠めにあるテーブルへ『ががあああああああんなん』墜落する。

「きゃああああああワルド様！！？」

と、言い動かなくなった変態に駆け寄っていくミス・ヴァリエール。変態に駆け寄るなり

「あんた、なんてことすんのよ！！」

ちよつと怒り気味のミス・ヴァリエールにキュルケさんが言う。

「ちよつと、ルイズ。じゃあ貴方はいきなり初対面の男性に、スカ

ートをめくられてもいいって言うの？」

「うっ、それは」

まあ、そうだろうな。

「だけどすごい力ねえエルザちゃん」  
うっ

「いや、その、そう、使い魔、使い魔のルーンが刻まれてからだからルーンの効果だと思っよ!!?」

「へへ使い魔の、それにしてもすごい力ねえ。ワールド様の頬、凄いことになってるわよ?」

言われ変態を見る。

・・・うわあ

赤い手形がと思ってよく見たら違った、手形の血豆が出来てる。うわあ

「あくどつかそこらへんに治療薬売ってる店でもあるんじゃない?」  
いや、俺ここではらすつもりないし。

「私探してくる。」

と言って、あわてて店の外に駆けだすミス・ヴァリエール。

「まあ、ここで寝かしても店の邪魔になるだろうし、部屋に放り込んでおこっ」

「そうね、そうしましょうか」

変態を部屋に放り込み食事を再開し、再び部屋の話題へと戻る。

「じゃあ、エルザ達とお兄ちゃんが同室ね」

「いや、だから俺はね?」

「私はクリス様の意見には反対です」

「いや、あのねまだ何も」

「私は貴方を護る」

「・・・」

どうしよう。

このままでは4人との同室が決定してしまう。  
何かいいアイディアは。

「そうだ、平賀君俺と相部屋にならないか」

「えっ、俺ですか？」

「ほら、最低でも2人部屋ならぐっと安全になるし、ね？」  
と、むしろエルザ達に言う。

「だけど」

「お前たちは俺が今朝みたいに誰かに突如襲われるかもしれないとおもってるんだらう？」

「平賀君なら腕もあるし大丈夫だって」

「ですが」

「それにもともとは2人部屋なんだから4人一緒は無理だって無理無理」

「なら私が」

「ほら誰か一人だけとなるとお前ら絶対喧嘩するだろ？だから誰でもないし腕もたつ平賀君ならみんな納得だろ？な？な？」

一気に入くしたて、3人がしばらく考え込みうとううなつた後、

「まあ、結構強いヒラガおにいちゃんなら」

よっしゃああああああ

勝った

何に？と言われると困るけど勝った

「は、なんか疲れた。風呂でも入るか」

心底疲れた、風呂にでも入って一休みしよう。・・・と思ったのだが。

「じゃあ、エルザも一緒に入る」

「い、いいですね、私もご一緒します」

「私は貴方に憑いていく」

・・・は？

「いやいやいやいやいやいやいやいやいや」

「え、あれもダメこれもダメって、じゃあ、何ならいいの？お兄ち





4人で風呂に入ることとは何とか免れ部屋に着くなり寝てしまった。

あまりにも疲れたからせつかくの説得のチャンスも忘れて・・・

### 32 (後書き)

結構前からこの回は決定していたのですが、書き終わるまで時間がかかってしまいました。

実家に住んでるんですが、親がいきなり、

「今のベットもう10何年もつかってるから買い替えることにしたからへやベット動かせるように片づけてねベットが来るのは12月3日だよ」と

俺のへやのベットの両脇には本が・・・山詰みに

俺の部屋本がたぶん1000冊ぐらいあるんですよねwww

最後に数えたのは高校生の時で約600

その後就職して寮に1年一人暮らしをしてその時に約300貯め

本と共に実家へ・・・雑誌関係とかは全部捨てましたが。

結果約1000冊

その日から延々本のいらないやつ(もう読まないやつ)をブックオフへ  
フへ

だいたい合計200冊ほど毎日毎日仕分けて貯めてはブックオフへ  
やっと一昨日片付けが終わり昨日ベットが到着、

きつかった。

ちなみに、エルザ、ラコイのルーン的位置を書くのをすっかり忘れて  
ておりました。

エルザはフトモモにラコイは胸に、ルーンを見よつとするエロペー  
ルとのひと悶着を予定していたのですがそれをつぶしたために書く  
のを完全に忘れておりました。

コンコンコンコン

う、ノック？

朝ノックの音で目を覚ます。

「ふあ〜」

なんだ？朝っぱらから。

「あ、ワルド・・・さん」

俺がベットからもそもそと出ようとしているところに、平賀君が対応した。てかワルド？

やべ昨日の事かな？

「やあサイト君おはよう。ああ、クリス君もおはよう」

あれ？俺じゃない？

「あの、昨日は・・・」

「ああ、昨日はどうも飲み過ぎてしまったようだね。はっはっはっは、エルザちゃんのルーンを見たことは覚えてはいるんだが、その前とその後からの記憶がないんだよ。何故か覚えていないことが無性に悔しいがね」

き、昨日の事を覚えてない？

「え？ちよ、あの、昨日の事は覚えてなくて、エルザちゃんのルーンを見たことは覚えてるんですか？」

平賀君が俺のききたいことを代弁してくれる。

「ああ、だがそれ以外は全く覚えてないんだ。どうやってベットに入ったとか」

そりゃそうだ、気絶しているワルドをベットに運んだんだから。

むしろ覚えていたらすごい。

強い衝撃を受けると記憶障害が起ると聞いたことがある。まさしくそれだろう。

「あゝそれでどうしたんですか？ワルドさん？」

平賀君が余計なことを言う前に、俺がワルドに話しかける。

「いや、サイト君と少々勝負がしたくてね」

「え？俺と？」

「何でまた平賀君と？」

「いや、あの土くれのフーケを撃退したという、サイト君の腕を見たくてね」

「え？俺がですか？」

ん？何を言っているんだこいつ？

「いえ、俺は何もしてないですけど」

「へ？」

そこで俺は口を出す。

「そもそも、なんで『平賀君』が、そこにいたことを知っていて、何故『平賀君』が撃退したと思ってるんですか？」

「え？いや、その、風の噂で聞いてね」

「へえ、ただの『平民』である平賀君が、貴族に混じって活躍したと言ふ事を風の噂で聞いたと？」

あまりにもおかしすぎる。トリスティンのプライドの高い貴族が、『平民の活躍』を噂するなど。

活躍を無かったことにするなら話は別だが。

「いや、あとはほら、ギーシュ・ド・グラモン。そう、かの陸軍元帥を父に持つ名門・グラモン伯爵家。四男とはいえ彼に決闘で打ち勝つとは大したもんだ」

「そ、その話を聞いて是非にと手合せをね」

ますます怪しいぞ。てか怪しく無い所が見つからないんだが。

そんな話が流れる可能性は、土くれのフーケを撃退したと言ふ話が流れるよりも低い。

これは、学院に密偵を放つてたと見るべきか？  
いや、しかし利点はなんだ？

学院にガリア王族がいるからその関係上とかならまだわかるが。  
いや、そうなのか？やばい、そっちのがまだ信憑性がある。

下手するとエルザを始め、俺が関わった人たちが危ない。

「と、とにかく、朝食を食べたらちよつと付き合ってくれないか？」  
考えていたら、ワールドが話を進めてきた。

ワールドは少なくとも、この任務において今現在、裏切り者に位置づけられてもおかしくない立場にある。

このまま放っておいたら平賀君が巻き込まれる可能性がある。

しかし、だからと言って俺が無理やり止めたら変だ。

「わかりました、いいですよ？」

しかも平賀君が受けてしまった、どうする・・・

「えっと、その」

「何だい？クリス君？」

「いや・・・そう、魔法衛士隊隊長である貴方が相手とは、その、平賀君が少し気の毒で・・・」

「え？」

「いや、まあ、平賀君？相手はあの魔法衛士隊『隊長』だ。流石にミスタ・グラモンとは比べ物にならないほど強いだろう」

特に隊長を強調して言う

「え？そこまでですか？クリスさん」

よし、少し平賀君がビビったぞ。

「いや、彼は言い過ぎ」そうだと！魔法学院の生徒とは比べ物にならないだろう！！まあ、いくらなんでもワールドさんも本気にはならないだろうから胸を借りるつもりでかかちなさい！！ねえ？ワールドさん？」ああ、いや、まあ、そうだね。ハッハッハッハ、その、流石に手加減はするよ？うん、すると

よしっ、後はこれと同じことをみんなの前で、特にミス・ヴァリエールの前でもう一度言えば、平賀君が大けがを負わされることはな

いだろっ。

「はっはい、よ、よろしくお願いします。ワ、ワルドさん」

少し平賀君の顔が引きつっていたが、どうやら断らずそのままやるようだ。

朝から疲れた。

朝食をとりながら、俺は遍在からの報告を受ける。

ワルド遍在と別れた傭兵共は2つに別れた。

と、言っても頭と呼ばれていた奴と、その他に別れたため傭兵団の頭を追ったそうだ。

その後ラ・ロシエールの、俺たちが泊まった女神の杵亭とは真逆の、ぼろい酒場に入っていく。

しばらく間を開けて酒場に入り、適当に飲み物を注文し、傭兵団の頭に接触するであろう人物を待つ。

しばらくすると・・・白い仮面をつけたメチャクチャ怪しい人物が入ってきた。

いや、わかりやすすぎるだろう。

もうちよつと隠せよ。

「よう、旦那ア、待ってたぜ？」

傭兵団の頭がワルドの遍在に話しかける。

遍在がくる時間から見て女神の杵亭の店主に話をしに行った時だろう。

その時の話の内容は、

「出来るだけ人を集めろ、そして自分の合図により女神の杵亭に襲撃をかける、ある程度経ったら撤退していい」

とのことだった。

傭兵団の頭に「前金だ」と、言い袋に入った状態で金を渡したようだ。

全部が金貨なら大体500エキューと言ったところか。

傭兵団の頭はその依頼を受けたようだ。

ワルド遍在が酒場を出る前に先に出る。

しばらくし、ワルド遍在が出てきたが、何か様子が変わる。

「本体？返事をしる本体」

と、言っていたが・・・

ああ、エルザに吹っ飛ばされた時か。

しばらく悩んだ後、遍在は消滅を選んだようで姿を消した。

恐らく、ここまではエルザに吹っ飛ばされること以外は予定道理なのだろう。

ふうむ、傭兵共の件と言い、ワルドの目的がますますわからん。

自分を攻撃させる？

いや、ターゲットが俺たちの中にいるのか？

しかし、俺やエルザ達は予定外のはずだ。

だとすると、平賀君・ミス・ヴァリエール・ミスタ・グラモンにターゲットが限られるが・・・

この3人を狙う理由がわからない。

やはり、この任務の内容を知らなければわからないな。

朝食の時にワルドが先ほどの手合せの話をし、俺が先ほどのワルドの手加減の話をする。

しばらくし、この宿の裏にあるという広場に皆で行く。

ちなみに、エルザは終始ワルドを睨んでおり。ワルドの方は、何故睨まれているのかわからないみたいに対応をし、話を聞く限り皆が『ああ、あの物凄い張り手のせいで記憶が・・・』と、理解したよう。昨日の事は誰一人としてしゃべらなかつた。



### 33 (後書き)

ども

ご指摘の32話の一介直しました

クリスはワルドの目的がわからずますます混乱するばかり。

次号あの人物に悲劇が・・・

お楽しみに。

昨日に引き続き物語には全く関係ない話をしますが。

俺の部屋にはまだ約800冊のほんがあるんですねww

完全に片づけるのは不可能。

しかも本は大丈夫だったのですが、鉄製(おそらくアルミニウムか

何か)の本棚にカビが・・・

紙ではなく鉄に・・・

本棚を交換するにしても本が・・・

自炊でもしよかなww

朝食を食べている最中に遍在からワルド遍在の動向を聞き、裏の広場への移動中、エルザ・ラコイ・シエリルさん・キュルケさんには話たほうがいいと、決定づける。

ワルド遍在は言っていた、『自分の合図により女神の杵亭に襲撃をかける』と。

今日はアルビオンへの船が出ないため、今日も『女神の杵亭』に泊まる事になるだろう。

今、俺たちは裏の広場へと向かっている。

女神の杵亭に戻るのは最低でも、平賀君の腕試しとやらが終わってからだろう。

つまり、女神の杵亭に戻ってから明日の出発までに襲撃があると、言う事だ。

まあ、とりあえず・・・もう広場についてしまったので、話すのは終わってからだな。

平賀君がデルフリンガーを、ワルドが軍杖剣を構える。

「きゃ〜、ダーリンがんばって〜」

「サイトー無茶しちゃだめよー」

「君はボクを倒したんだー、情けない戦いは許さないぞー」

「相棒、気張らずに行こうや」

等と人の気も知らずにのんきに応援している4人と1本「ヒラガお兄ちゃん、がんばってー」

「ヒラガさんがんばってー」

「・・・がんばれ」

7人が応援していた。

「・・・まあ、平賀君。怪我をしないよう気を付けて」はあ

「ふふ・・・サイト君、来たまえ」

「はい、おおおおおおおおおお」

平賀君が駆け、ワルドに切りかかり、真っ直ぐデルフリンガーを振り上げ、振り下ろす。

ワルドはそれを何の苦も無く受け・流し・避ける。

完全にワルドのペースだな、無理もないけど。  
場数が違いすぎる。

「ふむ、早く力もある。だが、それだけでは、ある程度戦闘経験があるものには勝てないぞ？サイト君」

「くっそおおお」

また少し、平賀君のスピードが上がる。だがそれでもワルドに届かない。

「さて、僕はメイジだ。そろそろ魔法を使わせてもらおうよ？」

「いけねえ、相棒離れる」

ワルドは素早く呪文を紡ぎ、平賀君へ魔法を放つ。

「エアハンマー」

ドンッ

「うわああああああ」

エアハンマーが平賀君に当たり、積み重ねてあった樽へと突っ込む。

『どこおおおおおん』

『がらがらがら』

「ふう、まあ、こんなものかな？一応加減はしておいたから、怪我はしてないと思うが」

「サイトっ」

平賀君に駆け寄り、ミス・ヴァリエール。

「まあ、しょうがないわね」

やれやれ、とでも言いそうなキュルケさん。

「まあ、流石は魔法衛士隊長殿・・・か」

どこか悔しそうに言うミスタ・グラモン。

「大丈夫かな？ヒラガお兄ちゃん」

「ああ、あの程度じゃ怪我はしないだろうな・・・樽に突っ込みされなければ」

確かに『魔法』では、怪我はしないよう手加減はしてあったみたいだが。

「負けちゃいましたね、ヒラガさん」

「まあ、実力差がありすぎるからな。どうしようもない」

少し前まで、戦闘のせの字も知らなかったわけだからなあ。

「負けてあたりまえ」

「ま、そうだな」

等と話している最中、平賀君がミス・ヴァリエールにひっぱり起こされる。

「いてててて」

「怪我はない？サイト」

「ああ、大丈夫だよルイズ」

「ふむ、サイト君、きみは『使い魔』だ」

唐突にワルドが話し出す。

「あ、はいそうですけど」

「速さ、力はなかなかのものだが、それだけだ」

「・・・」

「素人が少し早く動けると変わらん」

そりゃそうだ、なにせ平賀君は文字道理素人なんだから。

「使い魔の使命は主人を守ること・・・だが、君ではルイズは守れない」

「だって、だってあなたはあの魔法衛士隊の隊長じゃない！強くて当たり前じゃないの！」

うん、それは今朝言ったはずですけど？と口を出そうとしたら

「そうだよ。でも、アルビオンに行っても敵を選ぶつもりかい？強力な敵に囲まれたとき、きみはこう言うつもりかい？私たちは弱いんです。だから、杖を収めてくださいって」

だから、行くなつて言つてるんだよ。

ミス・ヴァリエールは黙り平賀君を見つめる。

平賀君も悔しそうに唇をかむ。

「いこう、ルイズ」

ワルドがミス・ヴァリエールを連れて行こうとしたとき

「待つてワルドさん」

エルザが待つたをかけた。そのまま行つてくれればワルドの事が話せたのに。

ワルドが振り向きエルザを見る。

「何だいエルザちゃん」

「要は今はヒラガお兄ちゃんの使い魔としての實力を見たんでしよ？」

「ん？いやまあ、そうだよ？」

いや、さっきのワルドの言ったことから見て、平賀君とミス・ヴァリエールを離す為だろうな。

「じゃあ、私も見て」

「「え？」」

思わず俺とワルドの声が重なる。

「いやいや、それは」

と、言つてちらつと俺を見てくるワルド。

「エルザ？なんでまた」

「いいじゃんお兄ちゃん、私も使い魔なんだよ？お兄ちゃんを守りたいもん」昨日、お兄ちゃんに攻撃してくれたお礼もしてないし

エルザは真の目的をつぶやいた。

「そうですね、私もクリスマス様を守るかどうか見てもらいましょう」

・・・ラコイも聞こえたようだ。

「わたしも」

シエリルさんまで。

「ぶう。まあ、いいだろう」

ワルドが了承する・・・死んだな。

「わーい、じゃあヒラガお兄ちゃん、デルフリンガー借りるね？」  
と言い先ほど平賀君がエアハンマーで手放したデルフリンガーを「  
んしょんしょ」と言って引きずる。

お、恐ろしい。俺は、いやここにいるワルドを除いたすべての者が、  
エルザのたくらみに気づいたことだろう。

「じゃあ、んしょんしょ、いくよお」

相変わらず、カラカラとデルフリンガーを引きずる演技中のエルザ。  
「頑張りましようね、みなさん」

と、弱そうに握りこぶしを作るラコイ。

「がんばる」

と、自分の杖をグツと握るシェリルさん。

「ふう、やれやれ、じゃあ来きたまえ」

と、完全に油断したワルド。

「だ、駄目よワルド油断しないで」

ミス・ヴァリエールが声をかけ、

「はっはっは、大丈夫だよルイズ」

と、ミス・ヴァリエールの方を向いたワルド。

その瞬間、エルザがデルフリンガーを『ヒョイ』と、肩に担ぎ平賀  
君と同等レベルの速さでワルドへ突っ込む。

視界の端で見えたのだろう「なっ」と、言いあわて軍杖剣を構える  
ワルド。

エルザは「ふっ」とデルフリンガーを横に薙ぐ。

自分の前に軍杖剣を盾にするように立てるが、エルザはそれを見る  
なり少しデルフリンガーをずらし、デルフリンガーの先端を軍杖剣  
の根元に当てる。

すると、かなりの勢いで振るわれたデルフリンガーは、その勢いを  
受け流すことが出来なかった軍杖剣を

『キンッ』

斬り飛ばす。

「なっ」

驚愕するワルド

エルザは勢いそのまま、下からデルフリンガーの腹でワルドを打ち上げる。

「ちよつまつぐふああああ」

ワルドが『ズガアアアアアン』空中へと回転しながら『キリキリキリ』打ち上げられ、そこへシェリルさんの「エアツハンマアアア」明らかに全力のエアハンマーがワルドを『ドコオオオオオンン』襲う。もはやワルドは声を発しない。

回転中に別方向から力を加えられたため『ギャリギャリギャリ』と回転する。

回転しながら落下するワルドの落下地点にラコイがいるが、いくら巫人とは言え翼人は、人よりも少し力が強い程度、いったいなにを・・・口が動いている。

この位置では聞こえないが、まず間違いなく精霊魔法だ。落下しラコイに近づいたワルドの頬にラコイの張り手が『ズバアアアアアアンン』炸裂する。

回転中に別方向から力を加えられたため『ギャリヤギャリヤギャリヤ』と回転しながら空を逝くワルド・・・人つてあんなふう回転できるんだ。

先ほど平賀君が突っ込んだ樽の山へ、平賀君の比ではない勢いで突っ込む『ズガガガガガアアアアアアンンン』樽の山が吹き飛んだ。

「うわあ、もしかして死んじゃったんじゃ」

俺もそう思うよキュルケさん

「・・・ミスタ・プルトン！！今までの非礼を詫びる！！どうか許してくれええええ」

と、五体投地する、ミスタ・グラモン。気にしてないよ

「ワルド、ざまあww」

平賀君根に持つてるなあ

「・・・」

ひたすら呆然とするミス・ヴァリエール

『とことこ』とエルザがワルドに近づきデルフリンガーの先端で『つんつん』とつつく。

いやまあ、デルフリンガーは剣なので正確には『プスプス』なんだが。

すると「がつぐつ」と、うめくワルド。

「うんっ生きてる」

『キャハッ』と音が出そうな笑顔で言うエルザ。

「きゃああああああ、ワルド様ああああああ」

ミス・ヴァリエールがワルドへ駆け寄る。

「あっあんたなにんてことすんのよ」

ミス・ヴァリエールがエルザに怒鳴る。

「えー？でもさっきワルドさんが『アルビオンに行っても敵を選ぶつもりかい？強力な敵に囲まれたとき、きみはこう言うつもりかい？私たちは弱いんです。だから、杖を収めてくださいって』って言ってたよね？」

にこやかに言うエルザ。

「そっそれは」

「そうですねえ、相手がこちらの油断を誘ってくるかもしれないよ？」

同じく、にこやかに言うラコイ。

「でっでもワルドは杖を」

「敵はこちらが杖を持っていなくとも攻撃してくる。先ほどのワルドの言葉を借りるなら、油断したワルドが悪い」

同じく、無表情で言うシェリルさん。

「・・・」

ついには黙り込む、ミス・ヴァリエール。

「まっまあそんなことよりも早く宿にワルドを連れて行って治療した方がいいんじゃない？ルイス」

キュルケさんが、こちらをちらちらと見ながら言う・・・治



療するべきか否か。

俺はとりあえず、五体投地中のミスタ・グラモンへ呼びかける。

「あーミスタ・グラモン？」

「はっはいいいいいいいい！！なんでしょうかプルトン様！！」  
様とな！！

「いっいや気にしてないから！！その五体投地をやめて！！」

「ありがとうございますううううう！！ありがとうございますううううう！！」

よほど今の光景が怖かったのだらう涙を流しながら感謝された・・・  
エルザのつぶやき聞こえてたのかな？

「とりあえずワルドさんを部屋に運ぼう手伝ってくれ」

「はっはいいいいいい、喜んで手伝わせていただきますううう」  
どうやってミスタ・グラモンを落ち着かせようか。

34 (後書き)

おいつす。

今回は一言

ワルド無残WWW

何とか昨日と同じくワルドを部屋に運ぶ。

終始ミスタ・グラモンが「ごめんなさいごめんなさい」と言い、エルザが「なにをあやまつているのかな？」と、ラコイも「さあ？わかりませんね」と言っていた。

お、恐ろしい。

もうすでにミス・ヴァリエールは昨日と同じく水の秘薬を買いに行っている。

部屋にワルドを運び、廊下に出るなり。

「プルトン様！どうか私めをお許しくださいiiiiiiii」

「いや、だから俺は気にしてないって！！」

「ほんと、いったい何を謝ってるのかな。ねえ、ラコイ？」

「ほんとうですね、いったい何を謝っているのやらシエリルさん？」

「意味不明」

エルザ・ラコイ・シエリルさんが、ミスタ・グラモンを脅す。

「そっそれは、それは」

カチカチカチと奥歯がかみ合わなくなるほど脅えるミスタ・グラモン。

「てっ底辺と言っていたことを」

「ふん。誰が？誰に？」

冷たい目で、ミスタ・グラモンを見るエルザ。

「はつきり言ってくださらないと、わかりませんね」

同じく冷たい目をするラコイ。

「意味不明」

これまた冷たい目をするシエリルさん。

ちなみに、キュルケさんはこの場を、もうすでに逃げている。

「そつそれは・・・ミスタ・プルトンに」

「・・・プルトン？」

「いっいえ、プルトン様に」

思わずため息が出る。

「はあ、こちらこちら、やめやめやめ」

「お兄ちゃんはどういつてるけど・・・グラモンお兄ちゃん？腕試しでもする？」

「いいですね」

「素晴らしいアイディア」

「ひっひひいいいいいい」

「はあ、だからやめろって」

それに、ほかの客の視線が痛い。

しばらくしミス・ヴァリエールが戻ってきて、部屋に籠りワルドの看病を始める。

俺たちは下の階でのんびりしている。

「ちえっ、なんだよルイズのやつ」

秘薬をワルドに与えた後、何もすることがないはずなのに、部屋から出てこないミス・ヴァリエールにむくれている平賀君。

「まあ、しょうがないわよダーリン」

それを慰めるキュルケさん。

「まったくあれっぽっちで情けない男ねえ。ねえ？グラモンお兄ちゃん？」

エルザが再びミスタ・グラモンをいじり始める。

「はっはい、エルザさん」

「クスクスクス、何をそんなに脅えているんですか？グラモンさん？」

それに乗っかるラコイ。

「いっいえ、脅えてなんて」

「理解不能」

心なしかシエリルさんも楽しそうに言っている。

「ひっひひひひひひひ」

「はあく、いい加減そのわけのわからん悪乗りをやめろ」  
思わずため息が出る。

しかし、ワルドが敵だとエルザに言わなくてよかった。

じゃなかったら斬れたのは軍杖剣ではなく・・・ワルドの首だった  
かもしれん。

いくら敵だとは言え、人の首が宙を舞うところなんぞ見たくない。

「しっかしエルザ、お前があれほど強かったなんて知らなかったぞ  
？」

「あくうん、お兄ちゃんに合う前に色々あったから」

ああ、まだ食事は人間の血だった頃か。

そっぴいあ、その手の話はほとんど聞かなかったな。

とりあえず、どうやって平賀君とミスタ・グラモンと離れて、ワ  
ルドの話をしようかと思っていたら、突如、遍在から連絡が入る。

『傭兵共に遍在が接触した』と。

恐らくワルドが平賀君の腕試し前に遍在を作っていたのだろう。

・・・エルザ達に吹っ飛ばされるのは、完全に予想外だったようだ。  
そりゃそうか。

俺たちがワルドを部屋に放り込み、ミス・ヴァリエールが宿に戻っ  
てきてしばらく後、白い仮面をかぶった怪しすぎる遍在ワルドが、  
傭兵共が止まっている宿屋に飛び込んできて、

「女神の杵亭へ、今すぐ襲撃をかける」

そのとき、ローブに身を包みワインを嗜んでいた俺の遍在は、ワイ  
ンを吹き出しそうになったとか。

いや、何してるんだ？俺（遍在）

報告を聞きすぐさま立ち上がり、どう言おうと数瞬迷ったがすでに  
遅かったらしく、外からかなりの数の人の声が聞こえる。

「あらやだ、お祭りか何か？」

と言って、窓から外を覗こうとしたキュルケさんを、引つ張り窓から離す。

「ちよつとなにを」

その瞬間『パリン』と言う音と共に、数本の矢が飛び込んでくる。

「くっくっくえっ！？」

「くっ、敵襲だ奥へ行け！！」

今まで囲っていた円卓を起こし、宿のドアが開いた瞬間「エアハンマーツ」ドアめがけて円卓を吹き飛ばす。

これで、入った瞬間物が飛んでくるとわかり、しばらくは警戒してくれるはずだ。

「平賀君、ミスタ・グラモン、今すぐミス・ヴァリエールとワールドさんを連れてくるんだ」

「はっはい」

平賀君達が戻ってくるまで時間を稼がなくては。

「なにになに??どうして襲われてるの??」

キュルケさんが、錯乱状態で訪ねてくる。

「わからんが、ワールドが1枚かんでいることは確かだ」

「ワールドが？」

「昨日の物取り共もワールドに雇われた者たちだ」

襲われて初めて説明できる状況になるとは。

「どういうこと？」

「恐らく、いや、まず間違いなく、平賀君達がアルピオンに行くことに関係しているはずだ」

「そもそも、何であなたがワールドが何をしていたか知っているの？」

「それは」

そんなことを説明している暇は、

「私はお兄ちゃんの言うことを信じてるよ?」

「ヒラガさん達には、まだ言えないんですよね?」

「私は貴方を信じる」

「お前ら・・・」

いや、信じてもらえるって嬉しいねえ。

「シエリルまで・・・ふう、わかったわよ。私も信じるけど後で話してね?」

「わかった。しっかしまさか、真昼間から襲撃されるとは」

夜まで時間があるかと思つてたんだが。

「それで、これからどうするの?」

「とりあえず、平賀君達を待つてここから脱出する」

「ワールドを連れて行つてもいいの?お兄ちゃん」

本当は置いていきたいが

「置いていくとなると、平賀君・・・は簡単だろうが、他の2人を説得に時間がかかるかもしれない。今は時間がほしい」

「なるほどね。あちらの事情が分からない以上、下手をするとこっちが敵になる可能性がある」と

「そういうことだ、キュルケさん。呑み込みが早くて助かる」

とりあえず、外から入つてこようとすると奴らを入れないよう、吹っ飛ばしつつ平賀君達を待つ。

「クリスさん、連れてきました」

平賀君達がワールドを引きずつてやってきた。

「ちよつとなんなのよ、この騒ぎは」

「ルイズ、この前の連中は、ただの物取りじゃなかったってことよ」

「今はまだ、入つてはこないが時間の問題だ」

エアハンマーを撃ちつつ、現状を言う。

「ぼくのゴーレムで防いでやる」

ミスタ・グラモンが青ざめながら言った。

「ギーシュ、あなたの『ワルキューレ』じゃあ、無理よ。相手の実力は解らないけど、数が多すぎるわ」

「とりあえずここから逃げ出すぞ、ラ・ロシエールから離ればあいつらも追つてはこないだろう」

俺はさりげなく、アルビオン行きをやめるように言うが、  
「だめよそんなの！！私たちはアルビオンへ行かなくちゃいけないんだから」

駄目か。

「だからルイズ、その目的を言いなさい」

「い、言えるわけないじゃない。密命よ」

言ってるやないか。

つまり、最低でも反対しそうなオスマン以上の、地位の者からの命令か。

「目的地に行かなければならないような任務では、たとえ半数でもたどりつけば成功とされる」

唐突にシエリルさんが口を開く。

「シエリル？」

「私が囿になる、行って」

「は？」

いったい何を、

「それにどっちみち、ここから脱出するのに囿が必要」

「おいおい、そんなこと」

「しょうがないわねえ、私も付き合っつわよシエリル」

「ちよつと、キュルケさんまで」

「じゃあ、私も残るラコイ、お兄ちゃんちゃんと守ってね？」

「はい、エルザちゃん」

「こらこら、はいじゃないはいじゃない」

「つぶ、女性ばかり残すわけにはいかないな、ぼくも残ろう」

「・・・」

「なんでぼくの時には何も言わないんだい？君は」

「そんなこと、させるわけにはいかないだろ」

「じゃあどうするの？お兄ちゃん」

先ほどまで「わしの店が何をした！！」と、訴えていた店主を見る。

「おい、店主」



「なんでございましょう」

「裏口はどこだ」

「あそこでもございますが」

「他の客は泊まっているか」

「ははは、他のお客はみんな外でわめいてますよ」

いや、その、すまん。

ワルドの服をまさぐり、財布を取り出す。

「ちょっと、あんた何をしているのよ!!」

「いや、店主、少ないかもしれないがこれ弁償代だ」

言って財布を店主に放る。

「何を勝手なことを」

「密命とやらの任務の責任者が、弁償するのが筋じゃないのか」

「責任者はワルドじゃ」

「金、持つてる?」

「うっ」

ミス・ヴァリエールを黙らした後、厨房へ行き油を持ってくる。

「それ、どうするの?お兄ちゃん」

「ん?追ってくるなら、追えないようにするだけだ」

と言って、油を入り口にぶちまける。

「キュルケさん、火を頼む」

「えっでも」

「裏口に奴らが来ているのなら、とっくに入ってきているだろう」  
「キュルケさんが「確かに」とつぶやくと、ファイヤーボールを放った。

その間に、ワルドにレビテーションを掛けておく。

「念のため、ミスタ・グラモン。ゴーレムを2体先行させてくれ」

「わかった」

「さあ、困なんぞ要らない。皆で脱出するぞ」

テーブルクロスをゴーレムに巻き付け、一見して人だと思えるようにしておく。

こうしておけば、もし待ち伏せがあってもまず、ゴーレムを攻撃するはずだ。

襲撃が真昼間でよかった、もし夜間だったら棧橋の方角がわからなかったな。

燃え盛る、女神の杵亭を遠目に走る。

「とりあえず追っては来ないようだな」

遍在からは、こっちの姿がワルド遍在に確認されたことが報告されたが、何もしかけてこない。

やはり、本体が気絶していることで、迷っているのか？

### 35 (後書き)

つまり、ワルド遍在は本体が気を失ったことで軽く、ぱにくっている状況です。

そうそう、言おう言おうと思っていたのですが、何でクリスがエアハンマーで気を失ったかとか、設定にご都合主義が入ってないとか理由があります。

まだ言わないけれど。

## 36 (前書き)

ワールド（本体）の状態を思い出しながらご覧ください。

ワルド遍在は焦っている。

前を走りながら「本体、早く起きろ、本体！！」と、時折口から洩れている。

「くそつ、数が多すぎる。せめて、『ガンダールブ』だけでも『ガンダールブ』？　いったい何のことだ。

そう思うや否や、本体一向の方へワルド遍在が走る。

くそつ、ケチケチしないで遍在3体ぐらい動員して、倒しておけばよかったか。

「止まれワルド！！」

自分で言うのもなんだが、止まれと言われて止まる馬鹿はいないわな。

ワルド遍在はこちらを一瞥すると、走る速度を上げた。

本体！！そっちにワルド遍在が行ったぞ！！

「前方に敵だ！！止まれ！！」

遍在から報告が入り、ワルド遍在が前方に現れる。

ワルドの目的がわからないからと、泳がせたのが間違이었다。

遍在に倒すよう命令を出し、皆に泊まるよう言う。

「くるぞ！！気をつける！！」

ワルド遍在がこちらに戸惑うことなく突っ込んでくる。

「各自魔法を」

言っつてすぐ、レビティションを解き、『ゴキヤツ』簡単にさせるウオーター・ウィップ（水鞭）を唱える。

なんでもいい、とにかく他の者が唱える時間稼ぎを。

だが、ワルド遍在すでに呪文を唱えていたらしく、「ライトニン『ちゅどおおおおおんんんん』」

爆発が起こり、ワル遍が粉々に吹き飛んだ。

「……へ？」

ワル遍より先にいた俺の遍在もぼかんとしている。

「まだいるのね、ウル・カーノ！！」

『ちゅどおおおおおおんんん』

遍在の前方で爆発が起こり遍在が吹き飛ぶ。

「外れた！！もう一発ウル・カーノまで、私は見方だ！！」へ？」

念のため、遍在にもう一度言わせる。

「私は見方だ、攻撃するなよ！！」

ミス・ヴァリエールの魔法が、あいかわずなんという威力だ。

遍在がワル遍がいたところに落ちていた、白い仮面と皮袋を拾う。

そのまま、仮面をかぶり杖と皮袋をしまい両手を上げこちらに来る。

ミス・ヴァリエールが胡散臭そうに、

「味方？本当に？」

と、言ってくる。

怪しさ爆発なのはわかっていて、だが、納得してくれ。

「本当だ。顔は見せることが出来ないが、これは『密命』なのでな。

密かに護衛を仰せつかったのだ」

先ほどミス・ヴァリエールが言った『密命』を強調して言う。

「顔を見せてくれなきゃ、信用できないわ」

くっ、桃空頭のくせに、至極当然なことを、しかし顔を見せるわけ

にはいかん。

声は無理やり出し方を変えて違うように聞こえるが、顔は変わらん。

「残念だが、顔を見せるわけにはいかない、だが、行動で信用して

もらっしかない」

「どうということ？」

「追っては私が食い止めよう」

まあ、追ってはこないだろうが、遍在なのでここで放置しても問題

ないしな。

「そう言って、後ろから襲ってくるのかするんじゃないでしょうね」

桃空頭め、余計なことを。

ミス・ヴァリエールの一言で、一気に警戒ムードになる。

「ふう、このままではどうあっても、信用してもらえないようだな。わかった、では私が先頭を行こう」

俺はこっそり一番後ろに立つ。

「一番後方の君、殿を頼む。ただし敵が来たらすぐさま、私が相対する」

「わかりました」

これでよし！！と思っただけで待ったが入る。

「殿は私に任せて」

シエリルさんから。

「えっ、そんなことをさせるわけには」

「大丈夫」

そう言い口笛を吹く。いったい何を、と思っただけでいたら『バツバツサ』と何かがはばたく音が・・・ああ、すっかり忘れていた。

「私の使い魔。空から監視させる」

なるほど、確かにそれなら安全だ。

「わかった。あと、その、ワールドを君の使い魔の背中に乗せてやってはくれまいか」

遍在に言われ、地面に倒れ伏しているワールドを見る。

・・・少し痙攣している。しかも、他のみんなからは角度的に見えないかもしれないが、あれは、耳血？もしかして、やばい落ち方でもしたか？

遍在から声には出さず「前から見ていたが、頭から落ちていたぞ」と、言われる。

「シエリルさん、俺からも頼む」

「わかった」

まず、目が覚めることはないだろう。頭に『永遠に』が付かない事を祈る・・・必要があるかな？

まあ、死なれても目覚めが悪いし、とりあえず祈っていよう。

そのまま、遍在を先頭に棧橋まで走る。

「凄げえ」

巨大な樹にぶら下がった船を、階段を駆け上りながら見て、平賀君が驚きの声を上げる。

「あれが『棧橋』？そしてあれが『船』？」

平賀君が驚いた声で言うと、ミス・ヴァリエールが怪訝な顔で聞き返した。

「そうよ。サイトの国じゃ違うの？」

まあ、違う所の騒ぎじゃないが。

「棧橋も船も、海にある」

「海に浮かぶ船もあれば、空に浮かぶ船もあるわ」

いや、ねえよ！！って言ってやりたい。

今まで、話には聞いたことがあったが、見たことがなかった。

『航空力学に真っ向から喧嘩を売ってやる』と言われても、納得できそうだ。

ホントに船だよ、飛びにくそう。

遍在が看板を見て俺たちを連れ、木の根元にあるトンネルを通過する。

どうやら、枯れた大樹の幹をうがって造ったものようだ。

生物には固定化は効かないからな。この部分が生きていたらとっくに崩れて無くなっているだろう。

各枝に通じる階段には、鉄でできた看板が貼ってあった。

そのまま、アルビオン行きの階段を見つけると、その階段を上る。

木で出来た階段は、1段ごとにしなり若干怖い。

手すりについているが『固定化』が『かかっているであろう』と言う予測なので更に怖い。まあ、落ちてもレベティションかフライで助かるが、怖いものは怖い。

そのまま、階段を上りきる。

上り切った先には、1本の枝が伸びていた。その枝には1艘の船が



停泊していた。

帆船？船の横から翼が生えている。色々突っ込みたいが、まあ、空飛ぶ船の構造も知らないし、でも・・・そう言う問題じゃあないよ  
うな。

色々思う所はあるが、今はとりあえず置いておこう。

このグループの中では俺の遍在が一応はリーダー各なので、船の上にいる船員に話しかける。

「ちよつといいいか！！」

「な！なんでえお前は！！」

いきなり警戒心MAXに！！見た目完全不審者なのを忘れていた。

「すまん、誰か説明を頼む。私は後ろを見張る」

仮面を取るわけにはいかないので、説明を早々に諦め、他の者にパスをする。

「じゃあ、私が説明するわ」

頼んだぞ（失敗しろ）ミス・ヴァリエール。

そのまま遍在は、交渉する一団を後目に俺の下へ来る。

隣で思いつきり警戒しているシエリルさん。

「大丈夫だよ、シエリルお姉ちゃん」

エルザがシエリルさんに言う。

「この人たぶん、お兄ちゃんの遍在だよ？」

「おお、良くわかったな」

元々、この任務を命じられた平賀君達と離れている為、堂々と話せる。

「言つてよかつたんですか？」

「ラコイもか」

「貴方、さつきからずっと思ってたけど、水の使い手じゃあなかったの？」

「貴方が風も使えるのは知ってたけど、まさかスクエアだったの？」  
キュルケさんとシエリルさんが驚く。

「ああ、学院では水のドットと名乗っていたからな。俺のメイン

は風だ」「

等と話していると、向こうからミス・ヴァリエールがやってくる。

「ちよっときてー!!」

呼ばれ、船の所に行くと、船長が胡散臭そうな目で見てくる。怪しいのは十二分に分かっている。

「あー、あなたの方がアルビオンへ何しに行くのかは存じ上げませんが、明日にならないと出発できませんよ?」

「そこを何とかならないの!?!」

「アルビオンが最もここ、ラ・ロシエールに近づくのは明日の朝です!その前に出航したんでは、風石が足りませんや!」

「風石って?」

平賀君が尋ねる。船長は『風石』も知らんのか?と言った顔つきになる。

「あー、サイト君と言ったね、風石とは『風』の魔法力を蓄えたものでね、フライ等に似た効果を發揮して、それで船を浮かせるんだ」  
遍在が平賀君にわかりやすく説明する。

説明が終わると同時に船長が言ってくる。

「貴族様、当船はアルビオンへの最短距離文しか風石を積んでいません。それ以上積もうものなら足が出ちまいますゆえ。したがって今は出航できやせん。途中で落っこちまいますあ」

「ふうむ、困ったな」

よっし、アルビオン行きは断念だ。

「つまり、風石があればいいんですよ」

「ヴァリエール嬢、その風石がないんだが」

まったく何を言っているんだか、この桃空頭は。

「だったら、よそから買ってくればいいじゃない」

・・・へ?

「いや、貴族様?その、あっしらは金が」

「ちよっと、ギーシュ」

「いや、持ち合わせは残念ながら」

「サイト」

「あるわけねーじゃん」

「えっと、ミスタ・プルトン」

「気絶させられて無理やりだったからなあ」

「キユルケ」

「私も、出かけたのを見て飛び出してきたからねえ」

「ミス・ネージユ」

「キユルケに寝巻きのまま連れ出された」

「そうだ、護衛のえっと」

「ああ、すまんね、名前も出せないんだ。それと、なにぶん急だったのね、私も持ち合わせが」

悔しそうに、爪をかむミス・ヴァリエール。

そのまま、諦める。

「そうだ」

グラモンが声をあげ注目が集まる。

「先ほど敵が残した仮面の他に、皮袋を拾ってましたよね。あれはや・ば・い」

先ほど拾った皮袋、用兵がごねた時用なのか、後払いなのかは知らないが間違いなく金だった。

どうごまかすか迷ったが、ちょっと無理だった。

「ああ、これか」

渋々懐から、皮袋取り出す。

「これだけありゃあ、他の船から風石が十分買えますぜ」

「じゃあすぐにお願い」

止められなかった。

36 (後書き)

はい、36話です。・・・37話でじつじつおわり。

ミス・ヴァリエール等は今船の中にいる。  
とめることは出来なかった。

内戦中のアルビオンへ向けて、今、『俺たち』は船に乗って飛んでいる。

金を渡した後の船長の行動は早かった。何せ、

「これだけありゃあ、アルビオンと往復してもおつりが来る」

「いいわ、余ったら全部上げるから早くして」

「うおっしゃああ、おい野郎共！！臨時ボーナスだ、さっさと働けえ」

「……了解だ船長」「……」

早かった。

いや、何が早かったって、ともかく早かった。

船員の動きがまるで3倍速を見ているようだった。

引き止めることは不可能。

アルビオンは今、安全は保障されない場所。

だが、シエリルさんの母親の件もあり、俺は死ぬ事は出来ない、参加は無理だ。

平賀君、ひいてはクラスメイトである彼らを、死なせたくはない。悩む。

遍在を総動員するか。

しかし、滞在期間が延びれば今の遍在では3日で消える。戦闘を行えば1日と持たない。

一体ずつ遍石からだしたとしても……

「行く」

「シエリルさん？」

「アルビオンへ行く」

「私は元々ルイズが心配だから行くつもりだったけれど、あなた達が来てくれれば心強いわ」

「キュルケさんまで」

「大丈夫だよ、お兄ちゃん私達もいるんだし」

「そうですね、私達もいるんです。そこら辺のメイジなんか敵じゃありませんよ」

「わかった、ありがとう」

そして冒頭に戻る。

ちなみに遍在は置いてきた。

「追っ手が来るかもしれない、私は残ろう」と言わせて。

「さて、今ルイズ達は船の中にいるわ、貴方が一体どのくらいのメイジなのか教えて」

キュルケさんが、周りに人がいないことを確認しつつ、聞いてくる。

「私も知りたい」

シエリルさんまで。

「ふっふっふっふっ、私達は知ってるもんねー、ね、ラコイ」

「ふふ、ええそうですねエルザちゃん」

何がそんなに嬉しいんだかわからないが、嬉しそうに話すエルザとラコイ。

「・・・」

シエリルさんは何故かムツとしている。

「今は、風のスクエア・水のトリアングル・土のライン・火のラインだ」

「・・・」

2人は絶句している。

「もう少し強くなりたいんだけど、ここ最近伸び悩んでてね」

「……」

2人は絶句している。

「そっぴゃあ、キュルケさんは火のトライアングルだったね、火で成長させるのにいい方法って知ってるかい？」

「……」

2人は絶句している。

「おい」

2人の前で手を振ってみる。

「貴方……天才？」

キュルケさんが唐突に言い出す。

「は？」

「貴方は天才」

シエリルさんも言い出す。

「天才？俺が？」

思わず耳を疑う。

魔法に必要なのは想像力と構造を正しく理解すること。この世界では科学が殆ど発達していない為、風が如何に発生するかも知られていない。

正直この世に生まれた時点で26歳、ある程度知識もありなおかつ、妄想力豊かな俺にとっては。

……天才と言われてもなあ。

今は15歳、ああ、もう精神年齢(?) 41歳かあ。

「ちよっと、なにぼうつとしてるのよ」

「あ・ああ」

キュルケさんの言葉に我に戻る。

「それにしても凄いわねえ、その歳でスクエアだけでも驚きなのに、さらにありとあらゆる病を治せるだなんて。なんで有名じゃないの？貴方」

キユルケさんの言葉に同意するように、無言で頷くシェリルさん。  
「有名になるとか注目されるのとか、好きじゃないんだ」  
いや、本当に。

「そ・そういう問題？」

他人にとつてはくだらなくても俺にとつては重大な問題だ。  
いやだ、注目されて目立つなんて、絶対いやだ。

その後、下らない話をしつつ空の旅を楽しむ。

しばらく、空をボーッと眺めていると、隣から話し声が聞こえてくる。

「ふーん、エルザちゃんとラコイって、怪我が元でクリスと知り合  
ったんだ」

「うん、そうなの。お兄ちゃんにメイジに襲われてボロボロ担って  
たときに助けてもらったんだー」

「はい、私もです。ワイバーンに襲われて動けなくなった私を、助  
けていただきました」

「あら、それじゃあクリスは貴方達の命の恩人って訳ね？」

「うん（はい）そうだよ（です）」

「ふふふ、これは強敵ね、シェリル？ってなんで青くなってるの？」  
別に」

つて、青くもならあな。襲った張本人だもんねえ。

つか、俺も若干青くなってると思う。

たぶん言っても大丈夫だろうとは思っけど、流石に2人が『亜人』  
だなんて言えないぞ。

しかも片方は、エルフに次ぐ脅威を持つとまで言われてる『吸血鬼』  
だし。

キユルケさんは信用しているけど、知らせない方が言いと・・・う  
ん悩む。

そう言えば、マチルダ（ロングビル）さんにも言っていないなあ。



あつちはあつちで、精霊魔法が使えないとは言え、エルフだもんなあ。

その上、エルザとラコイには言っていないし。

あ、ちよつと胃が痛い。

その時

「アルビオンが見えたぞー」

マストの上の見張り台にいる船員が、大声を上げる。

その声を聞いたのだろう、平賀君たちが船内から出てくる。つて、アルビオンどこだ？

平賀君もそう思ったのだろう。

「どこにも陸地なんてないじゃないかよ」

すると、ミス・ヴァリエールが、

「どこ見てんのよ、あつちよ」

と言つて、上を指差した。

平賀君と同じく、空を見る。

「おお、ラピユ・・・」

あつぶね、もう少しでラピユタと言う所だった。平賀君にばれる。

「すげ、ラピユタだ」

どうやら平賀君は、俺と同じ気持ちだったようだ。

「驚いた？」

ミス・ヴァリエールが平賀君に尋ねる。

「ああ、こんなの、見たことねえや」  
まったくだ。

あれが、浮遊大陸アルビオン通称『白の国』か。

高山病対策なんて知らんぞ。

大丈夫かな。

若干アルビオンに向けて不安になっていると。

「右舷上方の雲中より、船が接近してきます」

黒い船？確かにこっちに接近してく・・・おいおい、ありやあ、隣りで平賀君が「へえ、大砲なんかあるんか」と、何をのんきなすると、ミウ・ヴァリエールが「いやだわ、反乱勢・・・貴族派の軍艦かしら」と、

「ちよつと貴方達、何を暢気なこと言っているのよ」「何が？」

平賀君とミス・ヴァリエールが・・・他の面々まで似たような顔を。「あの船、旗を掲げてないじゃない」

「だから？」

俺とキュルケさん以外がキョトンとしている。

「つまりあれは『空賊』よ」

「くくく・空賊！？」「」「」

気づくの遅え。

後ろでは船員が「逃げる、取り舵いっぱい」「最近活発になってきているつてのは、本当だったのか」「にげるにげるにげるにげる」と騒いでいる。

シエリルさんが近づいて「どうする」と、聞いてくる。

「俺達は貴族、身代金の為に捕虜にされるか、最悪は・・・」

最悪は、死、か。

「みんな、固まっておけ。最悪、この船から飛び降り、フライカレビテーションで逃げるぞ」

「そんな、私達はアルビオンへ」

俺の指示に対し、ミス・ヴァリエールが状況も考えず今だアルビオンと言ってくるに対し

「もう、ルイズー！そんな状況じゃないでしょ。アルビオンに行くにしても死んでから行きたいの？」

「そつ、それは」

キュルケさんがミス・ヴァリエールを説得？する。

「シエリルさん、今、船に乗っている使い魔に静かにしているように、後、合図したら船外へ飛び出すよう言っといってくれ」

「わかった」

船外に行った後の要だからな。

俺1人だったら無茶できるんだが、相手の戦力もわからないし下手に動けない。

船は、空賊から遠ざかろうとしたがもうすでに遅く、空賊の黒船は併走していた。

黒船は1発、俺達が乗った船の前方に大砲を撃った。

ぼごん！と鈍い音がして、砲弾は雲の彼方へ飛んでいった。

こちらの船は徐々に速度を落とし、止まった。

さあ、どうするか。

あ、ワールド忘れてた・・・ま、いつか。

37 (後書き)

h a k i さん、36話の誤字指摘、ありがとうございます。  
今日中に修正させていただきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9101r/>

---

ゼロ魔転生生活

2012年1月1日21時48分発行